福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1229集

徳永Ｂ遺跡３

― 第４次調査報告 ―

2014
福岡市教育委員会

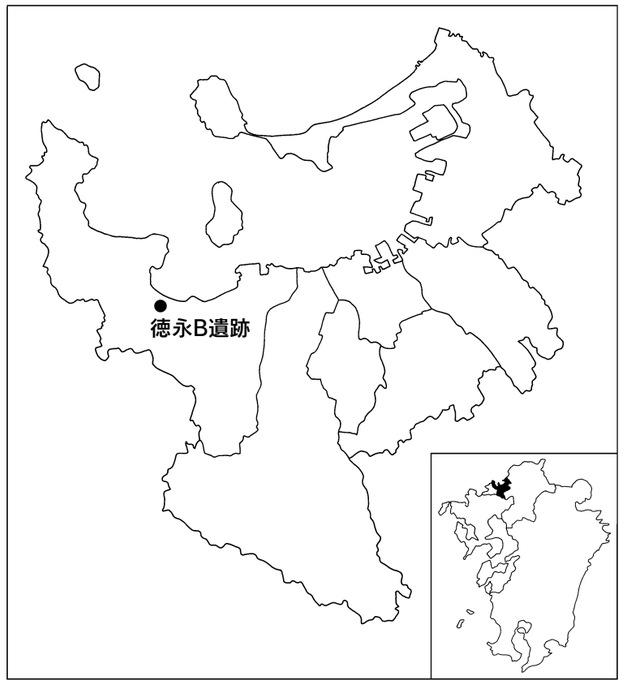
徳永Ｂ遺跡３　―第４次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第一二二九集
二〇一四　福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1229集

徳永Ｂ遺跡３

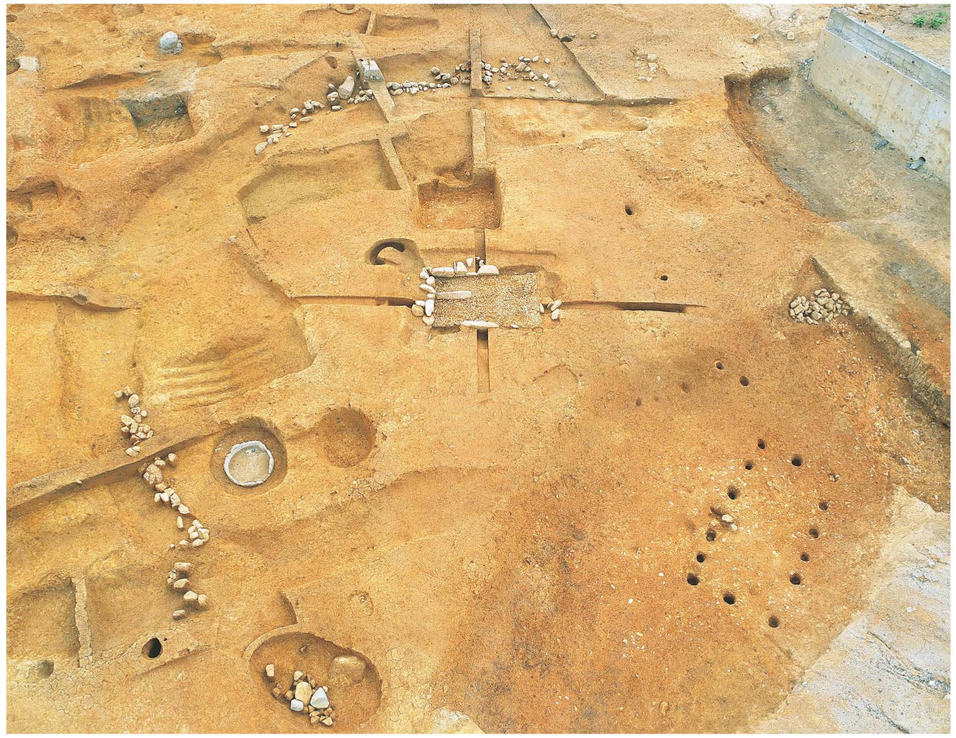
― 第４次調査報告 ―



遺跡略号　TOB-4
調査番号　1133

2014
福岡市教育委員会

（１）３・４号墳（北東から）



（２）３号墳（東から）

３号墳石室遺物出土（北から）

３号墳石室（北から）

3 号墳石室出土遺物

（１） ２区SX072・073出土遺物

（２） ２区SD049・SX068出土遺物

序

古くからさまざまな地域との文化交流を通じて発展を遂げてきた福岡市には、各地に先人たちの築いてきた数多くの歴史的遺産があります。それらを保護し、後世へと伝えていくことはわれわれの義務であります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な文化財が失われていることも事実です。本市では開発によりやむを得ず破壊されていく遺跡の記録保存を行い、広く公開するよう努めています。

本書は、伊都土地区画整理事業に伴い実施した徳永B遺跡第４次調査の成果を報告するものです。今回の調査では２基の古墳や中近世の集落跡が確認されました。特に、古墳からは豊富な副葬品が出土し、今宿古墳群の中での位置づけが注目されます。

本書が、埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまでご協力いただいた住宅都市局伊都区画整理事務所をはじめとする関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成26年３月24日

福岡市教育委員会
教育長　　酒井　龍彦

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区大字徳永において平成23年度から24年度にかけて発掘調査を実施した徳永Ｂ遺跡第４次調査の報告書である。
2．発掘調査と整理・報告書作成は、１区は板倉有大が、２区は板倉・井上繭子・福薗美由紀が、３区は福薗が担当した。
3．本書に掲載した遺構実測図の作成は、井上・板倉・福薗の他、朝岡俊也（福岡大学大学院生）が行った。
4．本書に掲載した遺物実測図の作成および挿図の製図は、井上・板倉・福薗・吉田大輔・井上加代子・大庭友子・副田則子が行った。
5．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、井上・板倉・福薗が行った。
6．各調査の基準座標は国土座標（日本測地系）で、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点を使用した。座標北は真北より0°19′西偏する。本書で用いる方位記号は全て座標北である。
7．遺構の呼称は、溝をSD、掘立柱建物をSB、土坑をSK、ピットをSP、その他の遺構をSXと略号化した。
8．遺物番号は各調査区での通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
9．今回の調査で検出された古墳２基については、徳永古墳群Ⅰ群３号墳、４号墳として新たに遺跡登録番号を付し、包蔵地として登録を行った。遺跡略号はTKK-I、登録番号は2886である。
10．本報告に関わる遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵し、保管・公開する予定である。
11．本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ－２を福薗、Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ－１を板倉、Ⅳを井上が行い、編集は福薗が行った。

遺跡名	徳永Ｂ遺跡	**調査次数**	第４次	**遺跡略号**	TOB-4
調査番号	1133	**分布地図図幅名**	周船寺120	**遺跡登録番号**	2585
申請地面積	130ha	**調査対象面積**	2700㎡	**調査面積**	１区（1018㎡） ２区（1143㎡） ３区（353㎡）
調査地	福岡市西区大字徳永地内			**事前審査番号**	13-1-233
調査期間	平成23（2011）年11月15日～平成24（2012）年８月31日				

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　１区の調査 …… 5
　1．調査の概要 …… 5
　2．調査の記録 …… 7
　　1）掘立柱建物（SB）
　　2）溝（SD）
　　3）土坑（SK）
　　4）その他の遺構
　3．小結 …… 14
Ⅳ　２区の調査 …… 15
　1．調査の概要 …… 15
　2．調査の記録 …… 15
　　1）溝（SD）
　　2）土坑（SK）
　　3）その他の遺構
　　4）古墳
　3．小結 …… 40
Ⅴ　３区の調査 …… 41
　1．調査の概要 …… 41
　2．調査の記録 …… 41
　　1）掘立柱建物（SB）
　　2）溝（SD）
　　3）土坑（SK）
　　4）その他の遺構・遺物
　3．小結 …… 46
Ⅵ　まとめ …… 47
　1．徳永古墳群Ⅰ群について …… 47
　2．徳永B遺跡の中世遺構について …… 50

挿図目次

第１図　徳永B遺跡と周辺遺跡（1/50,000）……３
第２図　徳永B遺跡第４次調査区位置図(1/1,000)…４
第３図　１区全体図（1/250）……６
第４図　SD平面図（1/200）およびSD・調査区土層実測図（1/50、1/100）……８
第５図　SB・SK実測図（1/80、1/30）……９
第６図　SD・SP出土遺物実測図（1/3）……10
第７図　SX出土遺物実測図（1/3）……12
第８図　１区出土石器実測図（1/1、1/3）……13
第９図　１区および第1次調査区の遺構配置図（1/500）……14
第10図　２区上面全体図（1/250）……16
第11図　２区下面全体図（1/250）……17
第12図　調査区土層実測図（1/100）……17
第13図　SD097・SK069実測図（1/50、1/30）……18
第14図　SD052・054実測図（1/50）……19
第15図　SD・SKほか出土遺物実測図（1/3）……20
第16図　SX出土遺物実測図（1/3）……21
第17図　SX306・包含層出土遺物実測図（1/3）……23
第18図　２区出土石器実測図（1/1）……24
第19図　３・４号墳・小石室・土壙墓平面配置図(1/100)……折り込み
第20図　３号墳実測図（1/80）……折り込み
第21図　３号墳周溝出土土器実測図（1/3）……25
第22図　３号墳石室実測図（1/30）……26
第23図　３号墳石室掘方実測図（1/30）……27
第24図　３号墳石室内遺物配置実測図（1/20、1/5）……28
第25図　３号墳石室出土鉄器実測図１（1/4、1/3）……30
第26図　３号墳石室出土鉄器実測図２（1/2）……31
第27図　３号墳石室出土滑石製臼玉実測図（1/1）……33
第28図　４号墳実測図（1/60、1/30）……35
第29図　４号墳石室実測図（1/30）……36
第30図　４号墳出土遺物実測図（1/1、2/3、1/3）……37
第31図　小石室実測図（1/20）……38
第32図　土壙墓実測図(1/20)……39
第33図　３区全体図（1/200）……42
第34図　SB120実測図（1/60）……43
第35図　SB121実測図（1/60）……44
第36図　SD007実測図（1/40）およびSK004・SK001・110出土遺物実測図（1/3）……45
第37図　その他の出土遺物実測図（1/3）……46
第38図　福岡市内出土鉄鉗実測図（1/8）……49

表 目 次

第１表　１区出土土器観察表……13
第２表　２区出土土器観察表……22
第３表　３号墳石室出土鉄器観察表……32
第４表　３号墳石室出土滑石製臼玉計測表……34
第５表　４号墳出土玉類観察表……36
第６表　３号墳石室出土玄武岩礫観察表……40

図版目次

巻頭図版１　⑴３・４号墳（北東から）
　⑵３号墳（東から）
巻頭図版２　３号墳石室遺物出土（北から）
巻頭図版３　３号墳石室（北から）
巻頭図版４　３号墳石室出土遺物
巻頭図版５　⑴２区SX072・073出土遺物
　⑵２区SD049・SX068出土遺物
【１区】
図版１　⑴調査区全景（西から）
　⑵調査区南側（北東から）
図版２　⑴調査区南側（東から）
　⑵調査区南壁東側土層（北から）
　⑶調査区南壁西側土層（北から）
図版３　⑴SK003（北から）
　⑵SK004（北から）
　⑶SK005（北から）
　⑷SD002中央部（南東から）
　⑸SD002西側（西から）
　⑹作業風景（西から）
図版４　出土遺物
【２区】
図版５　⑴上面全景（東から）
　⑵上面全景（南から）
図版６　⑴SX072（東から）
　⑵SX072調査前（東から）
　⑶SX072土層（東から）
　⑷SX072土層（南から）
　⑸SX073（南東から）
図版７　⑴調査区東壁南側土層（西から）
　⑵SX050・051土層（南東から）
　⑶調査区中央ベルト南側土層（東から）
　⑷調査区中央ベルト北側土層（東から）
　⑸SX068（東から）
　⑹SK071（東から）
図版８　⑴SK074（北から）
　⑵SK080（東から）
　⑶SK081（東から）
　⑷SD054・052（東から）
　⑸SD097（東から）
　⑹SK069（南東から）
図版９　⑴３号墳（南東から）
　⑵３・４号墳（北から）
図版10　⑴３号墳（東から）
　⑵３号墳石室検出（北から）
　⑶３号墳石室遺物出土（北から）
図版11　⑴３号墳石室東区南側遺物出土（東から）
　⑵３号墳石室東区北側遺物出土（東から）
　⑶３号墳石室西区北側遺物出土（西から）
　⑷３号墳石室西区南側遺物出土（西から）
　⑸３号墳石室西区蕨手刀子出土（北から）
　⑹３号墳石室西区北側臼玉・鉄線出土（北から）
図版12　⑴３号墳石室（南から）
　⑵３号墳石室（北東から）
図版13　⑴３号墳石室掘方（南から）
　⑵３号墳石室掘方（東から）
図版14　⑴３号墳石室西側土層（南から）
　⑵３号墳石室北側土層（東から）
　⑶３号墳周溝土層Ｄ（東から）
　⑷３号墳周溝土層Ｃ（東から）
　⑸３号墳周溝土師器壺出土（東から）
　⑹３号墳周溝土師器高坏出土（東から）
図版15　３号墳石室出土鉄器
図版16　⑴３号墳出土鉄線（拡大）
　⑵３号墳石室出土滑石製臼玉
　⑶３号墳周溝出土土器
　⑷２区出土遺物
図版17　⑴調査区北側上面（南から）
　⑵SX306（東から）
　⑶SX306（南から）
　⑷４号墳周溝（西から）
　⑸４号墳周溝（南西から）
図版18　⑴４号墳石室検出状況（北から）
　⑵４号墳石室完掘状況（北西から）
　⑶４号墳石室奥壁（北から）
　⑷４号墳石室（北東から）

⑸４号墳石室（北から）
⑹４号墳石室掘方
図版19　⑴４号墳周溝内土師器出土状況（南西から）
⑵４号墳周溝内遺物出土状況（南から）
⑶４号墳周溝断面（南西側）
⑷４号墳周溝（南東側）
⑸４号墳全景（北東から）
図版20　⑴調査区上空から南側を望む
⑵調査区上空から西側を望む
⑶３・４号墳・小石室全景（北東上空から）
⑷調査区上空から東側を望む
⑸３・４号墳・小石室全景（南上空から）
図版21　⑴小石室（西から）
⑵小石室掘方（北から）
⑶小石室（南東から）
⑷土壙墓（南西から）
⑸土壙墓（北東から）
⑹土壙墓掘方（北東から）
図版22　⑴SX306出土遺物
⑵４号墳出土玉類
⑶４号墳周溝出土土師器
⑷４号墳埋土出土石鏃
【３区】
図版23　調査区全景（南から）
図版24　⑴SK110（南から）
⑵SK001（南から）
⑶SD007（南から）
⑷出土遺物
⑸SK110出土遺物
⑹SK001出土遺物
⑺SK004出土遺物

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

本書は、伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施された、徳永Ｂ遺跡第４次調査の発掘調査報告書である。伊都土地区画整理事業は、福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。

1996（平成８）年11月、都市整備局（現　住宅都市局）伊都区画整理事務所から、事業地内の埋蔵文化財について事前審査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、事業地全体について遺跡の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘地点の選定を行った。そして、高台の事業地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲確定や、かつての潟湖と考えられる今宿砂丘後背湿地などの古地形復元を目的として、1996年12月～ 1997年２月、計68箇所の試掘調査を実施した。この結果、事業地南部の低丘陵や沖積低地上を中心として埋蔵文化財の分布が確認され、事業地北部の大半は砂丘後背湿地に当たり埋蔵文化財分布の可能性はないと判断された。その他、各地点の包蔵地範囲内については、工事工程との調整を行いながら必要範囲について随時試掘調査を行い、遺構密度など埋蔵文化財の内容を確認したうえで、本調査に着手するという手順をとることとなった。本調査は2002（平成14）年度の今宿五郎江遺跡の調査から始まった。以後2012（平成24）年度まで継続して発掘調査を行った。

本書で報告する徳永B遺跡第４次調査は、試掘調査を2011（平成23）年６月13日～ 15日、８月４日・５日に実施し、対象地の約３分の１で遺構や遺物の散布を確認した。この試掘結果により、本調査を2011年11月15日～ 2012（平成24）年８月31日に実施した。整理・報告書作成は、2013（平成25）年度に行った。また、2012年６月９日に現地説明会を行い、約200名の市民の参加があった。

２．調査の組織

調査委託：福岡市住宅都市局伊都区画整理事務所
調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成23・24年度資料整理：平成25年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財第２課	課長	田中壽夫（23年度）
（現・埋蔵文化財調査課）	課長	宮井善朗（24･25年度）
	調査第２係長	菅波正人（23･24年度）
	調査第２係長	榎本義嗣（25年度）
庶務担当：埋蔵文化財第１課	管理係長	和田安之（23～25年度）
（現・埋蔵文化財審査課）	管理係	古賀とも子（23年度）
		川村啓子（24・25年度）
調査担当：埋蔵文化財第２課	第２係	井上繭子（24・25年度）
（現・埋蔵文化財調査課）		板倉有大（23～25年度）
		福薗美由紀（24・25年度）

なお、教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課は、組織改編のため平成24年４月１日付で経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課に移管した。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、九州大学大学院准教授辻田淳一郎氏、佐賀大学准教授重藤輝行氏には古墳の調査に関する教示を、福岡大学教授桃崎祐輔氏、奈良文化財研究所諫早直人氏には出土鉄器に関する教示をいただいた。ここに感謝申し上げます。

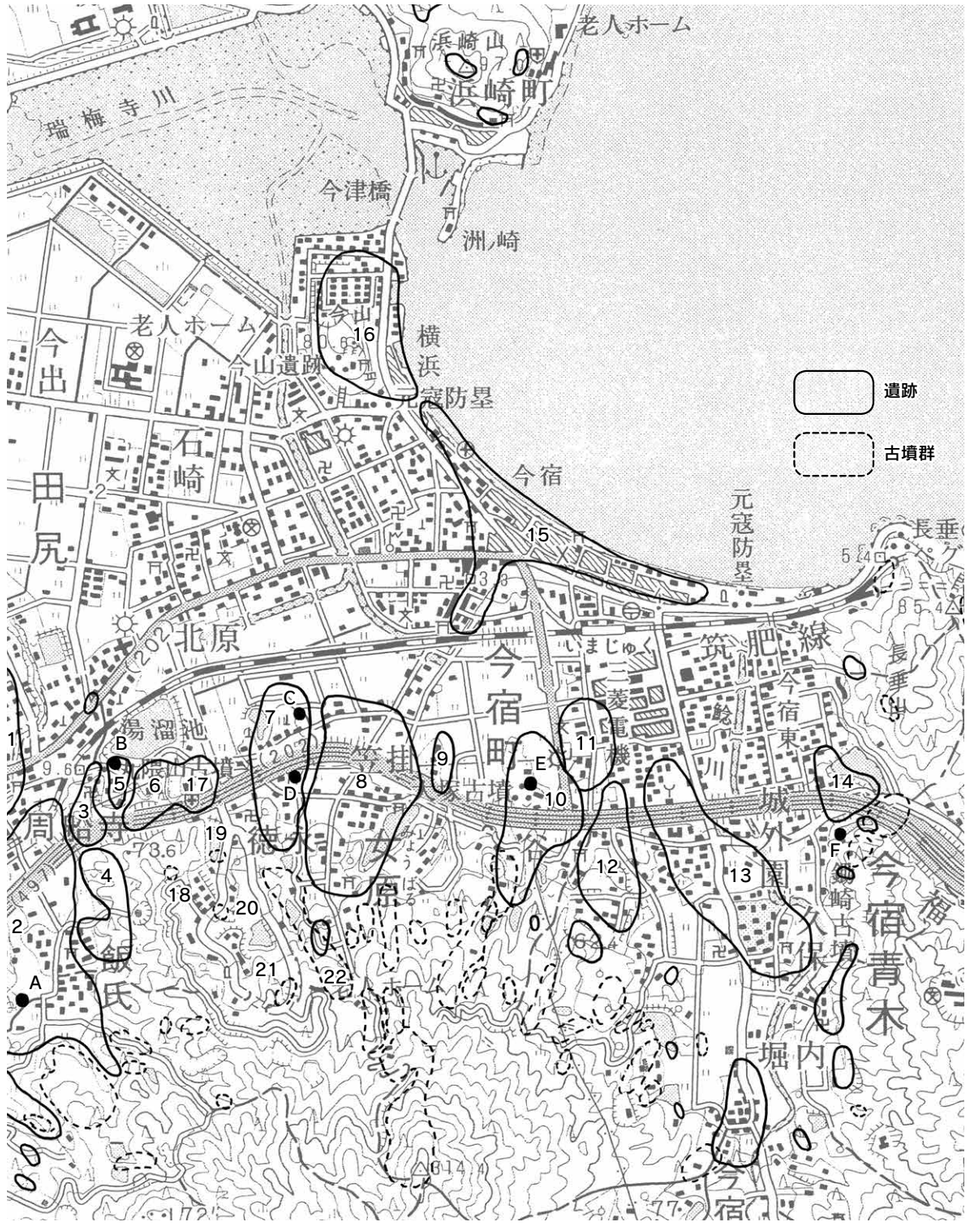
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境

徳永Ｂ遺跡は糸島平野と早良平野に挟まれた今宿平野の西端に位置する。今宿平野は、東を叶岳から長垂丘陵、西を瑞梅寺川より限られた狭い範囲で、糸島平野の東端にあたり、扇状から三角州平野となっている。南側は怡土城の占地する高祖山から北へ延びる丘陵と谷部からなり、北は博多湾の左回転流により形成された弓状砂丘が横浜から長垂の海岸線であり、その南側は後背湿地、沖積地となっている。今山から長垂間の今津湾に面する海浜部では、弓状砂丘が縄文時代後半期以降に形成され、その後背地には近世の開拓事業まで潟湖ないし干潟が拡がっていた。本調査区南の高祖山山麓は、北流する小河川の開析により八手状に丘陵尾根が派生する地形をなし、平野東部では叶岳との間に扇状地が発達している。徳永Ｂ遺跡は、高祖山から派生する丘陵の先端、中位段丘上に位置する。

そのような地形に立地する本遺跡の周辺には数多くの遺跡が存在している(第１図)。その中でも４世紀後半代から築造が開始され、７世紀まで連綿と続く、今宿平野の首長墓群である国史跡今宿古墳群は、東から、鋤崎古墳、大塚古墳、山ノ鼻１号墳、若八幡宮古墳、丸隈山古墳、兜塚古墳、飯氏二塚古墳の７基から成り立っている。そのなかで徳永Ｂ遺跡は、東側には山ノ鼻１号墳、南側には若八幡宮古墳といった４世紀代の前方後円墳の近くに位置し、今回の調査で検出された古墳は、今宿古墳群の中での位置づけが注目される。

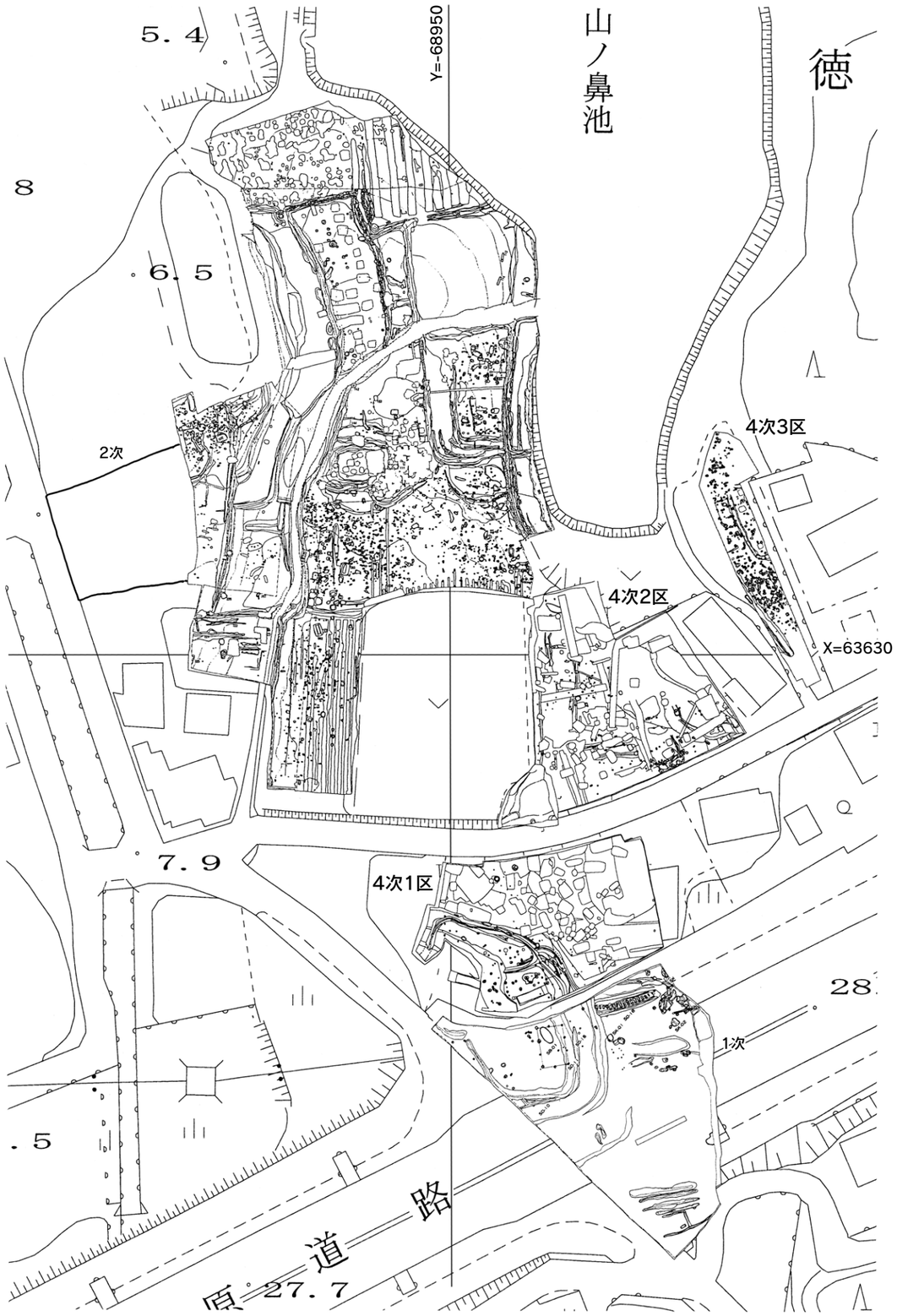
これまで徳永Ｂ遺跡では、1988年に行われた徳永遺跡Ⅰ区の調査を皮切りに、４次にわたる調査が行われている。徳永遺跡は、一般国道202号線バイパス建設に伴い試掘調査を実施した結果確認された遺跡である。第１次調査時（Ⅰ～Ⅳ区）は、西の谷を間にして対面する丘陵裾の調査区まで含めて「徳永遺跡」と呼称した。その後、福岡市文化財分布地図改訂２版の編集に際して整理を行い、西の丘陵裾部について「徳永Ａ遺跡」(登録番号:福岡市2584）とし、谷を隔てた東側、本地点を含む段丘上の埋蔵文化財包蔵地について「徳永Ｂ遺跡」(登録番号:福岡市2585）と呼称、登録することとなった。徳永Ａ遺跡では谷部包含層から越州窯系青磁、邢州窯系青磁など初期輸入陶磁器と緑釉陶器が多量に出土した点が注目され、羽口や瓦も出土している。これらの出土遺物と「周船寺」という地名から、平安時代に大宰府が管轄していた主船司との関連が指摘されている。これまで、徳永Ａ遺跡では2011年度までに第７次調査が実施されている。

徳永Ｂ遺跡第１次調査区では、中世の土坑、方形区画溝、道路状遺構が検出され、遺物は弥生時代の今山産石斧、黒曜石製石鏃、弥生土器のほか須恵器や土師器、龍泉窯系青磁など各時代にわたり少量の遺物がみつかっている。また、第２次調査では、縄文時代中期の阿高式土器一括廃棄、古墳時代から中世までの居住遺構のほかに、焼土坑、鉄滓廃棄土坑といった生産遺構も確認された。出土遺物は、縄文土器、土師器、黒色土器、輸入陶磁器および石錘等の石製品がある。第３次調査地点では、調査の結果それまで存在すると想定されてきた山ノ鼻２号墳は、存在した可能性はないものと報告されている。しかしその他に５世紀代の円墳２基と、木棺墓・石蓋土坑墓が周囲に分布する古墳時代中期初頭前後の墓域であることが明らかになった。円墳は径約14mを測り、周囲に葺石が巡る。埋葬主体は墳丘の削平のため遺存していなかった。また、２基の木棺墓は長さ約200cmで、鉄刀、ガラス小玉などが副葬されていた。今回の第４次調査においては５世紀代の円墳２基と土壙墓が確認された。今宿平野の戦国時代には、小規模ではあるが、屋敷群が面的に展開しており、当該期の造成は、ほぼそのまま現況の地形につながっていたようである。徳永遺跡第１次調査で検出されたように、今回の第４次調査１区でも第１次調査から続く中世の方形区画溝および掘立柱建物跡が見つかっており、当該期の集落の様相が次第に明らかになってきている。



1 周船寺遺跡　2 飯氏遺跡　3 蓮町遺跡　4 飯氏引地遺跡　5 丸隈山遺跡　6 徳永A遺跡　7 徳永B遺跡
8 女原遺跡　9 女原笠掛遺跡　10 大塚遺跡　11 今宿五郎江遺跡　12 谷遺跡　13 青木遺跡　14 鋤崎遺跡
15 今宿遺跡　16 今山遺跡　17 徳永古墳群A群　18 徳永古墳群B群　19 徳永古墳群C群　20 徳永古墳群D群
21 徳永古墳群G群　22 徳永古墳群H群
A 兜塚古墳　B 丸隈山古墳　C 山ノ鼻1号墳　D 若八幡宮古墳　E 大塚古墳　F 鋤崎古墳

第１図　徳永B遺跡と周辺遺跡（1/50,000）



第２図　徳永B遺跡第４次調査区位置図（1/1,000）

Ⅲ　１区の調査

１．調査の概要

１区は南北に長い徳永Ｂ遺跡包蔵地の北半南側に位置し、４次調査で最も南側（山側）の調査区となる。周辺では、南側の徳永Ｂ遺跡第１次調査（8808）で中･近世遺構が、北西側の第３次調査（0922）で円墳２基が確認されている。平成23年10月12日に埋蔵文化財第１課（現埋蔵文化財審査課）が試掘調査（23-195）を行い、１次調査の遺構面が北側に続いていることを確認した。東側については、平成23年６月、11月、平成24年２月に同２課（現埋蔵文化財調査課）が試掘調査（23-143）を行い、南の若八幡宮古墳の丘陵と北東の山ノ鼻１号墳の丘陵の間の谷を確認したが、全体に丘陵を削り、谷を埋めた状態で、遺構・遺物は検出されなかった。西側については、南西方向に谷へ向かう傾斜面で、谷堆積上に近世以降の耕作土が形成されている。さらに西側は平成23年３月２日に同１課が試掘調査（22-349）を行い、谷の中で遺構・遺物が出土しないことを確認している。第３次調査区の南側の高まりは一字一石経塚があったと伝えられる場所で、古墳の可能性も指摘されていた。古墳関係の遺構・遺物検出の可能性も想定した上で、１区の調査対象は約1,500㎡とした。

調査は平成23年11月15日から開始し、外柵および機材倉庫の設置の後、バックホーで表土を除去した。その結果、調査区の東側は丘陵を平坦に造成した面で、現代建築物の構築・解体によって攪乱を受けており、造成による削平をまぬがれた西側の谷への傾斜面にのみ遺構・遺物が確認された。調査対象範囲の東西を一部対象外とし、調査面積は1,018㎡とした。

調査に用いた座標は、伊都区画整理事務所が北側に設置した基準点から、調査担当者が高波測距儀で200mほど移動させ、それをもとに任意の10mグリッドを設けた。写真は、6×7判、35mm判のモノクロとリバーサルフィルム、デジタルカメラ（NikonD70、Canon EOS 60D）を使用し、調査区全景は高所作業車上から撮影した。図面は1/100調査区周辺図、1/20遺構平面図、1/20土層図、1/10遺構図を作成した。レベルは座標同様に調査区北側から200mほど移動させ、標高12mを機械高とした。遺構番号は、調査した順に通し番号を付け、報告でもそのまま用いている。溝出土遺物については、便宜的に２～３区に分けて取り上げ、包含層出土遺物については基本的に一括で取り上げた。出土遺物は現場で洗浄・乾燥させ、調査は平成24年１月13日に終了した。

調査区東側の削平面は標高約10.8～12m、西側遺構検出面の南西端で標高約10.1m、西側谷は標高約９mまで掘削した。西側遺構検出面の基本層序は、表土→包含層（耕作土）→遺構検出面となり、遺構検出面は、東側では基盤の花崗岩バイラン土、西側では無遺物の谷堆積土となる。谷堆積土面での遺構検出はやや困難であった。遺構は比較的浅く、上面は包含層形成時に削平されていると考えられる。

遺構の内容は、溝４条、土坑３基、ピット、包含層SXなどで、遺構の時期は、古いもので中世後期である。溝は地形の傾斜にあわせる形で矩形に形成され、下層に砂が堆積し、SD002西側末端には小児人頭大の花崗岩自然礫が集中して堆積していた。ピットは、相互の関連性が明確でなかったが、無庇の掘立柱建物１棟SB100を想定した。これら集落跡の上面に形成された包含層は、炭や砂を含むしまりのない暗褐色土で耕作土と考えられる。東側の削平面で検出した土坑２基は、攪乱土とも中・近世遺構埋土とも異なる埋土で、遺物がなく時期不明である。SK003は井戸の可能性もある。

遺物は、近世陶磁器、貿易陶磁器、国内産雑器、古墳時代須恵器、石器などがコンテナケース３箱分出土した。以下の報告で、出土土器の詳細については第１表を参照されたい。

第３図　１区全体図（1/250）

２．調査の記録

１）掘立柱建物（SB）

SB100（第５図、図版１）　２×２間（3.4×3m）、北北西軸の無庇掘立柱建物で、北と南の中央柱穴を欠く。柱穴は径30 ～ 40cm、深さ40 ～ 50cmを測る。図化に耐えない土師質土器が少量出土した。中世後期の溝に切られることから、時期は中世後期以前と考える。

SP044（第４図、図版１）　径30 ～ 35cm、深さ37cmを測る柱穴である。SD043に切られる。出土遺物（第６図、図版４）は土師器坏（15）で、底外面に回転糸切り、板目圧痕が残る。遺構の時期は、中世後期である。

その他ピット　図化に耐えない土師質土器、須恵器、青磁などが少量出土した。径40cm程度の小型ピットは中世後期の掘立柱建物跡を構成すると考える。径60 ～ 70cm、深さ40 ～ 50cmの大型ピットがSD009に沿って並んでおり、溝に関わる柱列の可能性がある。他の小型ピットや溝を切っており、埋土も灰色味をおびた砂質土であるため、SD009と同様に近世の遺構と考えられる。

２）溝（SD）

SD008・010・011（第４図、図版１・２）　北西向き（SD008・011）から南西向き（SD010）に進路を変えて直線的に走る断面逆台形・緩いU字形の溝で、残存幅95 ～ 128cm、深さ10.4 ～ 20cmを測る。埋土は褐色砂質粘土で、当初SD008上層をSD011、SD002を挟んで西側をSD010として調査したが、同一溝として報告する。SD002・042に切られる。

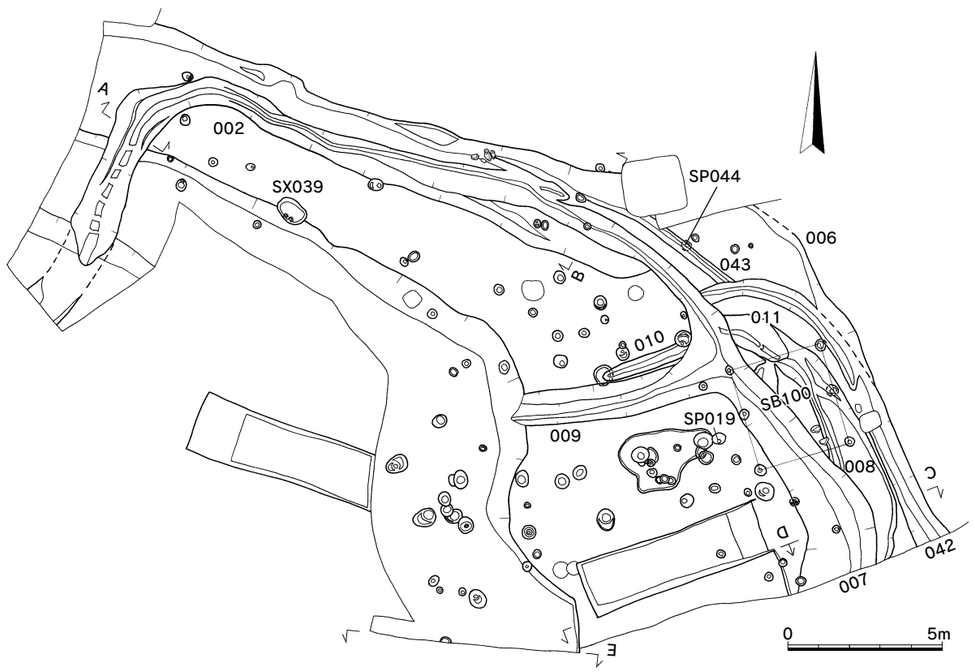
SD008出土遺物（第６図、図版４）　１は青磁碗で、施釉はやや厚い。２は陶器擂鉢で、口縁部は直立し外面に断面三角形の細い突帯が貼り付けられる。口縁部を打ち欠く。ほかに土師質土器が少量出土した。SD011からは図化に耐えない土師質土器、須恵器が少量出土し、SD010からは遺物が出土しなかった。

SD002・007・009（第４図、図版１～３）　北西向き（SD007・002）から東向き（SD009）、南西向き（SD002西区）へ分岐する、断面形が緩やかなU字を呈す溝で、幅130 ～ 220cm、深さ34 ～ 40cmを測る。埋土は褐色シルト質粘土で、下層の砂堆積、上層の粘質土堆積から流水から滞水への環境変化を読み取れる。当初、西側をSD002、中央をSD009、東側をSD007として調査したが、同一溝として報告する。SD002西区流末は、幅30 ～ 50cmほどの間隔で階段状に下がっており、10 ～ 20cmの花崗岩・石英・砂岩の自然角礫が集中して堆積していた。間層を挟みながらも比較的短期間に堆積したようで、土石流などの自然堆積もしくは人為的な礫の投棄が考えられる。

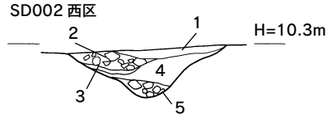
SD002出土遺物（第６図、図版４）　３は須恵器坏蓋で、SD007出土破片と接合した。４は陶器碗で、西側礫層以下から出土した。胴部内面に沈圏線がある。５は青磁碗で、口縁部に雷文帯をもつ。６は白磁碗で、高台部は露胎で、高台内の削り出しは浅い。７は粉青沙器瓶で、頸部下端を境に横位と縦位に白土を象嵌する。８は陶器擂鉢で、口縁部は直立し、外面に断面三角形の細い突帯が貼り付けられる。口縁部を打ち欠いている。９・10は瓦質土器鍋で、口縁部はキャリパー状に内傾する。外面にはススが付着する。10の内面にはハケメ調整痕が残る。11・12は土師質土器鍋で、外面にススが付着する。11は内面には細かいハケメが残る。12は吊り輪孔部分である。ほかに土師質土器、須恵器、陶磁器などがコンテナケース1箱出土した。

SD007出土遺物（第６図、図版４）　13は白磁碗で、畳付は露胎、施釉には細かい貫入とピンホールが認められる。ほかに土師質土器、須恵器、陶磁器などが少量出土した。

SD009出土遺物（第６図、図版４）　14は染付碗で、畳付から高台内が露胎、施釉は厚く、大きな貫入が認められる。畳付から高台外面にかけて淡褐色の下地釉がみられる。畳付は打ち欠いている。



A　SD002 西区

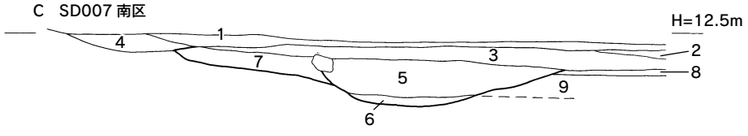


1．褐色シルト粘土　　2．1層に径5～15cm亜角円礫含む
3．赤褐色シルト粘土(地山)ブロック含む　4．1層と同質
5．径10cm亜円礫含む褐色シルト粘土

B　SD002 中区

1．SX001。にぶい黄褐色シルト粘土
2．SD002。褐色シルト粘土。橙色土小ブロック、マンガン、砂粒多い。
　径10cm亜角礫含む
3．SD043。褐～明褐色シルト粘土混土。径1cm炭少なく含む。

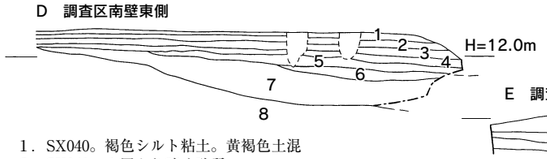
C　SD007 南区



1．褐色シルト粘土。黄褐色シルト粘土ブロック含む。　　2．褐色シルト粘土。1層より暗く砂質。炭含む
3．SX001.暗褐色砂質粘土。砂粒・炭多い　　4．SD042.にぶい黄褐色～灰黄褐、褐灰色シルト
5．SD007.褐色シルト粘土。砂粒・炭含む。粘性やや強い。　　6．褐色粘土。5層より砂質弱く、黄色み強い
7．SD008.褐色砂質粘土。マンガン含む。砂粒多い。　　8．褐色シルト粘土　　9．地山。明褐色粘土

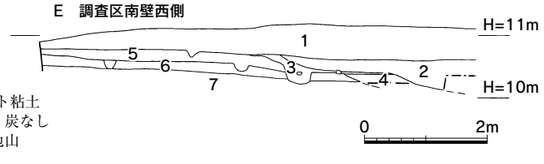
0　1m

D　調査区南壁東側



1．現代耕作土　　2．褐色砂質粘土。砂・炭多い。しまり弱い
3．明褐色粘土。褐灰色粘土、炭含む　　4．褐色粘土。炭含む
5．SX022。明褐色粘土。暗褐色土含む　　6．SX023。黒褐色粘土
7．褐色粘土。暗褐色粘土小ブロック、炭を含む。谷埋積土

E　調査区南壁西側

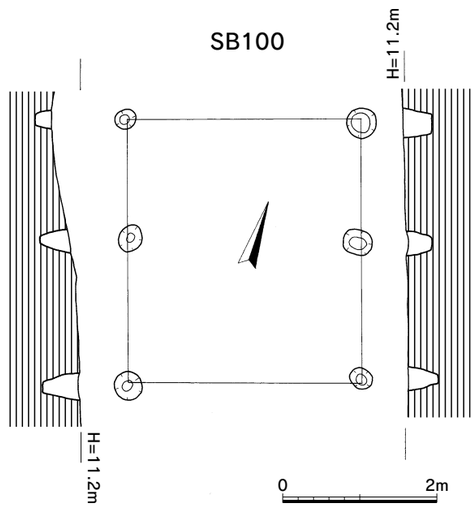


1．SX040。褐色シルト粘土。黄褐色土混
2．SX041。1層より暗く砂質
3．SX001。.暗褐色砂質粘土。炭多い　4．SX047。褐色シルト粘土
5．褐色粘土。炭を含む　　6．褐色粘土。マンガン多く含む。炭なし
7．褐色粘土。マンガン含む。谷埋積土　　8．明褐色粘土。地山

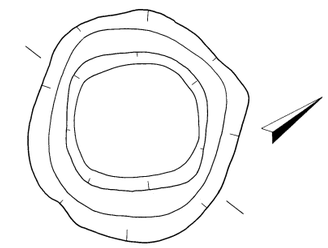
0　2m

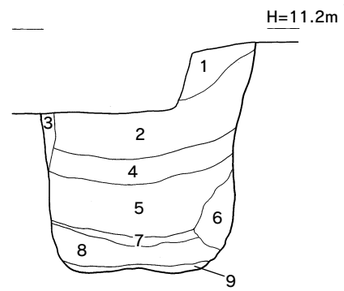
第４図　SD平面図（1/200）およびSD・調査区土層実測図（A～Cは1/50、D・Eは1/100）

SB100

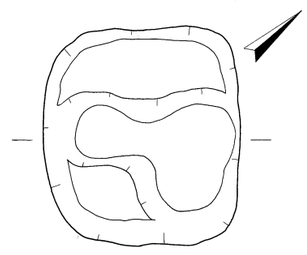


SK003

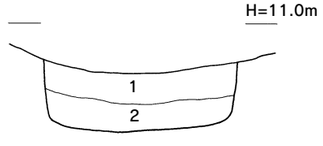




SK004

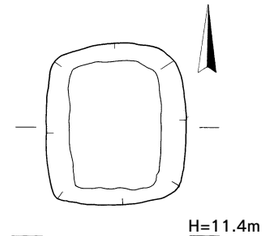


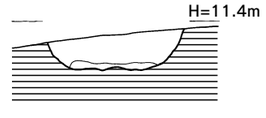
1．褐色シルト粘土。炭、マンガン含む　　2．1層より砂質強い。炭少
3．2層と明褐色砂質粘土（地山）混土　　4．黄褐色砂質粘土
5．黄褐色シルト粘土。径1cm炭含む　　6．黄褐色砂質粘土。炭少
7．黄褐～褐色シルト粘土　　8．黄褐色、明褐色砂質粘土混土
9．8層より地山ブロック多い



1．褐色シルト粘土。炭含む
2．1層と明褐色砂質粘土（地山）混土

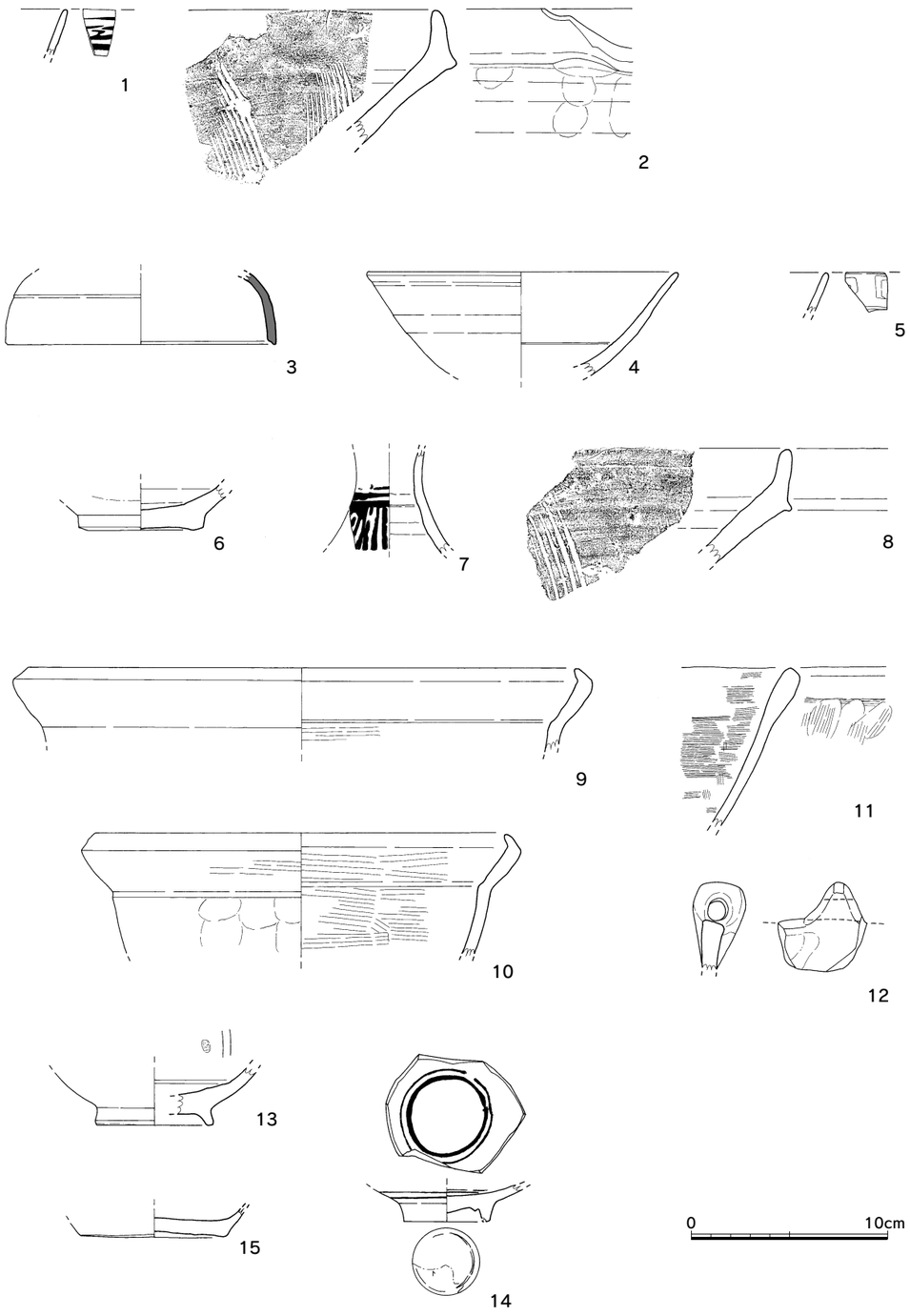
SK005





0　1m

第５図　SB・SK実測図（SBは1/80、SKは1/30）



1･2 SD008　3～12 SD002　13 SD007　14 SD009　15 SP044

第６図　SD・SP出土遺物実測図（1/3）

ほかに土師質土器、須恵器、陶磁器、黒曜石の小型石核と剥片が少量出土した。

SD042（第４図、図版１・２）　北西から南東へ向きを変えて走る断面形が緩いU字形の溝で、残存幅74 ～ 136cm、深さ20 ～ 30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐、褐灰色シルトである。SD043を切り、SD002に切られる。遺物は一部SX006として取り上げた。図化に耐えない土師質土器、瓦質土器、陶器が少量出土した。

SD043（第４図、図版１・２）　北西方向へ直線的に走る断面形が緩いU字形の溝で、幅35 ～ 40cm、深さ3cmを測る。埋土は褐～明褐色シルト粘土混土である。SP044を切り、SD002・043に切られる。遺物は一部SD042として取り上げた。図化に耐えない土師質土器が少量出土した。

３）土坑（SK）

SK003（第５図、図版３）　平面隅丸方形の土坑で、長さ112cm、幅100cm、深さ116cmを測る。熱破砕痕のある黒曜石剥片1点が出土した。

SK004（第５図、図版３）　平面隅丸方形の土坑で、長さ105cm、幅96cm、深さ44cmを測る。遺物は出土しなかった。

SK005（第５図、図版３）　平面隅丸方形の土坑で、長さ79cm、幅68cm、深さ18cmを測る。図化に耐えない土師質土器、染付が少量出土した。染付は光沢が強く近世末期と考えられる。

４）その他の遺構

SX001（第４図、図版２）　SD002上の包含層で、土質はにぶい黄褐色シルト粘土～暗褐色砂質粘土、厚さ10 ～ 15cmを測る。

出土遺物（第７図、図版４）　16は白磁小碗で、施釉は薄い。17は染付小碗で、呉須の発色が悪く、濁った紺色を呈す。18は染付碗で、畳付から3㎜ほどの高さで砂目がつく。19は陶器碗で、高台から底部は露胎、見込は釉剥ぎ。釉には細かい貫入が認められ、釉際は赤褐色となる。20は瓦質土器足鍋で、内面にハケメ、外面に格子目タタキの跡が残る。21は土師質土器鍋で、吊り輪孔の突起がつく。口縁部外面に炭化物が付着する。22は土師質足鍋の足部である。ほかに土師質土器、須恵器、陶磁器、黒曜石砕片1点などがコンテナケース1箱出土した。

SX006（第４図、図版２）　SD002上、SX001下の包含層で、土質は褐色･明褐色シルト粘土混土、厚さ10cmを測る。

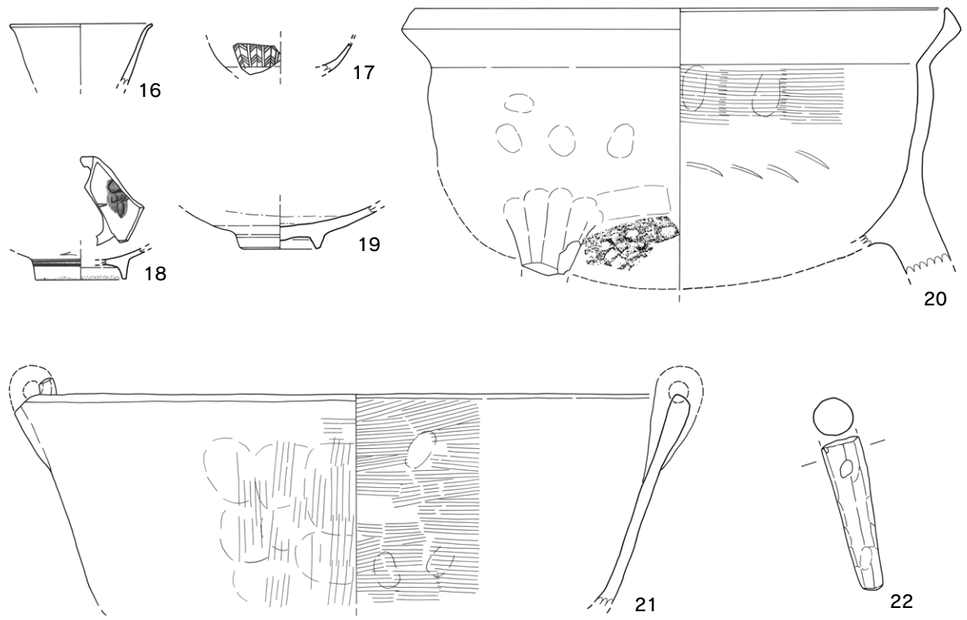
出土遺物（第７図、図版４）　23は白磁皿で、底部外面は露胎で、釉は薄く、ピンホールがみられる。24･25は土師質土器内耳鍋で、内耳は両側に刺突があるが、貫通しない。外面にヘラ刻みがある。外面には炭化物が付着する。25は、内面に炭化物が付着する。26・27は土師質土器鍋で、内面はヨコハケメで仕上げ、外面に炭化物が付着する。28は瓦質土器釜で、鍔下方に炭化物が付着する。29は瓦質土器鉢である。ほかに土師質土器、瓦質土器、青磁などがコンテナケース1箱出土した。

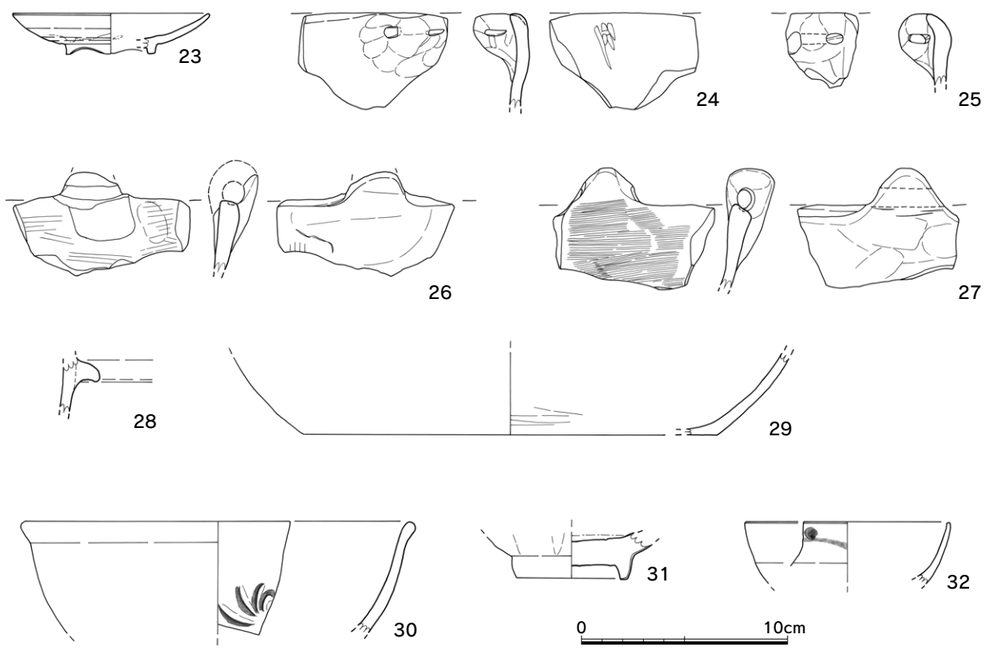
SX023（第４図、図版２）　西側下段の耕作土最下層で、土質は黒褐色粘土、厚さ15cmを測る。

出土遺物（第７図、図版４）　30は青磁碗で、釉は厚く、大きい貫入がみられる。内面文様は片切彫の花文である。ほかに土師質土器などが少量出土した。

SX041（第４図、図版２）　SX001上の包含層で、土質は暗い褐色砂質粘土、厚さ7 ～ 12cmを測る。

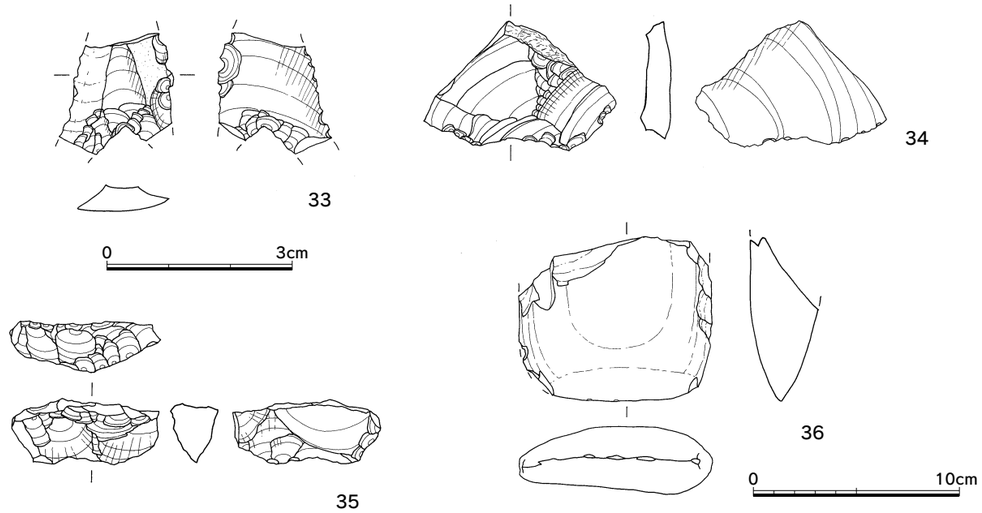
出土遺物（第７図、図版４）　31は青磁碗で、釉は厚く、際が茶色に発色している。外面は畳付まで施釉され、高台内のみ露胎、見込は円形に釉を剥ぐ。ほかに土師質土器、須恵器、陶磁器などが少量出土した。





16～22 SX001　23～29 SX006　30 SX023　31 SX041　32 撹乱

第７図　SX出土遺物実測図（1/3）



33 SX039　34 SX023　35 SP019　36 SD008

第８図　１区出土石器実測図（33～35は1/1、36は1/3）

第１表　１区出土土器観察表

挿図	番号	図版	遺　構	種類	器種	残存	法量（cm）	胎　　土	焼成	色　　調
6	1	4	SD008	青磁	碗	口縁部片	－	白・黒色の細砂をわずかに含む。	良好	胎土:黄色がかった灰白色。釉:オリーブ黄色
6	2	4	SD008	陶器	擂鉢	口縁部片	－	白色粗砂、黒･赤色細砂を多く含む。	良好	外面：褐灰色。内面：にぶい赤褐色
6	3	4	SD002中区南上層＋SD007	須恵器	坏蓋	1/8	復元口径13.8	白・黒色の細・中砂を含む。	良好	明灰色
6	4	4	SD002　西区礫層以下	白磁	碗	1/6	復元口径15.9	白・黒・赤色の細砂含む。	良好	胎土：淡黄橙色。釉：黄色味おびた灰白色
6	5	4	SD002	青磁	碗	口縁部片	－	白・黒色の細砂含む。	良好	胎土：浅黄橙色。釉：オリーブ灰色
6	6	－	SD002	白磁	碗	高台部	高台径6.4	白・黒色の細砂わずかに含む。	良好	胎土：淡灰色。釉：灰白色
6	7	4	SD002	粉青沙器	瓶	頸部片	復元頸径3.3	白・黒・褐色の細砂含む。	良好	胎土：灰色。釉：オリーブ灰色
6	8	4	SD002　西区礫層以下	陶器	擂鉢	口縁部片	－	白色粗砂、白･黒色細砂を多く含む。	良好	橙色
6	9	4	SD002	瓦質土器	鍋	1/8	復元口径28	白色粗砂、白･黒色細砂を多く含む。	良好	外面：灰黄褐色。内面：灰黒色
6	10	4	SD002　東区礫上層	瓦質土器	鍋	1/8	復元口径21	白色粗砂、白･褐色細砂を多く含む。	良好	淡灰色
6	11	4	SD002	土師質土器	鍋	口縁部片	－	白色粗砂、白･黒色細砂を多く含む。	良好	橙色
6	12	4	SD002	土師質土器	鍋	把手片	孔径1	白色粗砂、白･赤色細砂を多く含む。	良好	橙色
6	13	4	SD007	白磁	碗	高台1/3	復元高台径6	白・黒・褐色の細砂わずかに含む。	良好	胎土：淡黄色。釉：やや青緑色がかった灰白色，透明
6	14	4	SD009	染付	碗	底部	高台径4.5	砂粒をほとんど含まない。	良好	胎土：淡灰色。釉：青色がかった白、透明、ガラス質
6	15	4	SP044	土師器	坏	底部	底径7.6	白色粗砂、赤色細砂を含む。	良好	橙色
7	16	－	SX001	白磁	小碗	1/8	復元口径7	黒色細砂をわずかに含む。	良好	胎土：白色。釉：灰色がかった白色、透明
7	17	4	SX001	染付	小碗	1/10	－	砂粒をほとんど含まない。	良好	胎土：白色。釉：灰色がかった白色、透明
7	18	4	SX001	染付	碗	高台1/3	復元高台径4.6	黒色細砂をわずかに含む。	良好	胎土：白色。釉：青色がかった白色、透明
7	19	4	SX001(SD002混在)	陶器	碗	1/2	復元高台径6	黒色細砂をわずかに含む。	良好	胎土：にぶい橙色。釉：灰オリーブ色
7	20	4	SX001(SD002混在)	瓦質土器	足鍋	1/8	復元口径26	白色粗砂、黒・褐色細砂を含む。	良好	にぶい黄橙色～淡灰色
7	21	4	SX001(SD002混在)	土師質土器	鍋	1/7	復元口径32.4	白色粗砂、黒･赤色細砂を多く含む。	良好	外面：黒褐色。内面：橙色
7	22	－	SX001(SD002混在)	土師質土器	足鍋	足部	径1.9	白色粗砂、黒･赤色細砂を多く含む。	やや不良	淡橙色～黄色がかった灰白色
7	23	4	SX006	白磁	皿	1/4	復元口径9.6、復元高台径4.4、器高2	黒色細砂をわずかに含む。	良好	胎土：灰白色。釉：灰白色、透明
7	24	4	SX006	土師質土器	内耳鍋	口縁部片	－	白色粗砂、黒･赤色細砂、雲母を多く含む。	良好	橙色
7	25	－	SX006	土師質土器	内耳鍋	口縁部片	－	白・黒・赤色粗砂を含む。	良好	橙色
7	26	4	SX006	土師質土器	鍋	口縁部片	－	白色粗砂、黒･赤色細砂、雲母を多く含む。	良好	灰黄褐色
7	27	4	SX006	土師質土器	鍋	口縁部片	－	白色粗砂、黒･赤色細砂を多く含む。	良好	橙色
7	28	4	SX006	瓦質土器	釜	胴部片	－	白・黒色細砂、雲母を含む。	良好	外面：灰黄褐色。内面：黒褐色
7	29	4	SX006	瓦質土器	鉢	1/5	復元底径20	白色粗砂、黒・褐色細砂を含む。	良好	灰褐色
7	30	4	SX023	青磁	碗	1/8	復元口径19.2	白・黒・褐色微砂を含む。	良好	胎土：やや黄色がかった灰白色。釉：灰オリーブ色
7	31	4	SX041	青磁	碗	高台片	復元高台径5.4	白・黒・褐色細砂を含む。	良好	胎土：橙色。釉：濁った明オリーブ灰色、不透明
7	32	4	撹乱（SX001上）	染付	碗	1/10	復元口径10	砂粒をほとんど含まない。	良好	胎土：白色。釉：青色がかった白色、透明

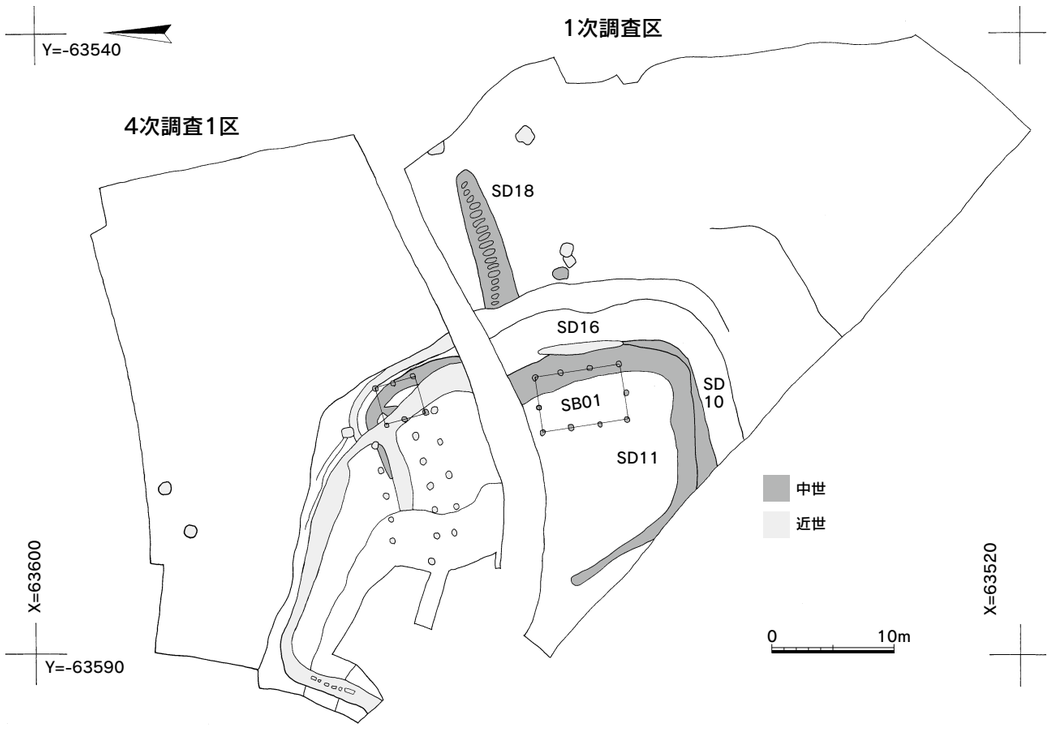
SX047（第４図、図版２） SX001下の包含層で、土質は褐色シルト質粘土、厚さ5～25cmを測る。図化に耐えない土師質土器、須恵器、陶磁器、黒曜石剥片、泥岩砥石片などが少量出土した。

その他出土遺物（第７図、図版４） 32はSX001上の攪乱溝から出土した染付椀で、施釉は薄い。

１区出土石器（第８図） 33は落ち込み状遺構SX039から出土した黒曜石の剥片鏃で、残存長1.95cm、残存幅1.9cm、厚さ0.4cm、残存重量1.4gを測る。34は黒曜石の使用痕剥片で、長さ2.05cm、幅3.1cm、厚さ0.5cm、重量2.3gを測る。縦長剥片の側縁に片面微細剥離が生じており、掻器様の使用が想定される。35は黒曜石の調整剥片で、長さ1.05cm、幅2.4cm、厚さ0.75cm、重量1.8gを測る。36は頁岩の磨製石斧で、残存長5.33cm、残存幅6.27cm、残存厚2.2cm、残存重量86.7gを測る。

３．小結

１区の遺構は、中世後期～近世に形成されており、柱穴や溝、包含層（耕作土）の存在から居住地と耕地であったと考える。本来は高祖山から北へ伸びる丘陵の西側斜面に形成された村落であったが、大半を丘陵の平坦造成によって破壊されており、詳細は不明である。徳永Ｂ遺跡第１次調査と１区の遺構配置を合成したのが第９図である。現況地形で１区の方が一段切り下げられており、両調査区間の遺構のつながりは明確ではない。これらの溝は、地形に沿って形成されており、階段状遺構（１次調査SD18、１区SD002西区）や柱列を伴う。排水や通路、区画など複数の機能を想定できる。



第９図　１区および第1次調査区の遺構配置図（1/500）

Ⅳ　２区の調査

１．調査の概要

２区は、平成23年６・８月に埋蔵文化財第２課（現埋蔵文化財調査課）が試掘調査（23-143）を行い、南側の遺構面と、北側の遺物包含層を確認した。１区と同様に古墳関係の遺構・遺物の存在が想定されることから、約1,100㎡を調査対象とし、本調査は１区終了後の平成24年１月18日に開始した。

重機による表土除去の結果、南側の丘陵を平坦に造成した遺構面と、北側谷への傾斜面で包含層が確認され、まずはこの面を「上面」として調査を行った。その結果、上層の包含層は近世以降の耕作土と判断されたため、調査区北端下層の茶褐色包含層を残して重機で除去し、花崗岩バイラン土とその上層の明黄褐色粘質土（無遺物層）を「下面」として遺構検出したところ、円墳（３号墳）を確認した。一字一石経塚があったとされる西側の高まりについては、表土除去から人力で行い、礫集中範囲と遺物包含層を検出し、古墳関係の遺構・遺物がないことを確認した。３号墳の遺存が良好であったため、伊都区画整理事務所と協議を行い、調査期間を約１ヶ月間延長した。その後、平成24年度の人事異動に伴い、４月24日に調査担当者が板倉から井上・福薗へ交代した後、３号墳の西側で古墳の周溝を検出し、ついでそれに伴う石室を検出した（４号墳）。３・４号墳の調査と平行し、調査区北端部分の茶褐色包含層上面の遺構検出および掘削、図面作成と写真撮影を行った後、包含層を掘削し、下面の遺構検出と掘削を行った。茶褐色包含層の下面は花崗岩バイラン土の地山が急激に傾斜して谷地の様相を呈しており、４号墳の周溝の続きが検出された。さらに、谷地の落ち際に新たに土壙墓が検出された。

これらの成果を受け、平成24年６月９日に現地説明会を開催し、約200人の見学者が訪れた。調査は平成24年７月２日に終了し、調査面積は1,143㎡となった。

遺構は、主に近世の溝３条、土坑８基、集石遺構１基、ピット、包含層、古墳時代中期の円墳２基、小石室１基、土壙墓１基である。遺物は、中国産陶磁器、国内産陶磁器・雑器、土器、石器、鉄器などがコンテナケース10箱分出土した。その他近世～近代の溝、土坑、包含層が確認され、コンテナケース10箱分の遺物が出土したが、本報告では詳述する対象としていない。

２．調査の記録

前述の通り、遺構面は、南側の花崗岩バイラン土と北側の包含層上の「上面」と、包含層を除去して古墳を検出した「下面」の２面に分けられる（第10･11図、図版５・９）。

１）溝（SD）

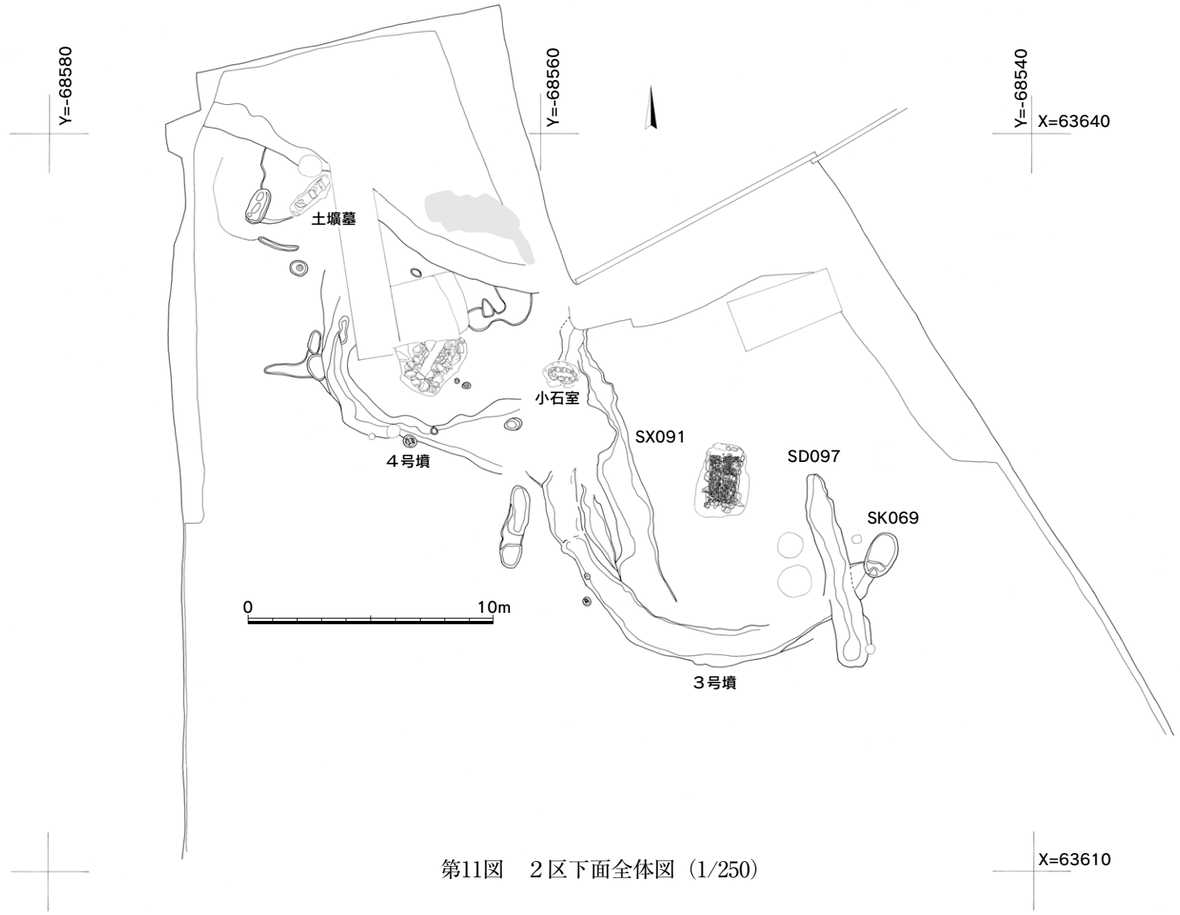
SD097（第13図、図版８） 下面検出の北北西方向の溝で、幅1.25m、深さ20～30cmを測る。３号墳周溝を切っており、葺石と考えられる花崗岩礫を含む。埋土は褐色シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

SD052（第14図、図版８） 上面検出の西方向の溝で、幅１m、深さ10cmを測る。埋土は褐色シルト質粘土で、図化に耐えない土師質土器鍋などが少量出土した。

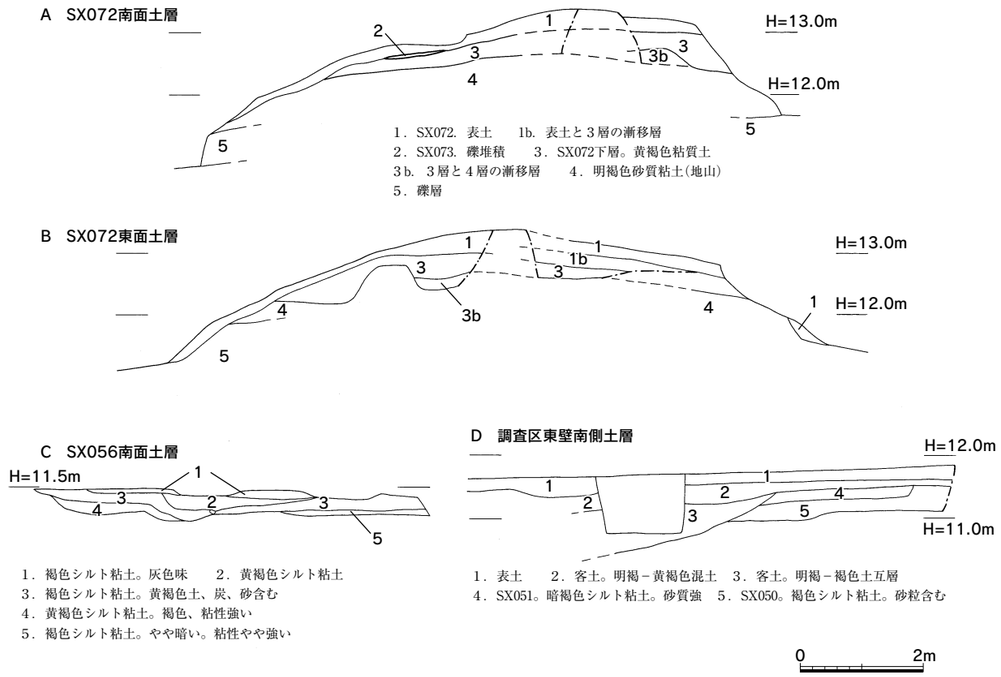
SD054（第14図、図版８） 上面検出の西方向の溝で、幅1.15m、深さ10cmを測る。埋土は褐色シルト質粘土で、図化に耐えない土師質土器、陶器、染付などが少量出土した。

これらは層位関係、出土遺物の傾向から比較的古いと考えられ、中世後期まで上る可能性もある。

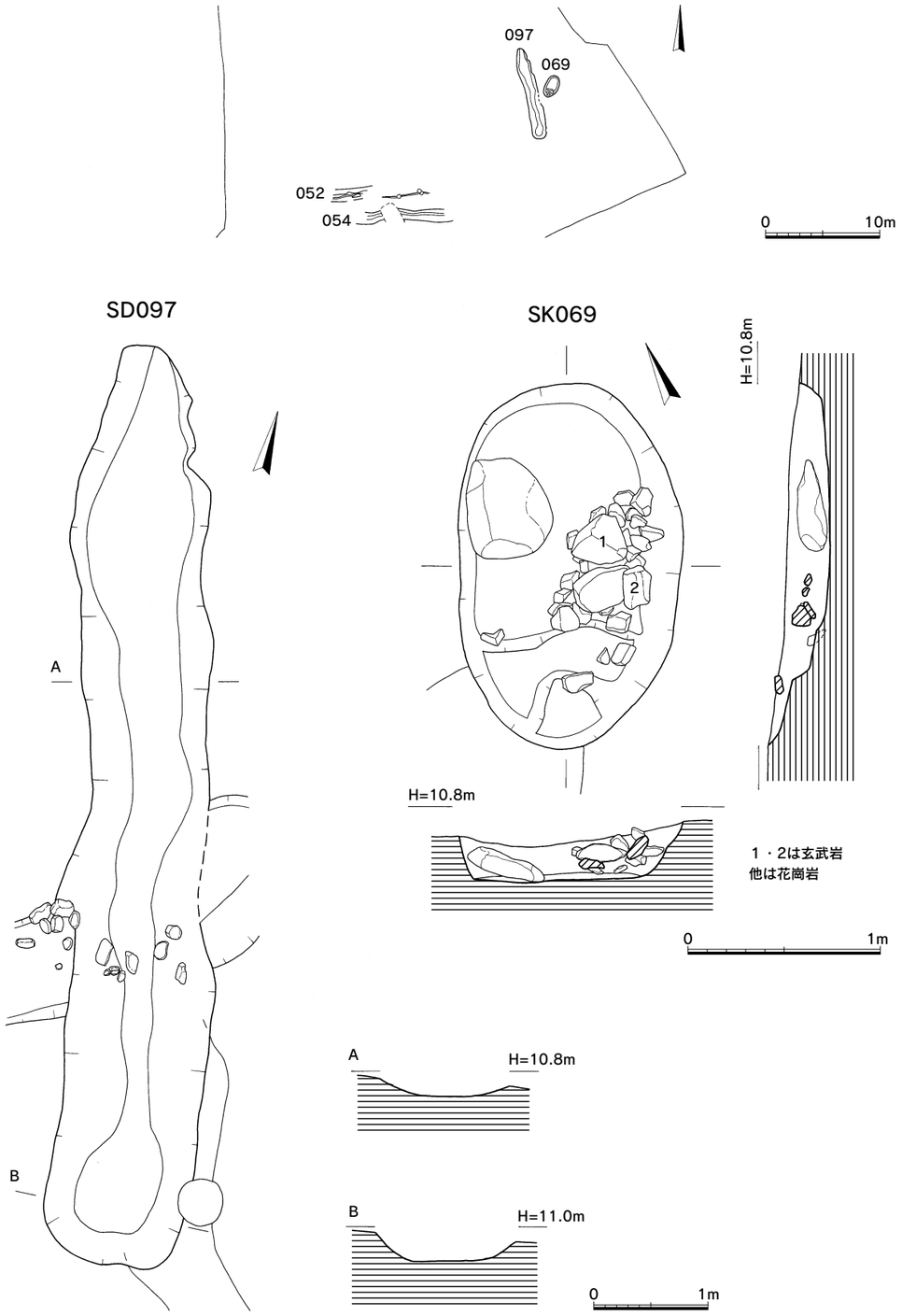
第10図　２区上面全体図（1/250）



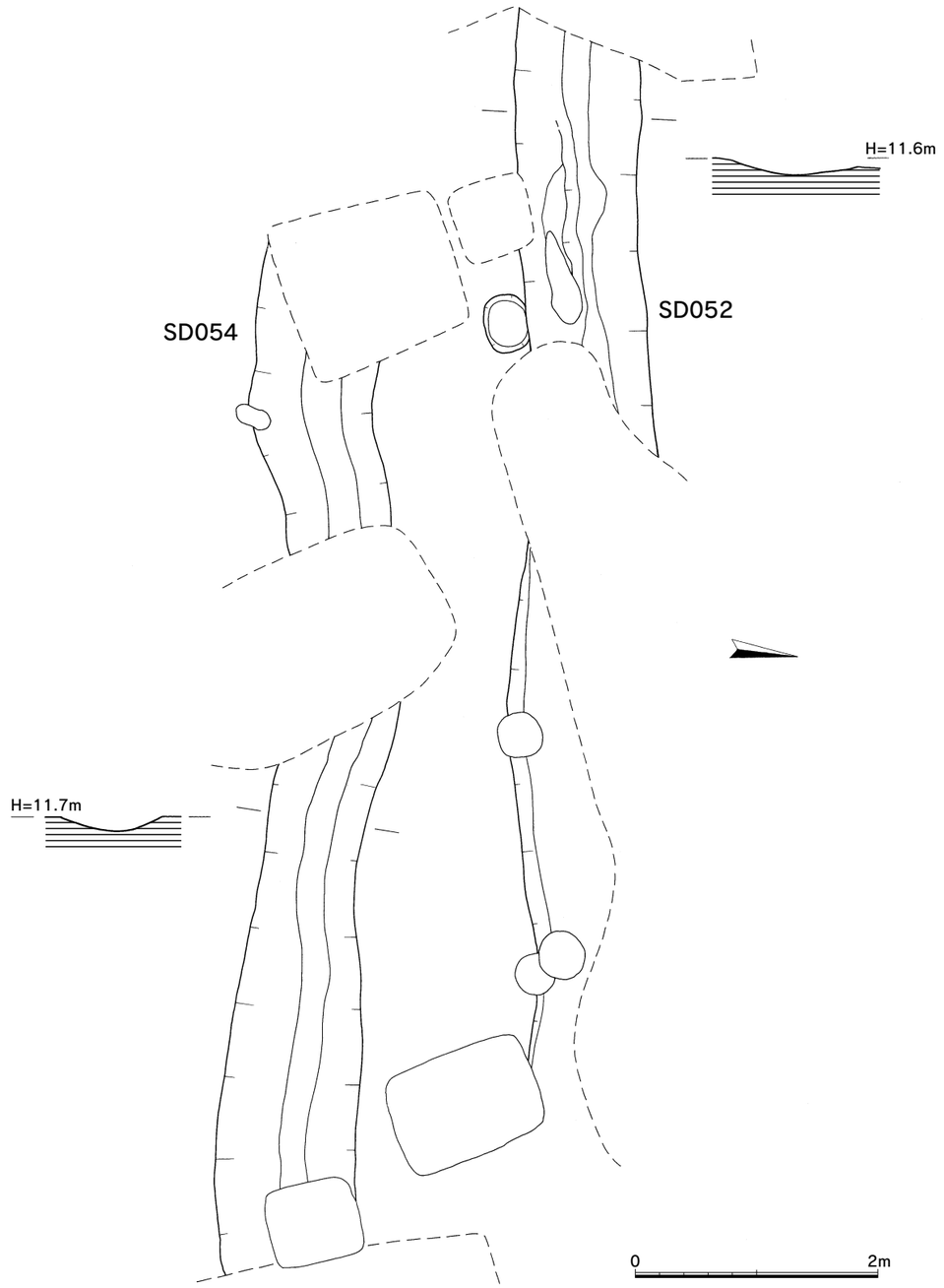
第11図　２区下面全体図（1/250）



第12図　調査区土層実測図（1/100）



第13図　SD097・SK069実測図（SD097は1/50、SK069は1/30）



第14図　SD052・054実測図（1/50）

２）土坑（SK）

SK069（第13図、図版８）　下面検出の平面楕円形の土坑で、長さ1.8m、幅1.15m、深さ20～40cmを測る。埋土は暗色土が混ざった褐色シルト質粘土で、３号墳周溝を切る。遺物は出土せず、花崗岩と玄武岩の礫を含む。西側の花崗岩塊石と東側の玄武岩礫は、石室壁材の可能性もある。その他の花崗岩礫は周溝出土の葺石と同質である。層位関係から近世でも比較的古い遺構と考えられる。

その他の近世土坑については、概略が以下のとおりである。

SK061（第10図、図版５）　上面検出の平面円形の土坑。出土遺物（第15図、図版16）は、染付碗（６）で、畳付は釉を剥ぐ。その他図化に耐えない須恵器が少量出土した。

SK062（第10図、図版５）　上面検出の平面円形の土坑。国産陶磁器片が出土した。

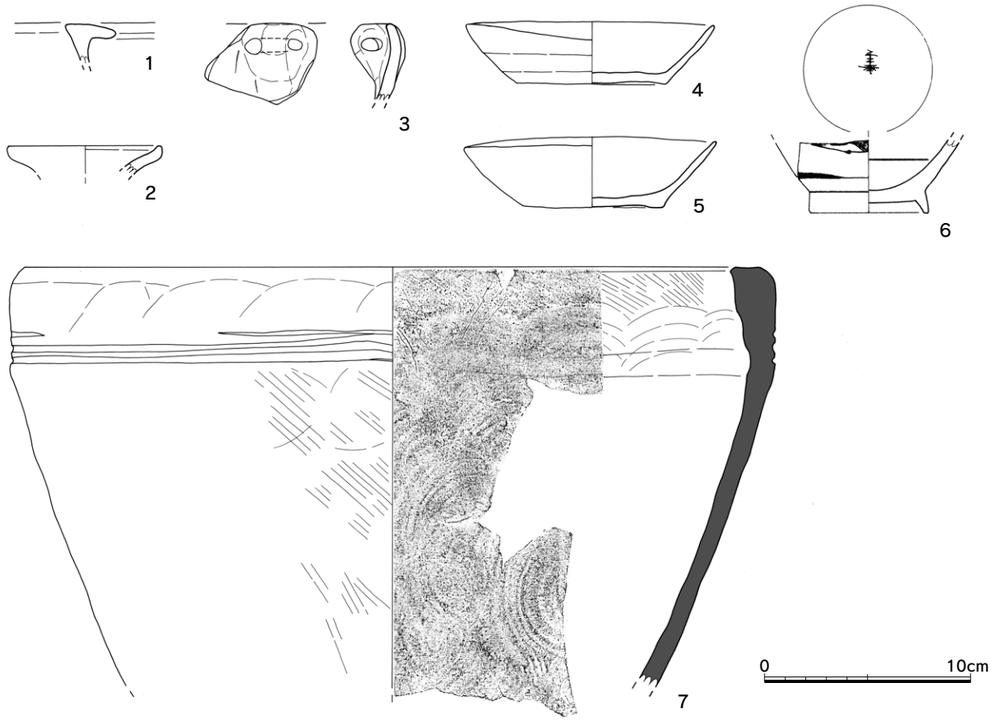
SK071（第10図、図版７）　上面検出の平面方形の土坑で、埋土は黄褐色シルト質粘土。出土遺物（第15図、図版16）は、須恵質土器甕（７）である。その他土器、土師器が少量出土した。

SK074（第10図、図版８）　上面で検出した平面方形の土坑で、埋土は暗褐色シルト質粘土。土師質・瓦質土器片、国産陶磁器片が出土した。

SK080（第10図、図版８）　上面で検出した平面長方形の土坑で、瓦質土器、青磁、平瓦、鉄釘が出土した。

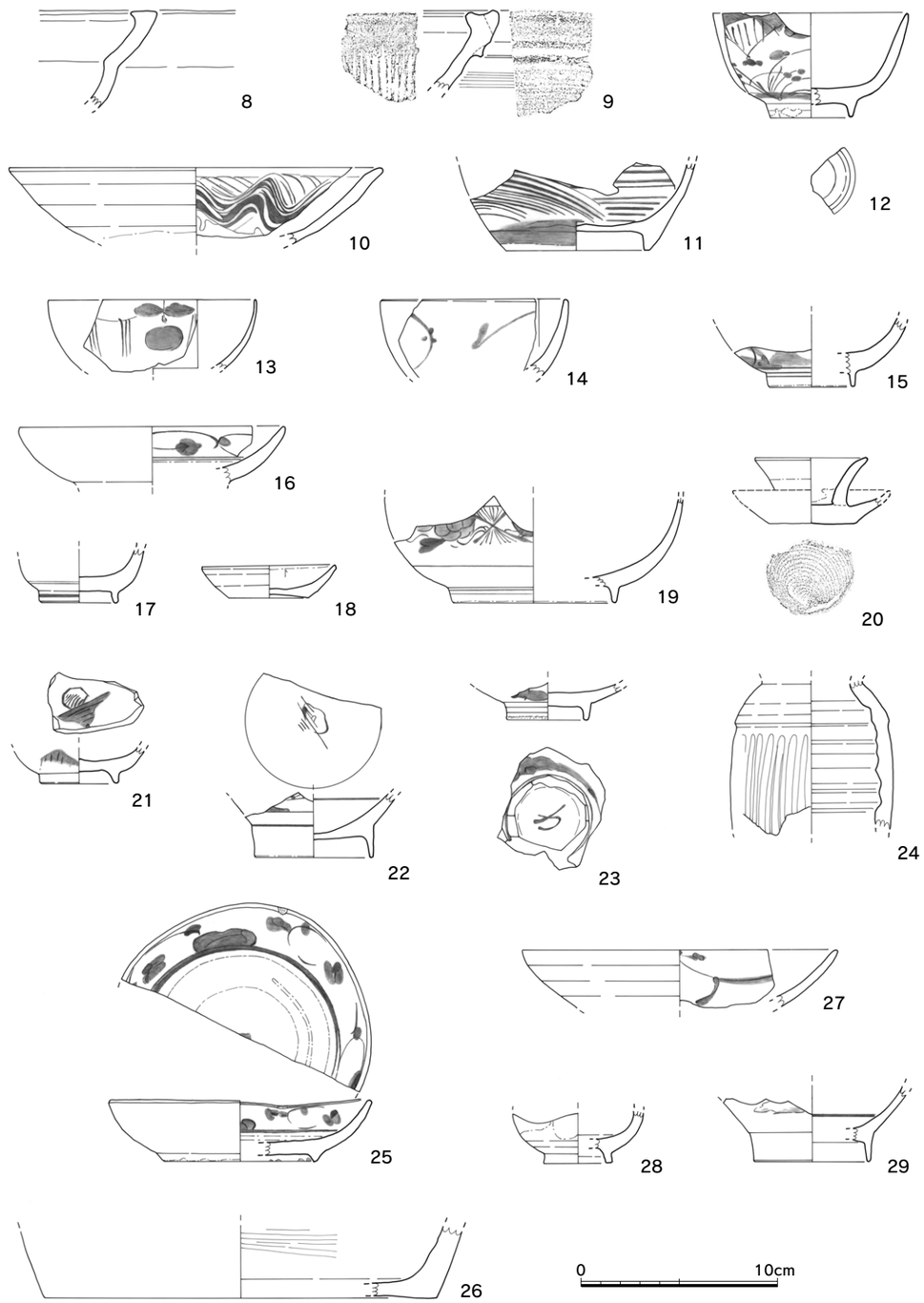
SK081（第10図、図版８）　上面で検出した平面方形の土坑で、土師器、青磁が出土した。

SK082（第10図、図版５）　上面で検出した平面円形の土坑で、青磁片が出土した。



1 検出面　2 SP055　3 SD090　4･5 SX087下層　6 SK061　7 SK071

第15図　SD・SKほか出土遺物実測図（1/3）



8～12 SX056･3層　13～16 SX050　17～20 SX051･2層
21～24 SX075　25･26 SX087　27 SX057　28･29 SX060

第16図　SX出土遺物実測図（1/3）

３）その他遺構

その他出土遺物（第15図、図版16）　１は調査区北西上面出土の弥生土器甕で、須玖Ⅱ式古段階（弥生時代中期後半）に位置づけられる。２はSP055出土の褐釉陶器仏飯具で、施釉にはむらがあり、ピンホールがみられる。その他のピットから図化に耐える遺物は出土していないが、径が30～40cmと小型で、埋土がしまりのある暗褐色粘質土のピットは近世の形成、それ以外は近代以降と考えられる。３は３号墳周溝SD090に混入して出土した土師質土器内耳鍋で、外面に炭化物が付着する。４・５は包含層SX087下層から２枚重なって出土した土師器坏で、底外面に回転糸切り痕が残る。

包含層SX（第10・12図、図版７）および出土遺物（第16図、図版16）　調査区北側に堆積した遺物包含層は上層（SX051、056上層）と下層（SX051・２層、SX050、SX056・３層、SX075、SX057、SX060、SX087、北端包含層）に分けられ、上層は近世～近代、下層は近世の遺物を含む。段造成を伴う暗褐色～茶褐色の砂粒を含むシルト質粘土で、近世の耕作土と考えられる。以下では下層出土遺物について記述する。

SX056・3層　８は瓦質土器鍋。９は褐釉陶器擂鉢。10は褐釉陶器鉢で、外面底部側は露胎、内面は白化粧の波状の刷毛装飾である。11は褐釉陶器瓶あるいは壺で、内面は露胎、畳付は釉を剥ぐ。12は染付碗で、畳付は釉を剥ぎ、砂目がわずかに溶着する。その他土師器、須恵器、瓦質土器、黒曜石片、滑石片が出土した。

SX050　13は色絵碗で、SX051出土破片と接合した。14・15は染付碗で、15は畳付のみ露胎。16は染付皿で、見込は釉を剥ぐ。

第２表　２区出土土器観察表

挿図	番号	図版	遺　構	種類	器種	残存	法量（cm）	胎　土	焼成	色　調
15	1	－	2B区検出面上	弥生土器	甕	口縁部片	－	白・赤色粗砂を含む。	良好	橙色
15	2	16	SP055	陶器	仏飯器	口縁部片	復元口径7.6	白・褐色の微砂を含む。	良好	胎土：灰褐色。釉：褐～暗褐色、ややガラス質
15	3	－	SD090　SW区	土師質土器	内耳鍋	口縁部片	－	白・黒・赤色粗砂を含む。	良好	橙色
15	4	16	SX087下層　R-1	土師器	皿	完形	口径12.1、底径7.2、器高3.1	白・黒・赤色細砂、雲母	良好	橙色
15	5	16	SX087下層　R-1	土師器	皿	完形	口径12.2、底径6.8、器高3.4	白・黒・赤色細砂、雲母	良好	橙色
15	6	16	SK061	染付	碗	1/3	復元高台径5.8	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：青色がかった透明
15	7	16	SK071	須恵質土器	甕	1/10	復元口径37	白・黒色粗砂を含む。	良好	灰白～灰黄色
16	8	－	SX056・3層	瓦質土器	鍋	口縁部片	－	白色粗砂を含む。	やや不良	灰白～にぶい黄橙色
16	9	16	SX056・3層	陶器	擂鉢	口縁部片	－	白色細砂。にぶい黄橙色。	良好	釉：褐～暗褐色
16	10	16	SX056・3層	陶器	鉢	1/6	復元口径19	黒色微砂含む。胎土：褐色。	良好	釉：黄褐色透明、灰黄色
16	11	16	SX056・3層＋SX060＋SX063	陶器	瓶・壺	底部	底径7.3	白色細砂わずかに含む。	良好	胎土：橙色、釉：浅黄色、にぶい黄橙色
16	12	16	SX056・3層	染付	碗	1/4	復元口径10、復元高台径4.2、器高5.4	白・黒色微砂をわずかに含む。	良好	胎土：灰白色。釉：青色がかった（明オリーブ灰色）、透明
16	13	16	SX050＋051	色絵	碗	1/6	復元口径10.6	精良	良好	胎土：白色。釉：透明。赤・黒・緑色の顔料による絵付け
16	14	16	SX050	染付	碗	1/4	復元口径9.6	褐・黒色微砂。胎土：白色。	良好	釉：やや青色がかった透明。
16	15	16	SX050	染付	碗	1/4	復元高台径4.4	褐・黒色微砂。胎土：白色。	良好	釉：やや青色がかった透明。
16	16	16	SX050	染付	皿	1/6	復元口径13.6	褐色微砂。胎土：白色。	良好	釉：やや青色がかった透明。
16	17	16	SX051・2層	染付	小碗	底部	高台径4	褐・黒色微砂。胎土：白色。	良好	釉：やや青色がかった透明。
16	18	16	SX051・2層	陶器	灯明皿	完形	口径6.7、底径4、器高1.7	白・黒色細砂を含む。	良好	胎土：にぶい褐色。釉：灰オリーブ色、釉際は茶色に発色
16	19	16	SX051・2層	染付	碗	1/5	復元高台径10.4	褐・黒色微砂をわずかに含む。	やや不良	胎土：乳白色。釉：透明。
16	20	16	SX051・2層	陶器	灯明皿	2/3	復元口径5.8、復元底径2.5、器高3.4	粗砂を含む。	良好	胎土:暗赤褐色。釉:オリーブ黄～オリーブ黒色
16	21	16	075K	染付	碗	底部	復元高台径4	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：青色がかった透明
16	22	16	075K	染付	碗	底部	復元高台径6	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：青色がかった透明
16	23	16	075K	染付	碗	底部	復元高台径4.2	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：青色がかった透明
16	24	16	075K＋SX056・2層	青磁	瓶	1/6	復元胴径8.2	黒色微砂を含む。灰白色。	良好	釉：明オリーブ灰色
16	25	16	SX087	染付	皿	1/2	復元口径13.4、復元高台径7.8、器高3.1	白・褐色の微砂を含む。	良好	胎土：灰白色。釉：やや青色がかった白色、透明
16	26	－	SX087	土師質土器	鉢	底部片	復元底径20	白色粗砂、赤色細砂、雲母	良好	橙色
16	27	16	SX057	染付	碗	1/10	復元口径16	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：青色がかった透明
16	28	16	SX060	陶器	小碗	1/3	復元高台径3.4	精良。胎土：にぶい赤褐色。	良好	釉：褐色透明上白～青色釉
16	29	16	SX060	染付	碗	1/5	復元高台径6	精良。胎土：灰白色。	良好	釉：黄色がかった半透明（被熱？風化）

SX051・2層　17は染付小碗で、畳付は露胎で薄い茶色の顔料が塗られている。18・20は褐釉陶器灯明皿で、18は口縁部から外面は露胎で、見込と受け部内面のみ施釉。底外面に糸切り離し痕が残る。19は染付碗で、畳付露胎で貫入が細かく入る。

SX075　21～23は染付碗で、21・23は畳付の釉を剥ぎ、砂目がわずかに溶着する。22は畳付の釉を剥ぐ。24は青磁瓶で、SX056・2層出土破片と接合した。その他瓦質土器、青磁が出土した。

SX087　25は染付皿で、口縁部・畳付に目跡を残し、全体に形がゆがむ。施釉は薄く、ピンホールが少しみられる。見込は輪状に粗く釉を剥ぎ、畳付も釉を剥ぐ。26は土師質土器鉢。

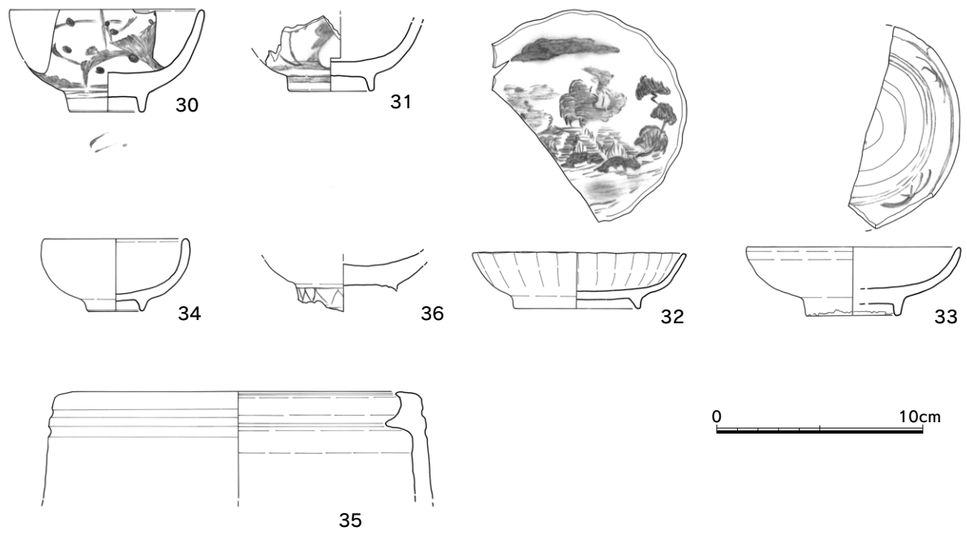
SX057　27は染付碗である。

SX060　28は褐釉陶器で、畳付は釉を剥ぐ。29は染付碗。

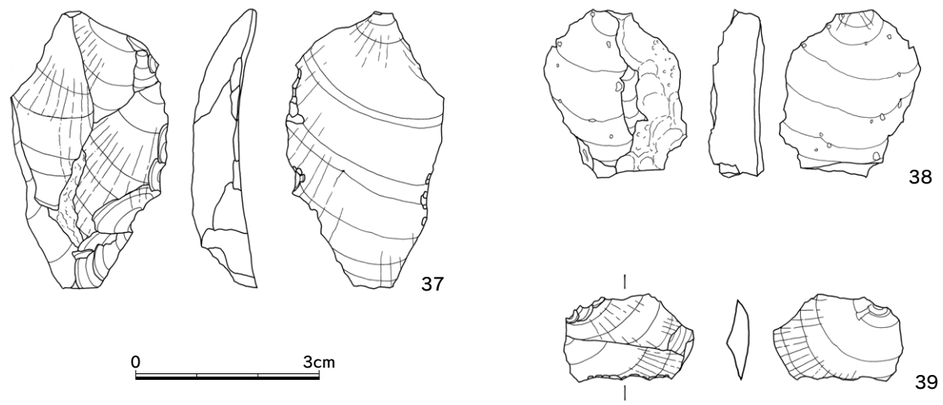
近世末～近代の遺構と遺物（巻頭図版５、図版６）　調査区南側を中心に、明らかな現代攪乱以外の遺構から、近代遺物（ガラス製品・銅製品・砥石片・瓦・国産陶磁器・雑器）が出土した。SX072（第10・12図、図版６）は、調査区南西の高まりの表土で、下層で礫集中範囲SX073が確認された。SX073は移設された一字一石経塚に関わると考えられる。表土の下層は、黒曜石片が出土する黄褐色粘質土が堆積し、その下が地山の花崗岩バイラン土、礫層となる。この高まりは丘陵の大規模な造成の際に取り残された残丘（旧表土）であり、古墳に関わる遺構・遺物は確認されなかった。SD049は現代の土地区画に沿った小型溝、SX068は北側を調査していないが、同様に現代の土地区画に沿った溝である。これらから近世末～近代の一括性の高い遺物が出土した。

SX306（図版17(2)、(3)）　調査区北側の茶褐色包含層上面で検出された集石遺構である。平面Ｌ字形を呈しており、礫の間から出土した遺物より近世の石基礎と推定される。

出土遺物（第17図30～35、図版22(1)）　30は波佐見系の染付丸形碗で、復元口径9.4㎝、器高5.0㎝、復元底径3.8㎝を測る。鉄分混じりの灰白色の胎土に透明釉をかけるが底部は無釉である。外面に雪



第17図　SX306・包含層出土遺物実測図（1/3）



37 SX056･3層　38･39 SX072下層

第18図　２区出土石器実測図（1/1）

輪草花文を描く。18世紀後半であろう。31は、波佐見系の染付丸形碗で、復元底径4.2㎝である。灰白色の胎土に底部以外に透明釉をかける。外面に雪輪草花文を描く。18世紀後半。32は、肥前系の染付輪花皿。口径10.4㎝、器高2.8㎝、底径6.0㎝を測る。内面に海浜文を描き、口縁部には口紅装飾が施される。底部以外に透明釉をかける。17世紀中頃である。33は、復元口径10.4㎝、復元底径4.6㎝、器高3.3㎝の肥前系の染付中皿である。鉄分混じりの灰白色の胎土に透明釉を底部以外にかける。内面は二重圏線と三重圏線で区画され、その間に笹文が描かれる。見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。34は、肥前系の青磁小皿。復元口径7.0㎝、器高3.5㎝、復元底径3.8㎝を測る。全体に貫入が入り、高台畳付に鉄銹が施される。35は、土師器焜炉か。外径18.0㎝、内径15.2㎝、残高5.2㎝を測る。内面にはハケ状工具による調整痕が見られる。18世紀以降。

包含層　調査区北端部分は、北側へ向かい地山が傾斜して落ち、上面に茶褐色の包含層が堆積していた。出土遺物はほとんど見られなかったが、少量ながらの染付等が出土し、近世までに堆積した包含層と推定される。

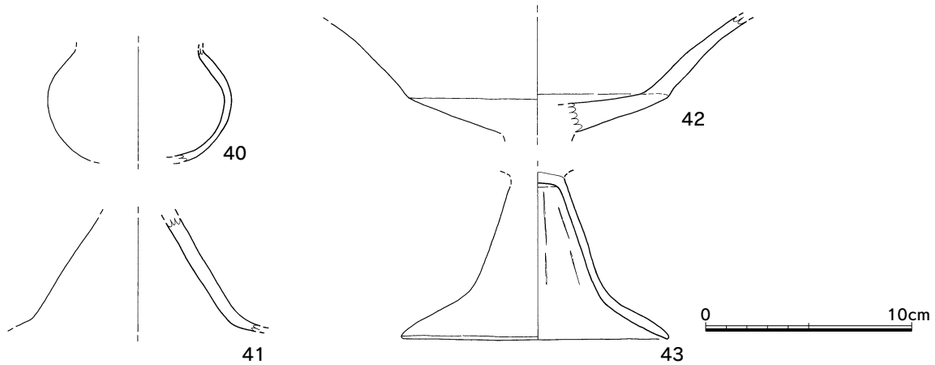
出土遺物（第17図36、図版22(1)）　36は、波佐見系の染付丸形碗。残存高2.9㎝を測る。鉄分混じりの灰白色の胎土に透明釉がかけられる。高台外面に二重の圏線が巡らされ、その間に鋸歯文が描かれる。18世紀後半～19世紀初頭。

２区出土石器（第18図）　37はSX056・３層出土の黒曜石の剥片で、長さ4.45cm、幅2.55cm、厚さ0.85cm、重量8.1gを測る。38・39はSX072下層出土。38は黒曜石の剥片で、長さ2.7cm、幅2.3cm、厚さ0.85cm、重量4.4gを測る。39は黒曜石の使用痕剥片で、長さ1.4cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量1.1gを測る。幅広剥片の末端に片面微細剥離が認められる。その他黒曜石砕片５点が出土した。SX072下層は、近世～近代の削平をまぬがれた旧表土であり、縄文時代以前の包含層と考えられる。土器は出土しなかった。

４）古墳

３号墳（第19～24図、図版９～14）

本古墳は調査区北東で検出された。近世包含層を重機で除去した際に、明黄褐色粘質土上で石室石材が検出され、周辺を精査したところ、周溝が確認された。墳丘は残存しておらず、周溝・石室もかろうじて底部が残った状態であったが、葺石や副葬鉄器などを確認することができた。

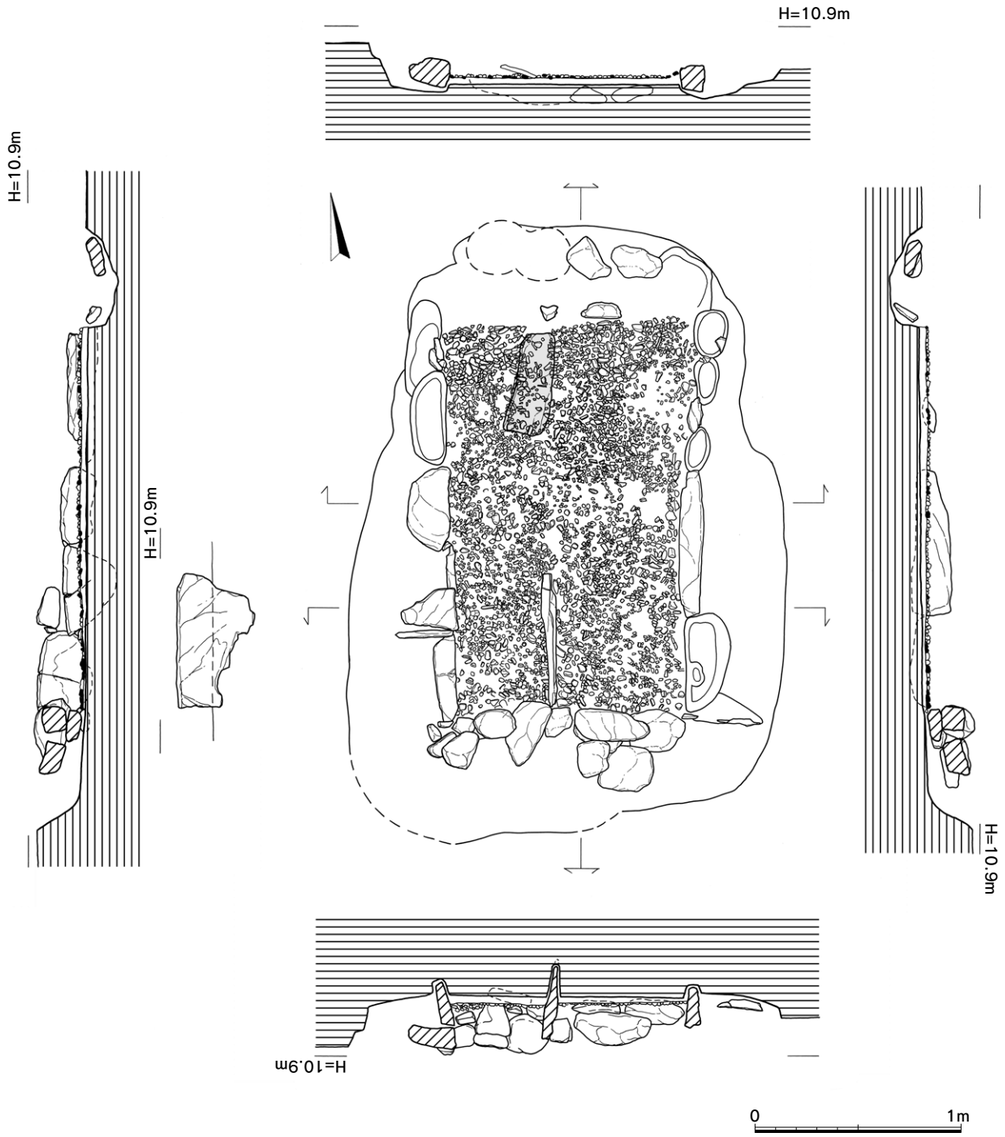


第21図　３号墳周溝出土土器実測図（1/3）

周溝（SD090）　周溝は正円形で、北東側約3/8が段造成で失われており、幅0.8～1.5m、深さ20～30cm、石室中心より内径で6m、外径で7.5mを測る。周溝底面の標高は、南側の10.75mから、西側の10.72m、東側の10.68mへとわずかに傾斜する。埋土は暗褐色粘質土で、溝底内側に葺石と思われる花崗岩亜角礫が出土した。南側については葺石を確認していないが、溝底内側で礫の圧痕が並んでおり、本来は東西部分と同様に葺石が落ち込んでいたと考えている。上面に大きな攪乱があり、それに関わって失われた可能性がある。周溝東側はSD097とSK069に切られ、それぞれの埋土に礫が含まれている。礫は葺石と同質のものであり、SK069出土の長さ50cm、幅43cm、厚さ10cmの花崗岩塊石は、石室壁材の可能性がある。玄武岩礫は、３号墳石室では残っていないが、４号墳石室には使用されており、石室石材の可能性もある。北西側や北側は削平のため周溝は失われていたが、その推定範囲で礫の出土が２カ所認められた。西側は周溝底面の葺石のみがかろうじて残存した様相を呈し、北側は周溝を破壊した整地の際に葺石が集められて形成されたと考えられる。４号墳周溝や小石室との切り合いは削平のために不明だが、３号墳周溝の推定位置からは相互に切り合わずに隣接していた可能性もある。遺物は、周溝西側で土師器小壺、高坏が集中して出土した。土師器は非常にもろく、取り上げや洗浄の段階で破損し、形状を復元できないものもあった。西側周溝の東に隣接するSX091は赤色をおびた明黄褐色粘土が堆積したもので、周溝に切られており、古墳築造前の溝の可能性を想定して掘削した。しかし堆積土と地山の不連続はあいまいであり、東側では地山の下に続くことも分かったため、遺構ではなく土色変化した谷埋積土（自然堆積）と判断した。谷埋積土の土色変化の要因は、上面に構築された現代排水溝などの影響によるグライ化も考えられるが、詳細は不明である。同様の土色変化は石室北側の地山でも確認している。

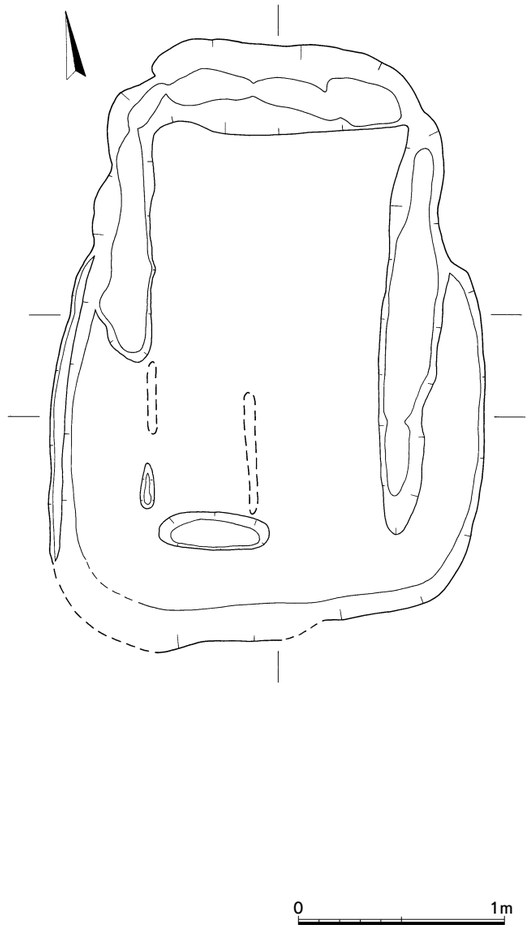
出土遺物（第21図、図版16）　40は土師器小型丸底壺で、風化により残りが悪く、口縁部は復元できなかった。41～43は土師器高坏である。その他図化に耐えない土師器片が少量出土した。

墳丘　墳丘は前述のとおり完全に削平されており、地山整形や盛土の詳細は判明しない。また、墓道や石室入り口に関わる部分も失われている。周溝は現存で内径12mであるため、墳丘の規模は直径11m程度と考えておきたい。周溝に落下した葺石は長さ30cmの中型と10～20cmの小型の花崗岩亜角礫で構成され、中型礫については基底石の可能性もある。周溝の底面から出土しており、周溝の埋没の初期に落下したと考えられる。



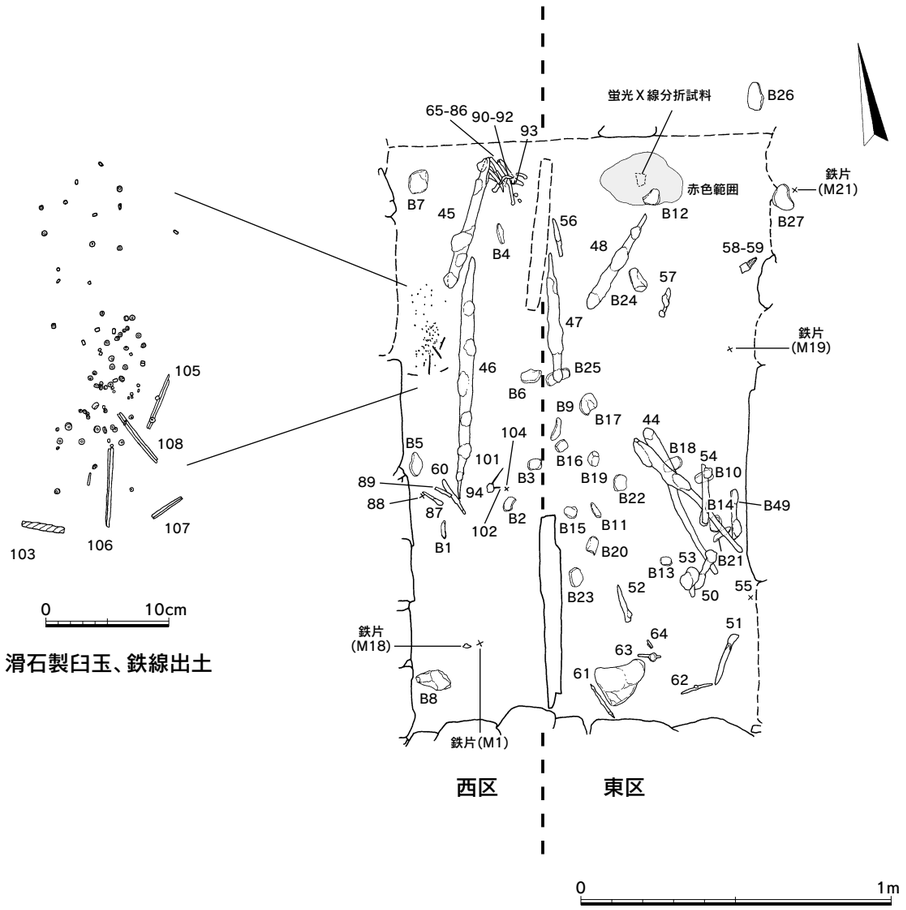
第22図　３号墳石室実測図（1/30）

主体部（石室ST070）　主軸をN9°Eにとる石室である。墓壙は残存部分で、長さ３m、幅2.17m、深さ20cmを測る。北側の削平が深いため平面台形を呈すが、本来は長方形の掘方である。底面は標高10.6mで水平面を設け、石室壁材を据える部分を北辺で約20cm、西・東・南辺で約10cm掘り下げる。石室内法は西辺1.85m、東辺1.9m、北辺1.2m、南辺1.1mを測る。石室内部中心軸より約10cm西に薄い板石２枚を立てて、仕切りを設けている。床は掘方下面の地山上に砂礫を含む粘土を厚さ２～３cmほど敷き、その上に長さ１～８cmの小礫（花崗岩・石英・頁岩）を敷き詰める。墓壙・石室内の埋土は暗色土を含む褐色シルト質粘土である。



第23図　３号墳石室掘方実測図（1/30）

石室壁は、石材は残らないが北辺の掘方が最も大きい。敷石の北端が直線的に揃っており、ここで壁と接したと考える。奥行きが20cmほどの平坦面をもった塊石の存在が想定できる。この場合、掘方北端の幅25cm、奥行き15cmの中型礫および抜き痕は控えの石と理解できる。西の側石の１段目は、北から幅40cm、奥行き15cm程度の塊石の抜き痕と小礫、幅40cm、奥行き20cm、高さ15cmの塊石、幅45cm、奥行き４cm、高さ25cmの薄い板石、幅43cm、奥行き10cm、高さ27cmの厚い板石となる。２段目は、薄い板石の上に幅20cm、奥行き26cm、高さ10cmの扁平亜角礫を平積みする。この２段目石と南の厚い板石（１段目）の間に幅６cm、厚さ２cm、長さ28cmの細長い扁平礫を詰める。その他西側墓壙内に壁材と考えられる扁平礫や小角礫が含まれていた。東の側石は、北から幅20cm、奥行き10cm程度の中型礫の抜き痕と小礫、幅18cm、奥行き７cm、高さ７cmの中型礫、幅20cm、奥行き10cm程度の中型礫の抜き痕、幅70cm、奥行き12cm、高さ20cmの厚い板石、幅45cm、奥行き20cm程度の塊石の抜き痕となる。西側石２段目と同様に南端の目地に細長い扁平礫を詰める。南辺は仕切り石の西側（西区）と東側（東区）で石の積み方が異なる。西区側１段目は深さ10cmほど掘り下げ、幅21cm、奥行き11cm、高さ５cmの扁平礫を据える。２段目は西から幅10cm、奥行き11cm、高さ６cmの小型亜角礫、幅21cm、奥行き15cm、高さ16cmの中型亜角礫、幅10cm、奥行き６cm、高さ５cmの小型亜角礫、幅12cm、奥行き９cm、高さ９cmの小型亜角礫、３段目は西から幅18cm、奥行き18cm、高さ11cmの中型亜角礫、幅21cm、奥行き14cm、高さ６cmの中型扁平礫、幅21cm、奥行き31cm、高さ19cmの塊石となる。西側の角には裏から３個の小礫が当てられる。東区側１段目は掘り下げずに床面と同レベルで、西から幅23cm、奥行き19cm、高さ７cmの扁平礫、幅29cm、奥行き21cm、高さ12cmの扁平塊石を置き、２段目は幅14cm、奥行き14cm、高さ12cmの中型亜角礫、幅37cm、奥行き15cm、高さ17cmの中型塊石となる。その南側に幅16cm、奥行き18cm、高さ10cmの中型亜角礫と幅26cm、奥行き22cm、高さ８cmの扁平礫が積まれている。西区側は小型・中型礫を積み上げ、東区側は小型礫を用いずに中型扁平礫を２列で据える。



第24図　３号墳石室内遺物配置実測図（1/20、1/5）

石室内の２枚の仕切り石については、明確な掘方が検出されない。南側の仕切り石は、幅65cm、厚さ８cm、高さ39cmで、下端部が三角形状に打ち欠かれていることから、床面に打ち込みあるいは押し込み立てたと考えられる。同様の石の据え方は西辺の薄い板石でも行っている。一方、北側の仕切り石は、幅50cm、厚さ３～５cm、高さ20cmで、西側へ倒れて検出された。床に差し込んだ痕跡が認められないため、固定せずに立て置いたと考えられる。設置時は仕切り石の西に物体があり、そこに立て掛けて据えていたのが、物体が消失したのち、倒れこんだと考えられる。

以上の石室壁石・仕切り石はすべて花崗岩である。石室の構造を整理すると、北辺は他よりも深い掘り込みと控えの石を用いて比較的大きな塊石を据え、西・東の側辺は板石と塊石で奥行きを持たせずに積み上げ、南辺は西区側では小・中型礫を積み上げ、東区側では中型扁平礫を置き据えている。大型石材を据えた痕跡がある北辺が奥壁、南辺が入口と考えたい。南辺でも東区側は壁というよりは、扁平礫で組んだ根石のようにもみえる。ただし袖石・梱石などの玄門構造は認められない。上位に横口が付いた可能性は高いが、いずれにしてもこれ以上の石室上部および墳丘が失われているため、石室から墳丘外への構造については不明である。

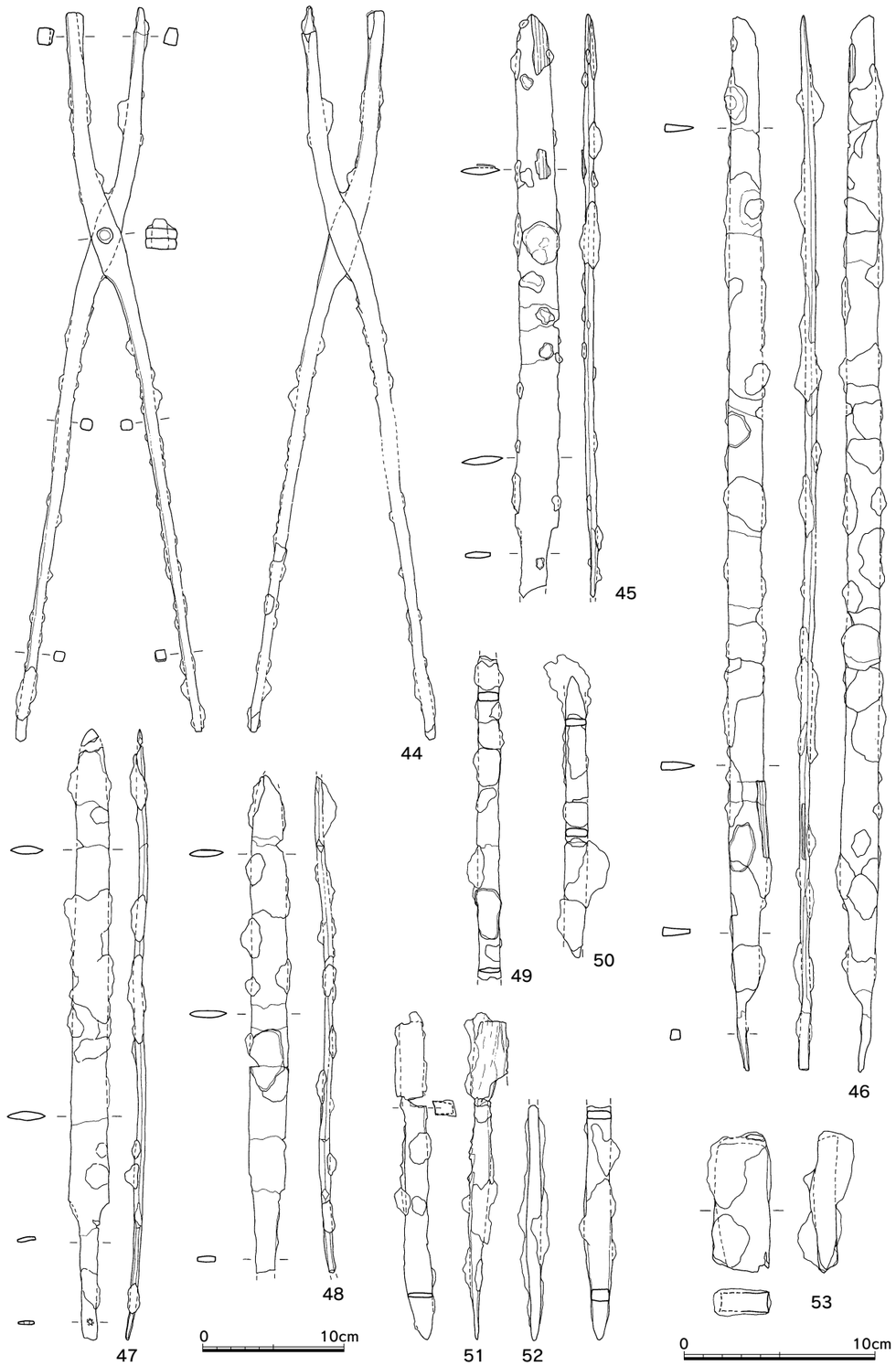
出土遺物（第25～27図、第３・４・６表、図版15・16）　石室からは鉄器67点以上、滑石製臼玉137点以上、花崗岩扁平礫１点、玄武岩小礫36点、赤色範囲１カ所が確認された。鉄器の遺存状態は良好であったが、正位置を保っているものは少ない。鉄鉗などの鍛冶工具、捩り鉄線で束ねられた蕨手刀子、玄武岩小礫の出土などが特徴的である。人骨は確認されなかった。

鉄器　44は鉄鉗で、東区中央、玄武岩礫の上、刀子や鉈の下から完形で出土した。はさみ部の先端はわずかに幅広扁平となっている。45は剣で、西区北側、蕨手刀子の上から完形で出土した。剣身に有機質が残る。46は大刀で、西区中央から完形で出土した。刀身区側に有機質が残る。47は剣で、東区北側、玄武岩礫上から完形で出土した。茎に目釘穴をもつ。48は剣で、東区北側から出土した。切先・茎端を欠損する。49・50は不確かだが鉈と考えられ、東区中央、鉄鉗の上、鏨の下から出土した。49・50は同一個体と考えられるが、接合せず、51・52と同様に折り曲げられていた可能性もある。51・52は鉈と考えられ、東区南側から出土した。中央で急角度に折り曲げられている。53は鏨で、東区中央、鉈上から完形で出土した。正面形は刃部がわずかに狭い。身が短く、破断している可能性もある。54～60は刀子である。54は東区中央、鉄鉗・玄武岩礫上から一部欠損して出土した。茎部に鹿角柄の一部が残る。55は東区中央、側石抜き痕近くで出土した。刃区部分であるが、同一個体の刀身や茎部は出土しなかった。56は東区北側からほぼ完形で出土した。茎部に鹿角柄の一部と思われる有機質が残る。57は東区北側から一部欠損して出土した。茎部に鹿角柄の一部が残る。58・59は東区北側から出土した。58・59は接合しないが同一個体の可能性が高い。茎部に鹿角柄の一部が残る。60は西区中央、大刀上、蕨手刀子下からほぼ完形で出土した。鹿角と思われる有機質が残る。61～64は東区南側から出土した棒状工具で鑿の可能性がある。61・62はほぼ完形で出土し、有機質が残る。63・64は接合しないが同一個体と考えられ、有機質が残る。65～86は西区北側から、87～89は西区南側から出土した蕨手刀子である。65～86は北側仕切り石と剣の下から束になって出土し、束の中央に捩った鉄線を環状にした90～92と鉄環93が出土した。この蕨手刀子群は接合できなかった部位もあり、頭部数（最小個体数）は13個体である。南側の蕨手刀子は、87と88・89の２個体である。94は板状鉄片で、西区中央、捩り鉄線上から出土した。器種等は不明であるが、厚さや大きさは剣の茎部に類似する。95～110は西区中央から出土した捩り鉄線である。104・106から径１mmの鉄線を最小単位として、それを２本捩り合わせた鉄線を２本そろえたもの（105～110）と、それを捩り合わせたもの（95～103）が出土している。90～92の環状捩り鉄線は、95～103の捩り鉄線をさらに捩り合わせた可能性がある。103・105～108は滑石製臼玉とともに出土している。その他図化に耐えない鉄片（西区Ｍ１・18、東区M19・21など）が少量出土した。

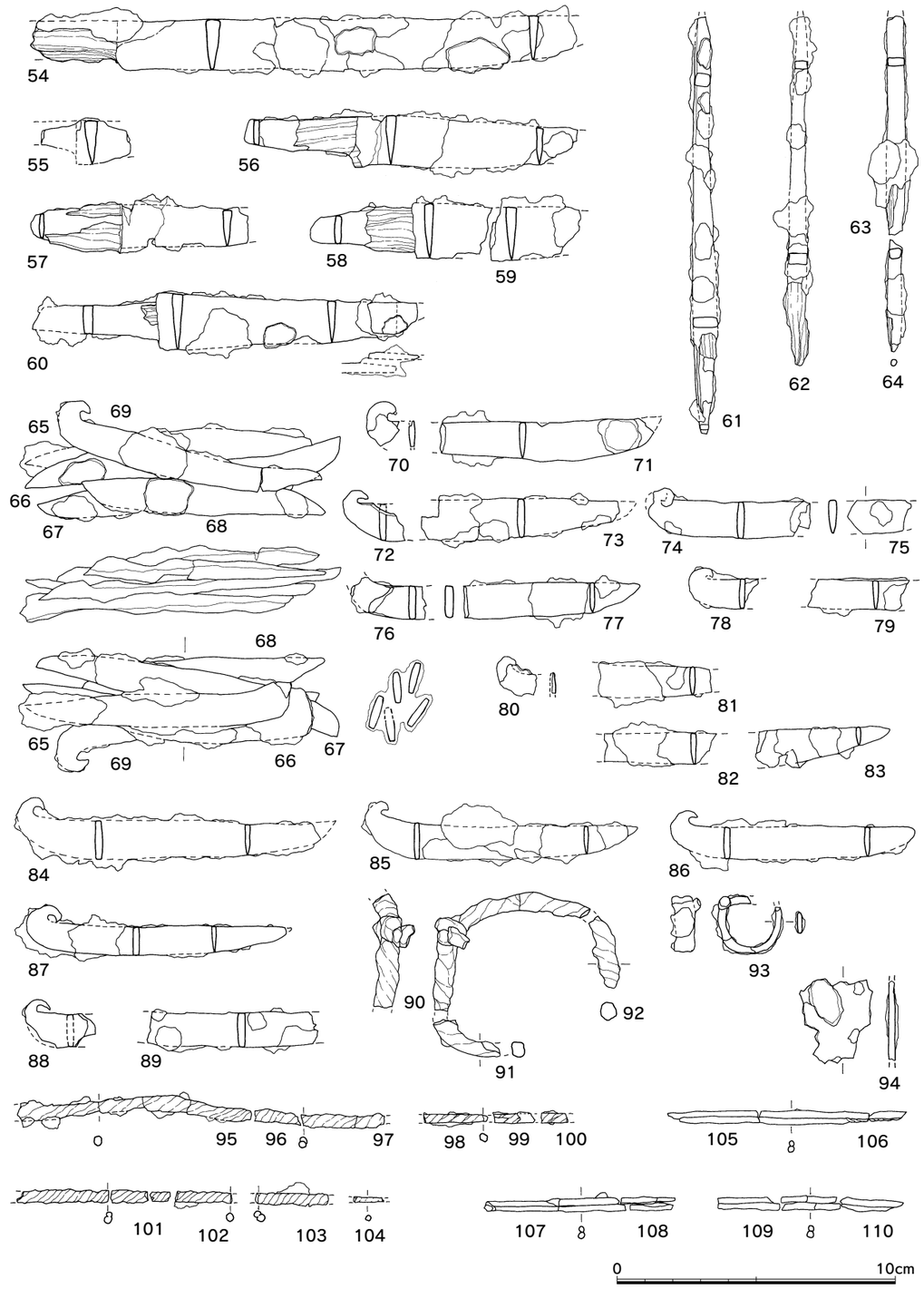
滑石製臼玉　西区中央西側から111～247がまとまって出土した。径は2.2～6mm、厚さは１～3.8mmで、連続的ながらもサイズ差がある。捩り鉄線103・105～108と関連して出土している。この他、図化に耐えない砕片が少量出土しているので、個体数は137点以上となる。

花崗岩礫　東区南側の床直上から出土した花崗岩扁平礫で、長さ17.5cm、幅12.5cm、厚さ4.2cm、重量972.2gを測る。表面に使用痕・加工痕はみられない自然礫であり、落下した石室石材の可能性と、鍛冶に用いる台石（金床石）の可能性の両方が想定される。

玄武岩礫　石室床上および埋土中から玄武岩の亜円礫が36点出土した。法量と形態を第６表に整理している。長さ4.51～11.9cm、幅1.74～7.7cm、厚さ0.45～2.75cm、重量11.57～232.43gの亜円礫が選択されており、形態は円磨度によって楕円（B11・18・20・24～26・29・35・36）、楕円扁平（B2・5・6・8・10・17）、長楕円（B1・4・9・21・30・34）、方形（B7・12～16・19・22・23・28・31・32）、長方形（B3・33）、湾曲（B27）に分けられる。欠損しているものもあるが、明確な使用痕・



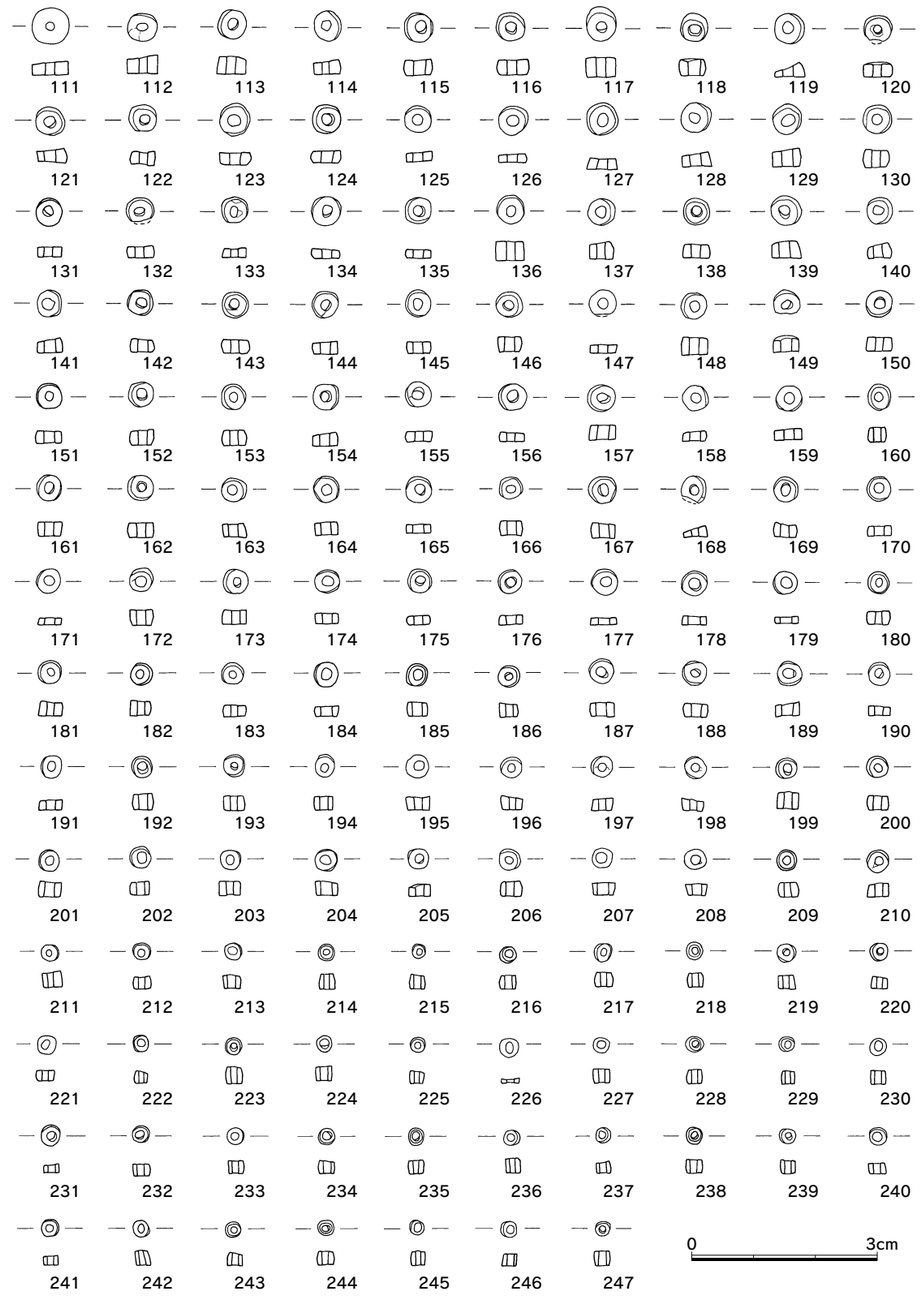
第25図　３号墳石室出土鉄器実測図１（44～52は1/4、53は1/3）



第26図　３号墳石室出土鉄器実測図２（1/2）

第３表　３号墳石室出土鉄器観察表

挿図	番号	図版	区	器種	法量(cm)　[]は残存法量	残　存　等	出　　土
25	44	15	東	鉄鉗	左身(全長53、はさみ部(長さ16.5、幅1.2、厚さ0.5)、支点部(幅2、厚さ0.7)、握り部(長さ36.5、幅0.7、厚さ0.7)、右身(全長52、はさみ部(長さ16、幅1.2、厚さ0.8)、支点部(幅2. 1、厚さ0.7)、握り部(長さ36、幅0.7、厚さ0.7)、ねじ頭(径1.1、厚さ0.7)	完形。左身握り部に刀子54付着	斜位、はさみ部北西。玄武岩礫B14・18・21上。刀子54、鉇49・50下。
25	45	15	西	剣	全長[41.6]、身部(長さ36.6、幅2.5 ～ 3.1、厚さ0.65 ～ 0.7)、茎部(長さ[5]、幅1.8、厚さ0.35 ～ 0.4)	茎尻欠損。身部有機質残存	検出時44cm。斜位、切先南西。大刀46上
25	46	15	西	大刀	全長75.4、身部(長さ70.4、幅2 ～ 2.75、厚さ0.5 ～ 0.7)、茎部(長さ5、幅0.65、厚さ0.8)	完形。身部有機質残存	正位、切先北。剣45、刀子60下。
25	47	15	東	剣	全長43.6、身部(長さ33.7、幅2.5 ～ 2.9、厚さ0.5 ～ 0.6)、茎部(長さ9.9、幅1 ～ 1.3、厚さ0.3 ～ 0.35)、目釘穴径0.3	完形。目釘穴あり	正位、切先南。玄武岩礫B25上
25	48	15	東	剣	全長[35.5]、身部(長さ29.5、幅2.5 ～ 2.7、厚さ0.6 ～ 0.7)、茎部(長さ[6]、幅1.3 ～ 1.8、厚さ0.35)	切先・茎尻欠損	斜位、切先南西。
25	49	15	東	鉇	長さ[17.2]、幅1.1、厚さ0.3 ～ 0.4	身部。49・50同一個体か	正位。鉄鉗44上？
25	50	15	東	鉇	長さ[15]、幅1.1 ～ 1.2、厚さ0.4 ～ 0.45	身部。49・50同一個体か	斜位。鉄鉗44上、鏃53下
25	51	15	東	鉇	長さ[16.9]、刃部(幅1.5、厚さ0.2)、身部(幅1.3、厚さ0.6)	折り曲げ	斜位
25	52	15	東	鉇	長さ[12.4]、幅0.8 ～ 1.3、厚さ0.4 ～ 0.6	51と同一個体	斜位
25	53	15	東	鏃	長さ7.44、幅2.82、厚さ1.4	上部欠損か	斜位。鉇50上
26	54	15	東	刀子	長さ[19.5]、身部(長さ[16.4]、幅1.8、厚さ0.5)、茎部(長さ[3.1]、幅ー、厚さ0.3)	切先・茎尻欠損。鹿角残存。	正位、切先北。鉄鉗44・玄武岩礫B10上
26	55	15	東	刀子	長さ[3.2]、身部(長さ[2]、幅[1.5]、厚さ0.5)、茎部(長さ[1.2]、幅[0.9]、厚さ0.3)	刃区部片	斜位。側石抜痕付近
26	56	15	東	刀子	長さ[11.9]、身部(長さ[8.2]、幅1.8、厚さ0.2)、茎部(長さ3.7、幅1 ～ 1.3、厚さ0.2)	刃部欠損。鹿角？残存	正位、切先北
26	57	15	東	刀子	長さ[7.8]、身部(長さ4.5、幅1.5、厚さ0.3)、茎部(長さ3.3、幅1、厚さ0.15)	刃部欠損。鹿角残存	斜位
26	58	15	東	刀子	長さ[6.5]、身部(長さ[2.9]、幅2、厚さ0.3)、茎部(長さ3.6、幅1.2、厚さ0.2)	鹿角柄残存。58・59同一個体	斜位
26	59	15	東	刀子	長さ[3.2]、幅1.9、厚さ0.4	58・59同一個体	斜位
26	60	15	西	刀子	長さ[14.8]、身部(長さ[10.4]、幅2.1、厚さ0.4)、茎部(長さ4.4、幅1.8、厚さ0.4)	鹿角？片残存。切先は折れて付着	斜位、切先北東。大刀46上、蕨手刀子89下
26	61	15	東	鑿か	長さ[14.9]、幅0.3 ～ 0.9、厚さ0.2 ～ 0.45	有機質残存	斜位
26	62	15	東	鑿か	長さ[12.4]、幅0.3 ～ 0.6、厚さ0.2 ～ 0.4	有機質残存	斜位
26	63	15	東	鑿か	長さ[7.9]、幅0.6、厚さ0.3	63・64同一個体か	斜位
26	64	15	東	鑿か	長さ[4]、幅0.5、厚さ0.4	有機質残存。63・64同一個体か	斜位
26	65	15	西	蕨手刀子	長さ9.5、幅1.2、厚さー	頭部端欠損　個体①	正位。剣45下
26	66	15	西	蕨手刀子	長さ10.4、幅ー、厚さ0.2 ～ 0.3	完形　個体②	正位。剣45下
26	67	15	西	蕨手刀子	長さ11、幅1.1、厚さ0.2 ～ 0.3	頭部端欠損　個体③	正位。剣45下
26	68	15	西	蕨手刀子	長さ[8.6]、幅1.1、厚さ0.2 ～ 0.3	78と接合で完形　個体④	正位。剣45下
26	69	15	西	蕨手刀子	長さ9.6、幅1.2、厚さ0.2 ～ 0.3	完形　個体⑤	正位。剣45下
26	70	-	西	蕨手刀子	長さ[1.3]、幅[1.1]、厚さ[0.2]	頭部片　個体⑥	正位。剣45下
26	71	-	西	蕨手刀子	長さ[7.7]、幅1.3、厚さ0.2	切先側	正位。剣45下
26	72	-	西	蕨手刀子	長さ[2.2]、幅1.3、厚さ0.3	頭部片　個体⑦	正位。剣45下
26	73	-	西	蕨手刀子	長さ[7.1]、幅1.4、厚さ0.3	切先側	正位。剣45下
26	74	-	西	蕨手刀子	長さ[5.8]、幅1.3、厚さ0.2	頭部側　個体⑧	正位。剣45下
26	75	-	西	蕨手刀子	長さ[2.3]、幅1.2、厚さ0.3	身部片	正位。剣45下
26	76	-	西	蕨手刀子	長さ[2.8]、幅1.2、厚さ0.2	頭部片　個体⑨	正位。剣45下
26	77	-	西	蕨手刀子	長さ[6.2]、幅1.2、厚さ0.3	切先側	正位。剣45下
26	78	-	西	蕨手刀子	長さ[2.5]、幅1.1、厚さ0.2 ～ 0.3	68と接合	正位。剣45下
26	79	-	西	蕨手刀子	長さ[3.6]、幅1.1、厚さ0.2 ～ 0.3	身部片	正位。剣45下
26	80	-	西	蕨手刀子	長さ[1.5]、幅ー、厚さー	頭部片　個体⑩	正位。剣45下
26	81	-	西	蕨手刀子	長さ[4.1]、幅1 ～ 1.2、厚さ0.2	身部片	正位。剣45下
26	82	-	西	蕨手刀子	長さ[4]、幅1.2、厚さ0.2	身部片	正位。剣45下
26	83	-	西	蕨手刀子	長さ[4.8]、幅[1.3]、厚さ0.2	切先側	正位。剣45下
26	84	15	西	蕨手刀子	長さ[10.8]、幅1.4、厚さ0.2	切先欠損　個体⑪	正位。剣45下
26	85	15	西	蕨手刀子	長さ9.7、幅1.3、厚さ0.15	完形　個体⑫	正位。剣45下
26	86	15	西	蕨手刀子	長さ8.7、幅1.2、厚さ0.2	完形　個体⑬	正位。剣45下
26	87	15	西	蕨手刀子	長さ9.6、幅1.1、厚さ0.2 ～ 0.3	完形	斜位
26	88	15	西	蕨手刀子	長さ[3.6]、幅1.2、厚さ0.2	頭部片。88・89同一個体	斜位
26	89	15	西	蕨手刀子	長さ[6]、幅1.2、厚さ0.3	身部片。88・89同一個体	斜位。刀子60上
26	90	15	西	環状振り鉄線	長さ約8、径0.5 ～ 0.6	90 ～ 92同一個体か	蕨手刀子65-86上
26	91	15	西	環状振り鉄線	長さ約2.5、径0.5 ～ 0.6	90 ～ 92同一個体か	蕨手刀子65-86上
26	92	15	西	環状振り鉄線	長さ約2.5、径0.5 ～ 0.6	90 ～ 92同一個体か	蕨手刀子65-86上
26	93	15	西	鉄環	幅0.7、厚さ0.15 ～ 0.2、外径2.1 ～ 2.4	一部欠損	蕨手刀子65-86上
26	94	-	西	板状鉄片	長さ[3]、幅[2.6]、厚さ0.15 ～ 0.2	剣茎片の可能性あり	鉄線101・102上
26	95	15	西	振り鉄線	長さ[8.3]、径0.4 ～ 0.6	95 ～ 97同一個体か	埋土SW区
26	96	-	西	振り鉄線	長さ[1.6]、径0.4 ～ 0.5	95 ～ 97同一個体か	埋土SW区
26	97	-	西	振り鉄線	長さ[2.9]、径0.5	95 ～ 97同一個体か	埋土SW区
26	98	15	西	振り鉄線	長さ[2.2]、径0.3	98 ～ 100同一個体か	埋土SE区
26	99	15	西	振り鉄線	長さ[1.5]、径0.3	98 ～ 100同一個体か	埋土SE区
26	100	15	西	振り鉄線	長さ[1]、径0.3	98 ～ 100同一個体か	埋土SE区
26	101	15	西	振り鉄線	長さ[5.3]、径0.5	101・102同一個体か	斜位。板状鉄片94下
26	102	15	西	振り鉄線	長さ[2]、径0.35 ～ 0.4	101・102同一個体か	斜位。板状鉄片94下
26	103	15	西	振り鉄線	長さ[2.6]、径0.4	98 ～ 102と類似	斜位。玉群隣接
26	104	-	西	鉄線	長さ[1.1]、径0.2　※2本の細鉄線を捩って１本にしている可能性もあり		斜位
26	105	15	西	鉄線	長さ[3.3]、幅0.4、厚さ0.2	105・106同一個体か	斜位。玉群隣接
26	106	15	西	鉄線	長さ[5.3]、幅0.5、厚さ0.2　※2本の細鉄線を捩って１本にしている	105・106同一個体か	斜位。玉群隣接
26	107	15	西	鉄線	長さ[2.7]、幅0.4、厚さ0.2	107・108同一個体か	斜位。玉群隣接
26	108	15	西	鉄線	長さ[4.1]、幅0.5、厚さ0.2	107・108同一個体か	斜位。玉群隣接
26	109	-	西	鉄線	長さ[2.2]、幅0.4、厚さ0.2	109・110同一個体か	埋土NW区
26	110	-	西	鉄線	長さ[4.3]、幅0.4、厚さ0.2	109・110同一個体か	埋土SW区



第27図　３号墳石室出土滑石製臼玉実測図（1/1）

加工痕は認められない。東区のB14・18・21は鉄鉗、B10は刀子、B25は剣の下から出土しているが、鉄鉗や刀子は副葬後に移動している可能性も高く、また多くの礫に鉄分が付着しているということもないため、必ずしも副葬品の下に据えているとも言えない。西区のB3・6や東区の中央の礫は石室長軸方向に配置されているようにも見える。一方、西区のB7・8は比較的大きな礫を北西角と南西角に置いているようにも見える。重量120g以上の比較的大きな礫は、石室埋土や石材の抜き痕から出土する傾向がある。

赤色範囲　東区北側にわずかながら赤色の範囲が認められた。赤色範囲の中央の敷石（石英）が赤色化していたため、蛍光X線分析を行ったところ、鉄のピークが明瞭に検出された。ベンガラなどの赤色顔料である可能性がある。

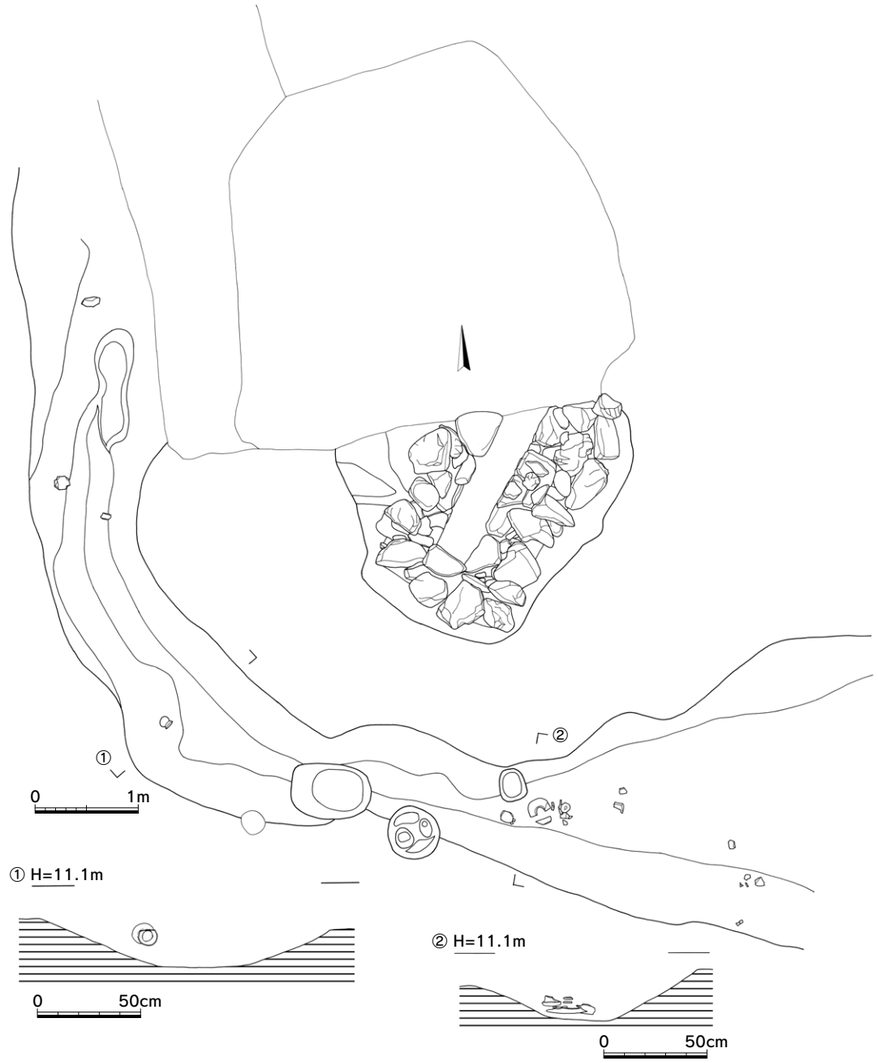
その他副葬に関わらない土器、黒曜石の砕片が石室埋土中から出土した。

以上より、３号墳は周溝まで含め径約15mの墳丘を持つ、横穴式あるいは横口式の石室を主体部とする円墳であり、時期は５世紀前半頃と考えられる。

第４表　３号墳石室出土滑石製臼玉計測表

実測図は第27図。径・厚さ・孔径は㎜、重量はｇ

図番号	図版	径	厚さ	孔径	重量
111	16	6	2.1	1	0.08
112	16	5.2	3.8	1.2	0.16
113	16	5.1	3	1.4	0.12
114	16	5.1	2.7	1.5	0.11
115	16	5.1	2.6	1.5	0.06
116	16	5.1	2.5	1.6	0.1
117	－	5	3.7	1.6	0.15
118	－	5	2.9	2.1	0.11
119	－	5	2.9	1.4	0.07
120	－	5	2.7	1.5	0.08
121	－	4.9	2.2	1.7	0.07
122	－	4.9	2.1	1.7	0.07
123	－	4.9	2	1.8	0.07
124	－	4.9	2	1.7	0.06
125	－	4.9	1.9	1.6	0.07
126	－	4.9	1.5	1.4	－
127	－	5	1.9	－	0.05
128	－	4.8	2.9	1.3	0.09
129	－	4.8	2.9	1.7	0.09
130	－	4.8	2.7	1.7	0.09
131	－	4.8	1.8	1.6	0.07
132	－	4.8	1.8	1.7	0.05
133	－	4.8	1.8	1.5	0.07
134	－	4.8	1.6	1.4	－
135	－	4.8	1.5	1.8	0.06
136	－	4.7	3.8	1.5	0.14
137	－	4.7	3	1.8	0.08
138	－	4.7	2.3	1.6	0.07
139	－	4.8	3.8	1.4	0.12
140	－	4.6	2.7	1.6	0.09
141	16	4.6	2.6	1.7	0.08
142	16	4.6	2.3	2	0.08
143	16	4.6	2.3	1.5	0.05
144	16	4.6	2.2	1.5	0.08
145	16	4.6	1.9	1.7	0.08
146	16	4.6	2.7	1.7	0.09
147	－	4.6	1.3	1.2	0.04
148	－	4.5	3	1.2	0.08
149	－	4.5	2.7	1.5	0.06
150	－	4.5	2.5	1.6	0.06
151	－	4.5	1.8	1.5	0.07
152	－	4.4	2.6	1.6	0.08
153	－	4.4	2.6	1.4	0.08
154	－	4.4	2.5	1.5	0.04
155	－	4.4	1.9	1.4	0.06
156	－	4.4	1.8	1.6	0.05
157	－	4.3	2.4	1.5	0.08
158	－	4.3	1.8	1.5	0.05
159	－	4.3	1.8	1.5	0.05
160	－	4.2	2.6	1.3	0.08
161	－	4.2	2.6	1.6	0.07
162	－	4.2	2.5	1.5	0.07
163	－	4.2	2.5	1.6	0.06
164	－	4.2	2.2	1.3	0.07
165	－	4.2	1.7	1.5	－
166	－	4.1	2.8	1.2	0.09
167	－	4.1	2.7	1.5	0.07
168	－	4.1	2	1.7	0.04
169	－	4.1	2	1.7	0.05
170	－	4.1	1.7	1.4	0.05
171	－	4.1	1.1	1.6	－
172	－	4	2.9	1.9	0.06
173	－	4	2.3	1.1	0.07
174	－	4	2	1.5	0.04
175	－	4	1.9	1.5	0.04
176	－	4	1.8	1.8	－
177	－	4	1.6	1.5	－
178	－	4	1.5	1.5	0.03
179	－	4	1	1.4	－
180	－	3.9	2.4	1	0.04
181	－	3.9	2.3	0.9	0.05
182	－	3.9	2.2	1.2	0.05
183	－	3.9	2	1.2	0.05
184	－	3.9	1.8	1.7	0.04
185	－	3.8	2.5	1.7	0.05
186	－	3.8	2.4	1.2	0.07
187	－	3.8	2.3	1.2	0.06
188	－	3.8	2.3	1.3	0.05
189	－	3.8	2.2	1.3	0.05
190	－	3.8	1.7	1.3	－
191	16	3.8	1.6	1.1	0.04
192	16	3.7	2.8	1.7	0.04
193	16	3.7	2.5	1.2	0.03
194	16	3.7	2.4	1	0.06
195	16	3.7	2.3	1.1	0.05
196	16	3.7	2.2	1.2	0.05
197	－	3.7	2.1	1.2	0.05
198	－	3.7	1.9	1.2	0.04
199	－	3.6	2.9	1.2	0.06
200	－	3.6	2.4	1.7	0.04
201	－	3.6	2.4	1.2	0.04
202	－	3.6	2.2	1.2	0.03
203	－	3.6	2.2	1.1	0.05
204	－	3.6	2.1	1.4	0.04
205	－	3.6	2.1	1.1	－
206	－	3.5	2.5	1.3	0.05
207	－	3.5	2.2	1.8	0.04
208	－	3.4	2.1	1.7	0.04
209	－	3.2	2.5	1.2	0.04
210	－	3.5	2.2	1	0.05
211	－	3.1	2.9	－	0.04
212	－	3.1	2.2	0.7	－
213	－	3.1	2.2	1.1	－
214	－	3	2.5	0.9	－
215	－	3	2.4	1.3	－
216	－	3	2.4	1.3	－
217	－	3	2.4	0.9	－
218	－	3	2.4	1	－
219	－	3	2.1	0.9	－
220	－	3	2.1	0.7	－
221	－	3	1.9	0.9	－
222	－	3	1.9	1.3	－
223	－	2.9	2.9	1.1	－
224	－	2.9	2.5	1.4	－
225	－	2.9	2.2	1.1	－
226	－	2.9	1	1.1	－
227	－	2.8	2.4	1	－
228	－	2.8	2.4	1.2	－
229	－	2.8	2.2	1	－
230	－	2.8	2.2	1	－
231	－	3.2	1.8	1	－
232	－	2.8	2.1	1.5	－
233	－	2.8	2.1	1	－
234	－	2.8	2.1	1.3	－
235	－	2.7	2.5	0.9	－
236	－	2.7	2.4	1	－
237	－	2.7	2.2	1.4	－
238	16	2.7	2.2	0.9	－
239	16	2.7	2.1	1	－
240	16	2.7	2	1.4	－
241	16	2.7	1.9	1.3	－
242	－	2.6	2.2	－	－
243	16	2.6	2.1	0.8	－
244	16	2.6	2.1	1	－
245	－	2.5	2.6	1	－
246	－	2.3	2.2	0.9	－
247	－	2.2	2.6	1.3	0.03



第28図　４号墳実測図（1/60、1/30）

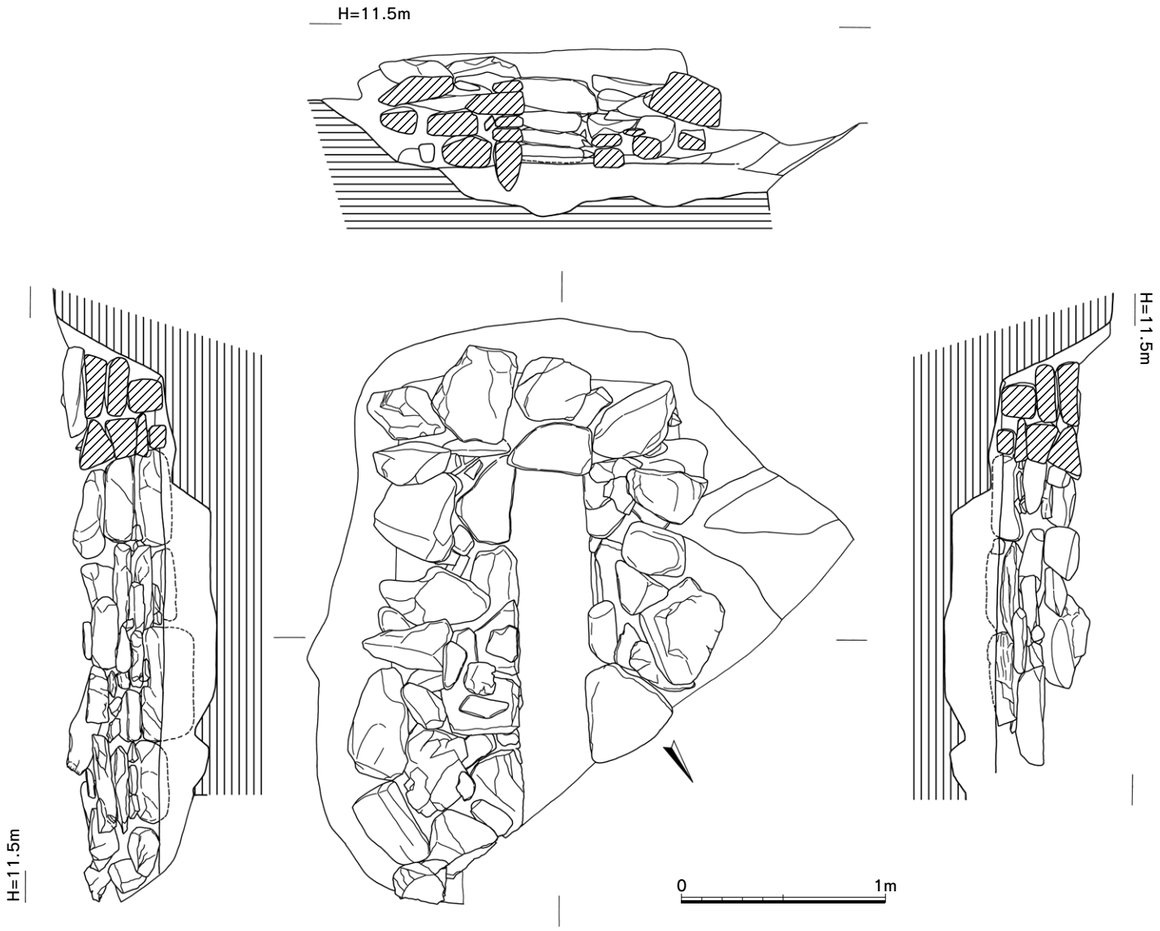
４号墳（第19・28・29図、図版17～20）

本古墳は調査区北側西寄りで検出された。３号墳の西側に位置する。最初に石室掘方が検出され、周辺を精査したところ、薄く堆積していた茶褐色の包含層下面で周溝が確認された。周溝は３号墳の周溝西側に接して半円を描き、調査区北側の地山落ち際の手前で消滅している。中近世以降の整地で削平されたと思われる。墳丘は残存しておらず、石室も後世による攪乱で上部および北側部分が削平されており、残存状況はあまりよくない。

主体部　主軸をN32°30′Eにとる石棺系竪穴式石室である。

墓壙掘方および石室は北側が一部削平されているが、残存部分で推定すると、掘方は長さ2.8m、幅1.9mの平面が長方形を呈するが、西側長辺が一部広がっている。この部分が本来の掘方か、壁の崩落によるものかは判然としなかった。底面は石室内法部分が一段深く掘り下げられている。深さは浅い部分で0.45m，深い部分で0.7mである。

両側壁の基底部にはやや大きめの石を据えるが、その底面レベルはふぞろいである。その上に４～５段やや平板な石を平積みする。積みの隙間には小石を詰め込む。小口部は平板な石を平積みする。

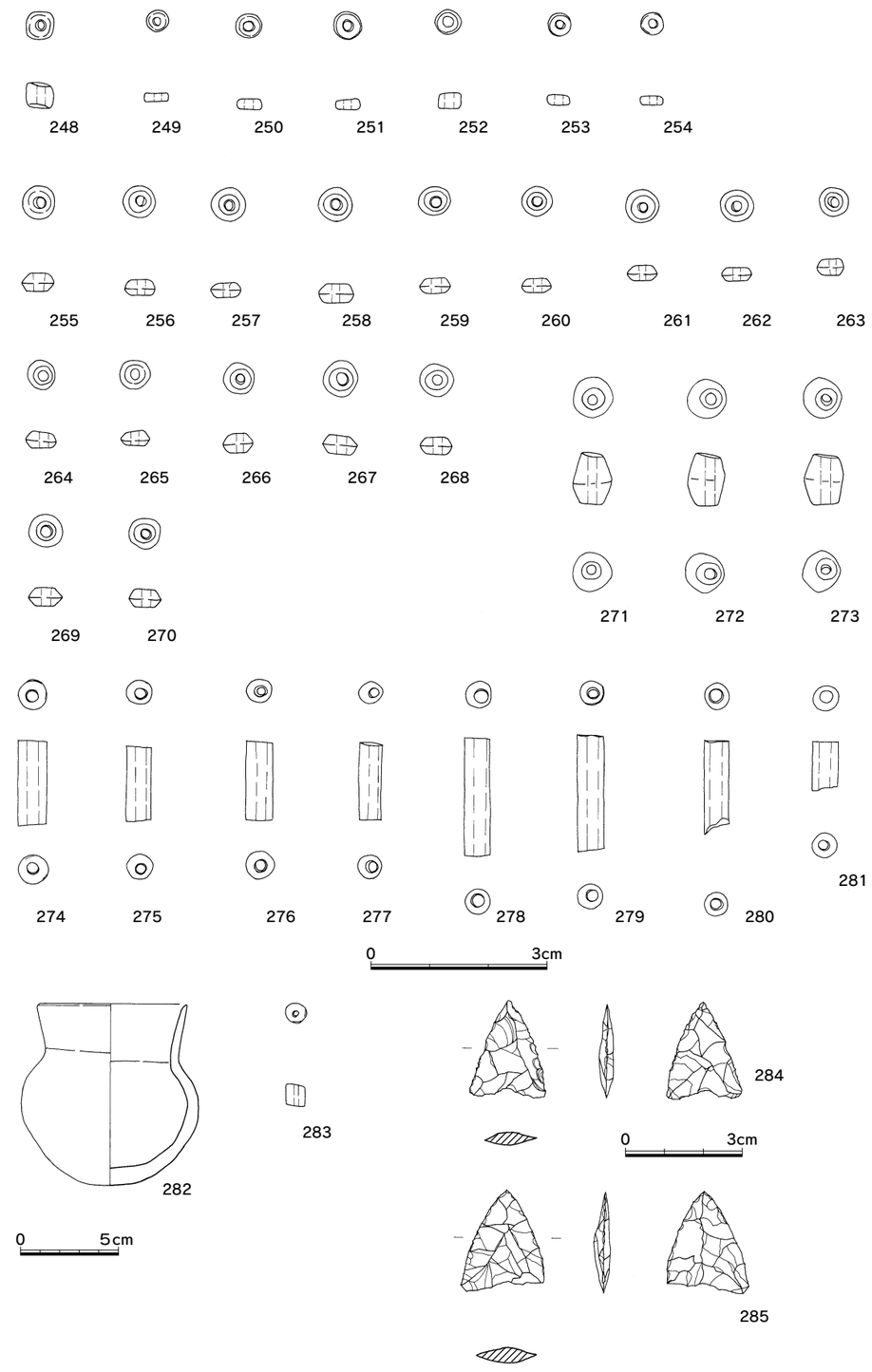


第29図　４号墳石室実測図（1/30）

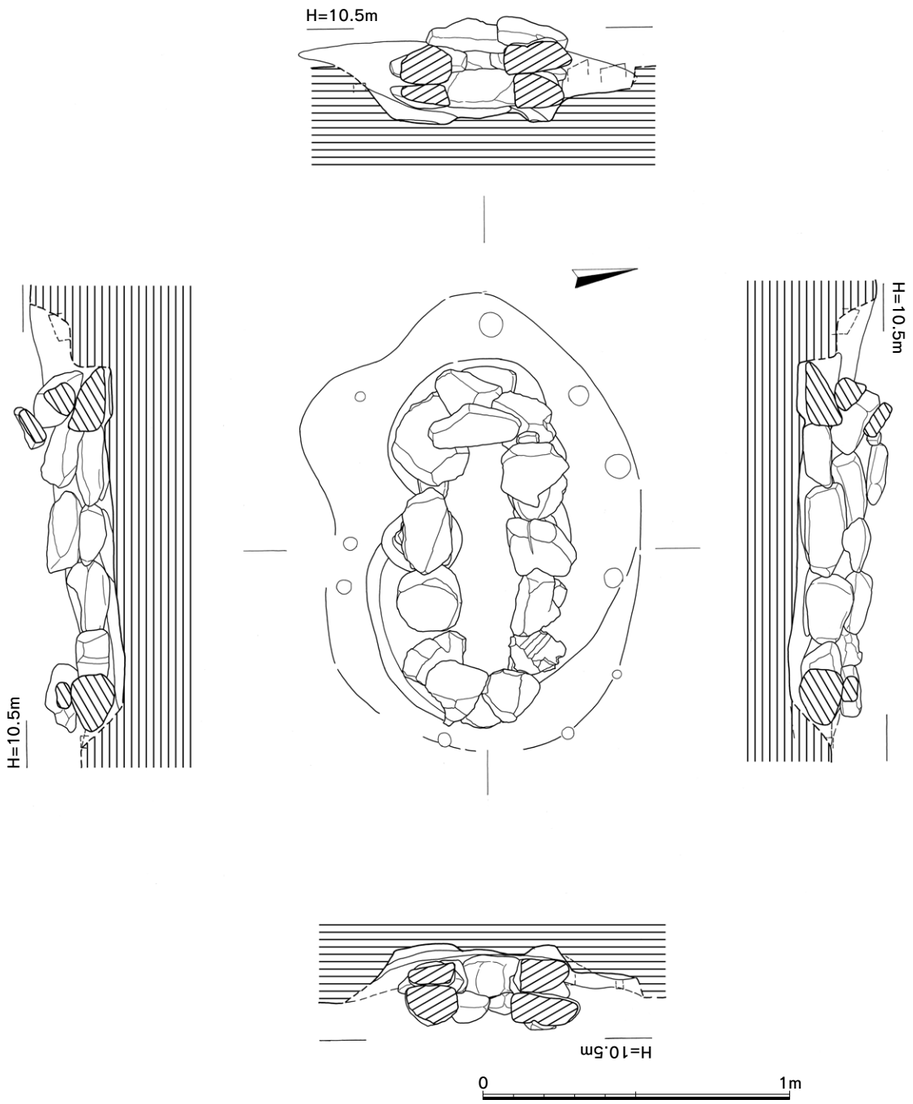
両側壁、小口部ともに控えにはもう一列石を積む。小口部の控えは平石であるが、両側壁の控えはやや不揃いの塊石である。石室内部の法量に対して頑丈にしつらえた観を呈する。石室内法は残存長1.2m、幅0.34m、積み石上端から底面までの深さは0.46mを測る。床面は素掘りで石敷き等は認められなかった。小口および両側壁の内側にベンガラの可能性が高い赤色顔料の塗布が認められる。使用石材はほとんどが花崗岩で、一部玄武岩が含まれる。被葬者人骨や配置された状態の副葬品も検出されていないが、石室の埋土や石の裏込めから玉類が出土している。

第５表　４号墳出土玉類観察表

図番号	種類	出土地点	材質	色調	径×長さ×孔径(mm)	図番号	種類	出土地点	材質	色調	径×長さ×孔径(mm)
248	小玉	石室内	ガラス	コバルトブルー	5.0×4.0×1.2	265	臼玉	石室内	滑石	薄い緑灰	5.0×2.0×1.2
249	小玉	石室内	滑石	緑灰	4.0×1.0×1.2	266	臼玉	石室南裏込め	滑石	灰緑	5.2×3.5×1.0
283	小玉	周溝	ガラス	コバルトブルー	3.5×4.0×1.0	267	臼玉	石室南裏込め	滑石	灰緑	6.0×3.5×1.7
250	小玉	石室内	滑石	灰緑	3.9×1.0×1.5	268	臼玉	石室南裏込め	滑石	灰緑	6.0×3.0×1.7
251	小玉	石室内	滑石	濃緑灰	4.0×2.0×1.2	269	臼玉	石室南裏込め	滑石	灰緑	6.0×3.0×1.5
252	小玉	石室内	滑石	緑灰	4.0×3.0×1.6	270	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.5×3.0×1.6
253	小玉	石室内	滑石	緑灰	4.0×2.0×1.3	271	棗玉	石室内	凝灰岩	濃緑灰	6.9×9.0×1.6
254	小玉	石室内	滑石	緑灰	4.0×1.8×1.1	272	棗玉	石室南裏込め	凝灰岩	濃緑灰	7.0×9.0×1.7
255	臼玉	石室内	滑石	淡緑灰	5.5×3.0×2.0	273	棗玉	石室南裏込め	凝灰岩	濃緑灰	6.5×9.0×1.7
256	臼玉	石室内	滑石	淡緑灰	5.0×3.0×1.5	274	管玉	石室内	凝灰岩	緑灰	5.0×14.0×1.9
257	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.9×2.7×1.0	275	管玉	石室内	碧玉	淡緑灰	4.1 ～ 4.0×13.0×1.8　一部欠
258	臼玉	石室内	滑石	緑灰	6.0×3.2×1.1	276	管玉	石室内	凝灰岩	暗緑灰	4.5 ～ 4.1×14.0×1.8
259	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.2×2.2×1.9	277	管玉	石室内	凝灰岩	暗緑灰	4.0×13.0×1.6
260	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.1×2.5×1.3	278	管玉	石室内	碧玉	淡緑灰	4.5×20.0×2.1
261	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.4×1.9×1.1	279	管玉	石室内	碧玉	淡緑灰	4.2×20.0×2.0
262	臼玉	石室内	滑石	緑灰	5.5×2.5×1.3	280	管玉	石室南裏込め	碧玉	淡緑灰	4.1×16.0×2.0　一部欠
263	臼玉	石室内	滑石	灰緑	5.0×3.0×1.1	281	管玉	石室南裏込め	碧玉	淡緑灰	4.1×0.8×2.0
264	臼玉	石室内	滑石	灰緑	5.0×3.0×1.7						



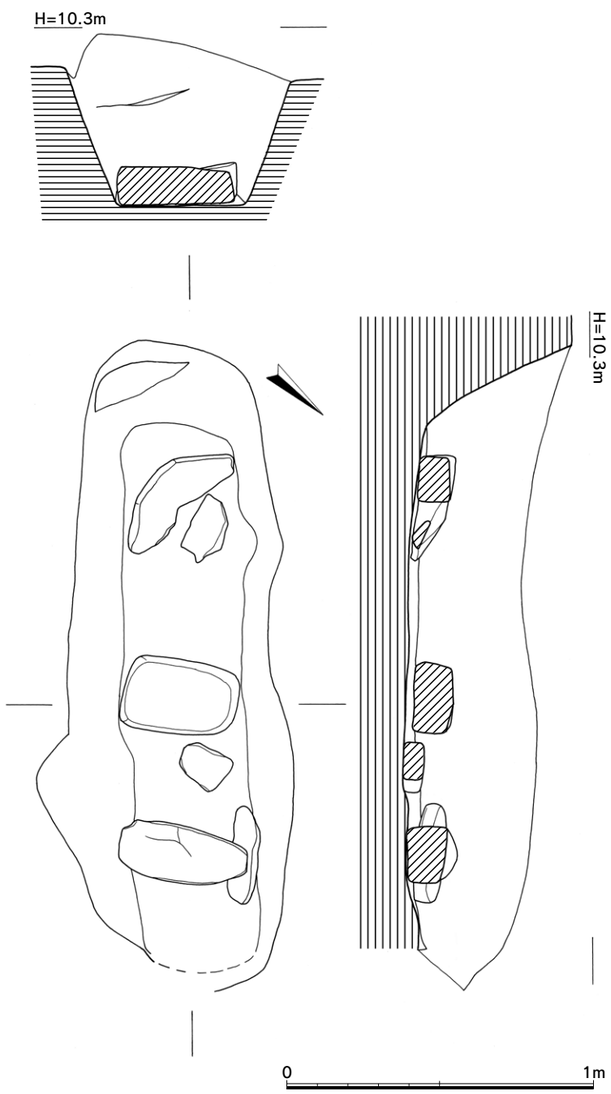
第30図　４号墳出土遺物実測図（1/1、2/3、1/3）



第31図　小石室実測図（1/20）

墳丘及び周溝　墳丘は前述のとおり、完全に削平されており、周溝および石室の一部が残存しているのみであった。そのため、墳丘が地山整形によるものか、盛土によるものかは判明しない。周溝と石室の間にトレンチを入れて確認したところ、少なくとも地山の赤褐色バイラン土上面に堆積している縄文時代の黄褐色包含層の上面から周溝および石室墓壙は掘り込まれていることが判明した。

周溝は幅１～３m、深さ0.3m程度で、石室中心より外径で西側５m、南側3.7m、東側4.5m以上となる。石室の周辺を巡るが北側半分は削平により検出されなかった。周溝内部から土師器小壺、高坏等の土器が出土した。また、葺石と思われる礫も出土している。土器は非常にもろくなっており、取り上げの段階で破損してしまい、図化出来たのは小壺の１点のみである。



第32図　土壙墓実測図(1/20)

以上の知見から、４号墳は周溝まで含め径約９mの墳丘を持つ竪穴式石室を主体部とする円墳であり、時期は５世紀前半頃と考えられる。

出土遺物（第５表、第30図、図版22⑵～⑷）　248～281は石室内からの出土である。248～254は、小玉、255～270は臼玉、271～273は、棗玉、274～281は、管玉である。玉類の法量等は表にまとめている。

282、283は、周溝から出土した。282は、土師器小壺。復元口径7.6㎝、器高9.3㎝を測る。胎土に金雲母、砂粒を含み、明赤褐色を呈する。283は、ガラス製の小玉である。径3.5㎜、高さ４㎜を測る。コバルトブルーを呈する。

284、285は、墳丘下面の黄褐色包含層から出土した。石鏃である。いずれも摩耗が激しい。284は、長さ2.5㎝、脚部幅1.9㎝、厚さ4.0㎜、285は、長さ2.6㎝、脚部幅2.1㎝、厚さ4.0㎜を測る。サヌカイト製である。

小石室（第31図、図版21⑴～⑶）

３号墳の周溝と４号墳の周溝が接する地点で、周溝底面付近のレベルで検出された。墳丘は認められない。小ぶりの石を１～２段積み重ねて構築する小型の石室である。主軸をN81°30′Eにとる。掘方は長軸が1.5m、短軸が1.0mの平面楕円形を呈し、中央部分で深さ0.27mを測る。西側部分がやや広くテラス状となる。石積みの構築は、まず、基底面に小振りのほぼ同程度の大きさの塊石を両側壁に据え上に石を積む。小口部も同様であるが、西側小口は上部に平面三角形の平石を据えており、こちらが頭位ではないかと推定される。床面は素掘りである。石材は花崗岩を使用している。

床面からは人骨や副葬品などは検出されなかったが、掘方内側周囲に30～40㎝おきに杭を打ち込んだような痕跡が１０か所検出された。杭は取り上げの段階で破損している。石室との距離や位置関係から石室に伴うものと考えられるが、どのような施設であったかは不明である。石室を覆う覆屋のようなものが存在したかもしれない。

遺物が出土していないため時期決定ができず、また、３号墳、４号墳いずれの主体部とも主軸は異なりいずれの古墳に属するものかは判断が難しかった。

土壙墓（第32図、図版⑷～⑹）

４号墳の北西部、調査区北端付近の地山バイラン土の落ち際で検出した。上部が攪乱に切られていたため、中世の包含層を除去して精査している段階で発見した。

墓壙は、長さ2.15m、上面幅0.65m、底面幅0.38mを測る平面隅丸長方形を呈し、深さが0.45mである。主軸をN48°Eにとる。床面に花崗岩の平石が３個認められた。墓壙の掘方底面にほぼ接しているところから、本来平石が床面に敷設されていたものと思われる。墓壙は後世の攪乱で大きく削平されており、人骨、遺物は出土していない。また墓壙壁面にも施設の痕跡は認められなかった。

周辺を精査したが、周溝は検出されなかった。地山の落ち際で削平も激しいところであるが、３号墳、４号墳の状況や土壙墓の残存状況から考えても本来周溝や墳丘はなかったのではないかと推定される。

４．小結

２区は、縄文時代以前の包含層（旧表土）、古墳、中世後期・近世の村落、近代集落と変遷する。縄文時代以前の包含層は、徳永B遺跡第３次調査でも確認されており、高祖山から北に伸びる丘陵上は該期以来の生活の場であったようだ。古墳時代には周辺で山ノ鼻１号墳、若八幡宮古墳、丸隈山古墳という前方後円墳が築造される中で、３・４号墳とそれに付随する小石室・土壙墓が形成される。その後、古墳時代後期から中世前期までが空白期となり、戦国期の村落形成に伴う遺構・遺物が認められる。江戸時代には姪浜・今宿・前原の宿場町および唐津街道が整備され、それに呼応して１・２区間の旧道沿いも特に江戸時代後期に村落開発が本格化したようである。その際に、相互の因果関係は不明であるが、３・４号墳は丘陵頂部とともに削平され、丘陵南西部のみが取り残されて一字一石経塚が祀られるようになったと想像される。

第６表　３号墳石室出土玄武岩礫観察表

長さ・幅・厚さはcm。重量はｇ

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅	形態	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅	形態
B1	西区（第24図）	7.56	1.74	1.6	29.66	4.34	長楕円。完形。鉄分付着	B19	東区（第24図）	5.18	4.05	2.75	80.06	1.28	方形。完形
B2	西区（第24図）	5.96	3.98	1.15	34.59	1.50	楕円扁平。完形	B20	東区（第24図）	6.31	3.36	2.1	80.36	1.88	楕円。完形
B3	西区（第24図）	5.8	3.8	1.03	39.32	1.53	長方形扁平。完形	B21	東区（第24図）	7.97	2.52	2.46	83.84	3.16	長楕円。1/4欠損
B4	西区（第24図）	7.52	2.52	1.54	40.48	2.98	長楕円。半割	B22	東区（第24図）	5.5	4.57	2.34	89.43	1.20	方形。完形
B5	西区（第24図）	7.08	4.38	1.31	59.15	1.62	楕円扁平。完形	B23	東区（第24図）	5.87	5.26	2.4	104	1.12	方形。完形
B6	西区（第24図）	7.63	4.96	1.03	60.63	1.54	楕円扁平。完形	B24	東区（第24図）	8.27	4.48	2.46	114.4	1.85	楕円。完形
B7	西区（第24図）	8.6	6.25	1.22	92.3	1.38	方形。完形	B25	東区（第24図）	8.33	5.17	2.25	148.73	1.61	楕円。完形。鉄分付着
B8	西区（第24図）	11.9	6.54	2.35	232.43	1.82	楕円扁平。完形	B26	北東側石抜痕（第24図）	8.56	5.26	2	121.28	1.63	楕円。完形
B9	東区（第24図）	7.6	2.63	1.48	38.24	2.89	長楕円。完形	B27	東北側石抜痕（第24図）	8.62	7.7	2.74	182.56	1.12	湾曲。完形
B10	東区（第24図）	6.93	3.7	1.47	45.5	1.87	楕円扁平。完形	B28	北西側石抜痕	7.42	5.96	2.2	138.58	1.24	方形。完形
B11	東区（第24図）	6.31	2.85	1.77	46.6	2.21	楕円。完形	B29	埋土一括	4.51	3.94	0.45	11.57	1.14	楕円。破片
B12	東区（第24図）	4.78	4.67	1.95	55.3	1.02	方形。2/3欠損	B30	埋土一括	6.7	2.78	1.57	32.93	2.41	長楕円。1/4欠損
B13	東区（第24図）	5.04	3.55	2.15	59.45	1.42	方形。完形	B31	埋土一括	5.39	3.87	1.55	42.37	1.39	方形。完形
B14	東区（第24図）	5.59	4.04	1.84	60.13	1.38	方形。完形	B32	埋土一括	6.72	5.95	1.07	144	1.13	方形。完形
B15	東区（第24図）	4.56	4.12	2.17	62.55	1.11	方形。完形	B33	埋土一括	9.05	5.81	1.59	147.08	1.56	長方形。完形
B16	東区（第24図）	5.6	4.55	2.16	65.29	1.23	方形。完形	B34	埋土一括	11.41	3.63	2.36	153.61	3.14	長楕円。完形
B17	東区（第24図）	7.59	5.68	1.69	73.13	1.34	楕円扁平。完形	B35	埋土一括	8.4	6.25	2.1	166.83	1.34	楕円。完形
B18	東区（第24図）	6.62	4.33	1.96	76.83	1.53	楕円。1/4欠損	B36	埋土一括	8.86	4.78	2.7	186.02	1.85	楕円。完形

Ⅴ　３区の調査

１．調査の概要

第４次調査３区は、西区徳永に所在する。調査前の標高は約9.4mを測る畑地で、周辺の宅地からは約２m低い場所に位置している。「Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境」でも触れたように、調査地点は遺跡の中北部に位置し、隣接する北西側では、伊都区画整理事業に伴って、第２・３次調査が、南西側では国道202号線今宿バイパスの建設に伴って第１次調査が実施されている。

本調査区は、１区・２区の丘陵から東に下った谷の東側段丘上で、山ノ鼻池へ落ちる谷の斜面を段丘上に造成した立地である。調査区東側は、近世期に旧地形の谷斜面を利用して棚状の田畑が営まれ、その時の造成により丘陵斜面は削平を受け、西側へ段落ちしている。本調査区は、近世段造成の下段にあたる部分で削平を免れており、現況地形は旧地形における谷際の平場をある程度反映していると考えられる。

2012年６月15日に行った試掘調査においては、北側は耕作土下30㎝で花崗岩風化層に起因する黄褐色の遺構面があり、南側は耕作土下30～100㎝が近世埋立土、地表面から約160㎝下で遺構面を確認した。南側のトレンチでは溝やピットが検出されているほか、粉青沙器等が採取されており、当該期の遺構や遺物が検出されることが推測された。

発掘調査は平成24（2012）年７月２日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始した。その後、遺構面保護、基準レベル移動、日本測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、遺構検出を開始した。順次、南側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した８月２日に高所作業車による全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け等を終え、３区の調査を完了した。出土遺物はコンテナケースにして２箱である。

なお、調査対象面積は、394㎡であったが、実際に作業を行った面積は353㎡であった。３区の調査時の遺構番号は001から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

２．調査の記録

３区においては、掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出した。以下、遺構毎に記述する。

１）掘立柱建物

SB120（第34図）　調査区中央に位置する２×３間の建物である。

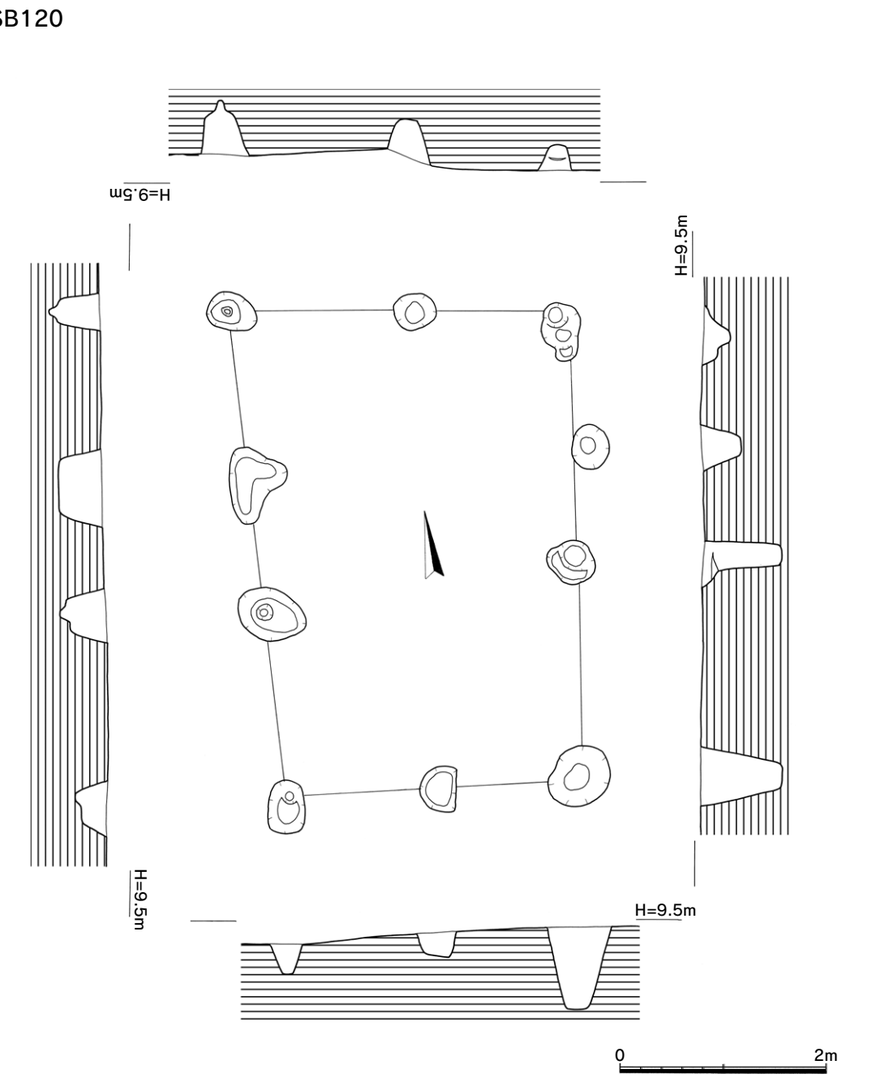
SB121（第35図）　調査区中央北側に位置する２×３間の建物である。

２）溝

SD007（第33･36図）　調査区西側で検出した南北方向に走る溝である。南側は近代の造成によって削平されている。床面は礫層が露出する。土層観察から、少なくとも１度西側の堀直しが行われていることが確認できる。

SD002（第33図）　調査区中央を南北に走り、途中で東へ曲がる溝を検出した。深さは約４～５㎝と残りはよくない。また、遺物の出土もなかった。

第33図　３区全体図（1/200）



第34図　SB120実測図（1/60）

３）土坑

SK004（第33図）　調査区西端で検出された。陶磁器類が多く出土しており、廃棄土坑であると考えられる。SD007を切っている。

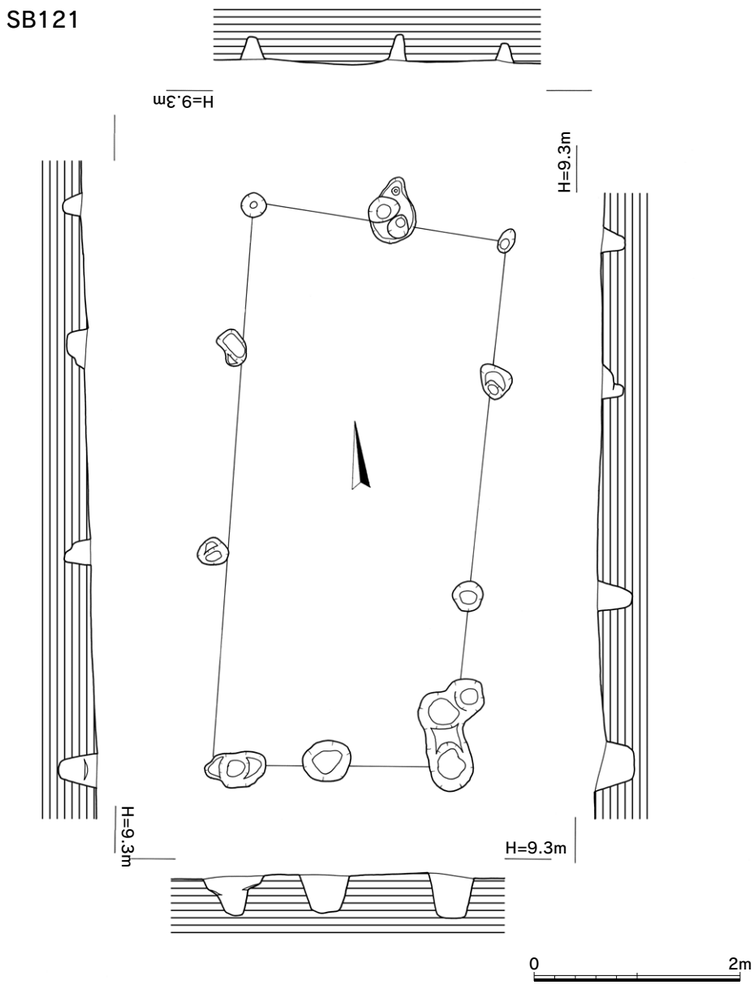
出土遺物（第36図）　１・２は肥前系磁器碗である。１は10.4㎝、底径3.2㎝、器高5.4㎝を測る。外面には草花文、内面に虫文が描かれる。畳付は釉剥ぎされる。２は口径10㎝、底径4.4㎝、器高5.1㎝を測る、腰が張る高台の低い丸碗である。３は陶器の仏花器である。外面は灰釉が施釉され、底部は糸切りである。

SK001（第33図）　直径約50㎝の円形の土坑に甕の底部が据えられた状態で検出した。

出土遺物（第36図）６は底径14㎝の陶器甕である。上半は削平によるものか、出土しなかった。

SK110（第33図）　直径約52㎝の円形の土坑に甕が割られて埋められたような状況で検出した。

出土遺物（第36図）４は青花皿の口縁部である。内外面に草花文が描かれる。５は内面は底部から

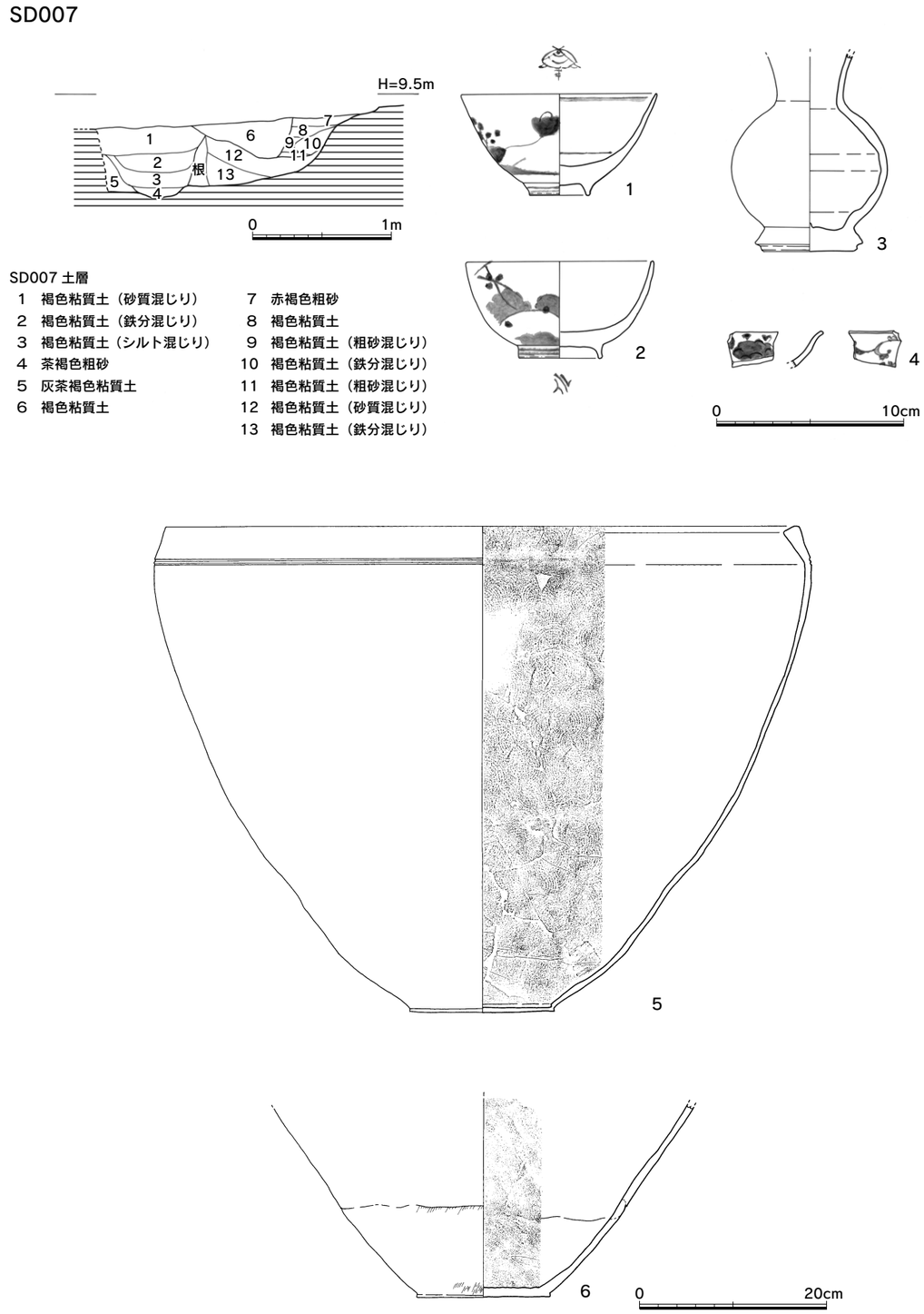


第35図　SB121実測図（1/60）

口唇部付近まで同心円状のタタキを行ったあと、一部をナデている。外面の頸部には、２本の沈線がめぐる。

４）その他の遺構・遺物

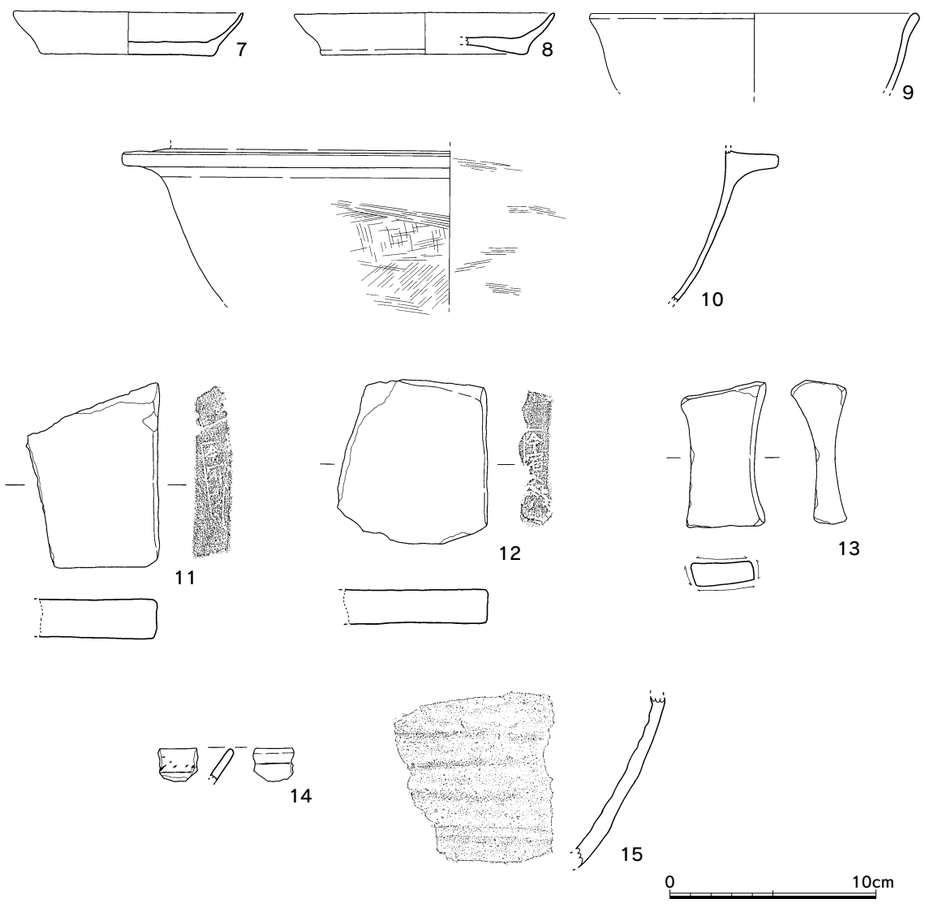
７・８は底部糸切りの土師器小皿である。７はSP011から出土した。復元口径11㎝、底径8.2㎝、器高2.05㎝で、内外面とも磨滅しており、胎土には１㎜程の白色粒を少量含む。８はSP092から出土した。復元口径12.6㎝、底径10㎝、器高２㎝である。９はSP013から出土した青磁碗である。10はSP048から出土した土師器の羽釜である。鍔および胴部下半には煤が付着している。内外面とも一部ハケメが見られるが、磨滅している。胎土には雲母片、赤色粒を含む。11・12は今宿瓦である。11はSP098、12はSP096から出土している。いずれも平瓦で、木口に「今宿又市」「今宿○○（判読不可）」銘のスタンプが押印される。外面は、やや灰味がかった黒色を呈し、胎土は灰白色。径１㎜ほどの白色粒を胎土に含む。全面ナデ調整である。13は砥石である。SP079から出土した。四面を砥面として使用している。14・15は、試掘調査で出土した遺物である。14は象嵌青磁の碗の口縁部である。15は陶器の甕または壺である。内外面とも褐釉が施釉されており、灰褐色から暗褐色を呈する胎土には２㎜ほどの白色粒を含む。



SD007 土層

1　褐色粘質土（砂質混じり）
2　褐色粘質土（鉄分混じり）
3　褐色粘質土（シルト混じり）
4　茶褐色粗砂
5　灰茶褐色粘質土
6　褐色粘質土
7　赤褐色粗砂
8　褐色粘質土
9　褐色粘質土（粗砂混じり）
10　褐色粘質土（鉄分混じり）
11　褐色粘質土（粗砂混じり）
12　褐色粘質土（砂質混じり）
13　褐色粘質土（鉄分混じり）

第36図　SD007実測図（1/40）およびSK004・SK001・110出土遺物実測図（1/3、1/6）



第37図　その他の出土遺物実測図（1/3）

３．小結

今回の調査では、溝、土坑、ピット等を検出した。出土遺物から、本調査区範囲は、中世後半から近世後半にかけての集落が営まれていたと考えられる。近世後半期の徳永地域の様相を表す遺物としてピット内から出土した今宿瓦が挙げられる。文字銘瓦は現在のところ福岡城、博多遺跡群、観音寺講堂跡から出土しており、今回出土した２点は、「筑前に於ける中近世瓦の分類試案（下）」（井澤1996）による、文字銘瓦のⅢＢ類に相当する。ⅢＢ類期は「名跡を受け継いだ商標的要素も生まれる時期でもあり、（中略）「今宿又市」「今宿市衛門」などは、個人を特定した「𡚁平」銘の印判とは意味に違いがあり、屋号・商標的要素が強くな」り、「元文５年の瓦葺き奨励策と拝借金制度の実施による一般町人への家屋への瓦葺きの普及・定着の時期」であり、「19世紀の中頃から後半代の時期と見ることが出来る」。今回出土した文字銘瓦は、近世後半期において今宿における瓦の生産が拡大し、それが地元にも流通し消費されていたということが確認できる資料である。

引用・参考文献：井澤洋一　1996 「筑前における中近世瓦の分類試案（下）」『福岡市博物館研究紀要』第６号

Ⅵ　まとめ

１．徳永古墳群I群について

徳永B遺跡第４次調査では、円墳２基を確認し、第３次調査で確認された円墳２基とあわせて、新たに「徳永古墳群Ｉ群（TKK-Ｉ）」として包蔵地登録された。ここでは、特にＩ-３号墳を中心に、周辺古墳との比較を行い、徳永古墳群I群の位置づけを整理したい。

墳体および出土遺物の特徴　まずは、徳永古墳群I群の内容を以下のように整理する。

Ｉ-１号墳　周溝・葺石をもつ円墳（外径14m）　主体部消失　墳裾から土師器壺
Ｉ-２号墳　周溝・葺石をもつ円墳（外径18m）　主体部消失
Ｉ-３号墳　周溝・葺石をもつ円墳（外径15m）　竪穴系横口式石室もしくは横穴式石室
　　石室から鉄製武器・工具・鍛冶工具、鉄線製品、滑石製臼玉　周溝から土師器壺・高坏
Ｉ-４号墳　周溝・葺石をもつ円墳（外径９m）　竪穴式石室
　　石室からガラス・滑石・凝灰岩・碧玉製の玉類　周溝から土師器壺・高坏

その他第３次調査では、木棺墓SX002（鉄剣･刀）、木棺墓SX003（鉄剣･刀ほか、ガラス･滑石製小玉）、土壙墓113（碧玉･滑石製玉類）、土壙墓114（瑪瑙･ガラス･滑石製玉類、鞘金具付鉄刀）、石蓋墓154（鍛造鉄斧、銅鏡片、竪櫛）が、第４次調査では小石室と土壙墓が確認されている。

周溝・葺石をもつ直径９～18mの円墳とそれに従属する墳墓で構成され、円墳裾・周溝への土師器壺・高坏の投棄（祭祀）が共通する。主体部は竪穴式石室と竪穴系横口式石室もしくは初期の横穴式石室で、壁体には板石と塊石を併用する。Ｉ-３号墳石室は、小礫敷きの床、板石での石室内区分、玄武岩礫の配置、鉄鉗など鍛冶工具と蕨手刀子、鉄線製品の副葬を特徴とする。須恵器は副葬・供献されない段階であり、出土土師器および副葬鉄器、石室構造から５世紀前半の築造と考えられる。

Ｉ-３号墳の墳丘と石室の特徴は、糸島市の曽根狐塚古墳（５世紀初頭）、西堂四反田１号墳（５世紀中頃）、南田古墳（５世紀後半）、引ヶ浦古墳（５世紀前半末）に最も近い（九州古墳時代研究会編2001、河村編1997）。以下では主に福岡市内の５・６世紀古墳との比較を行いたい。なお資料の出典は『福岡市埋蔵文化財調査報告書第○○集』を「○○集」と略す。年代は各報告書による。

周溝・葺石　市内で周溝をもつ５・６世紀の円墳は、西から元岡古墳群（861集）、相原古墳群（351集）、吉武古墳群（775集）、浦江古墳群（792集）、東入部古墳群（685集）、クエゾノ古墳群（420集）、干隈古墳群（904集）、野間B古墳群（211集）、大谷古墳群（357集）、影ヶ浦古墳群（241集）、箱崎古墳群（949集）、三苫永浦古墳群（476集）などが確認できるが、この中で葺石を伴うものはほとんどない。城田１号墳（866集）は、二段築成墳丘に葺石・周溝をもち、銅鏡が副葬される。箱崎１号墳は、周溝は確認できないが葺石が残る。これらと徳永Ｉ-３号墳、曽根狐塚古墳など糸島市の古墳は、前方後円墳の特徴とも言うべき葺石をもつ円墳として、特殊であるといえる。

板石利用　該期の石室壁材およびその積み方は、小型の塊石上に板石を平積みする飯氏B-12号墳（1108集）、小～中型塊石上に扁平礫を平積みする飯氏B-13号墳（1108集）、徳永B-３号墳（徳永古墳群1985）、相原C-８号墳、吉武S-８号墳、羽根戸B-４号墳（346集）、干隈B-１号墳（干隈熊添古墳1985）、諸岡041号墳（108集）、箱池古墳（箱池古墳1983）、持田ヶ浦2号墳（16集）などがある。徳永Ｉ-４号墳は、後者の範疇で理解できる。徳永Ｉ-３号墳は、腰石に板石を用いたり、側壁の目地に小型の板石を積めたり、仕切り石に板石を用いたりと、花崗岩の板石利用が特徴的である。石棺や割石積み石室など前期古墳の石材利用をより強く踏襲するようである。

小礫敷石　徳永Ⅰ-３号墳の石室床敷石は径1 ～ 8cmとかなり小さい。径10cm以下の小礫敷石は、前方後円墳の他、クエゾノ１号墳第２主体部、クエゾノ５号墳（玉類の部分だけ）、諸岡041号墳、大谷１号墳、名子道１号墳（名子道遺跡1972）、三苫永浦２号墳（476集）など５世紀代の円墳にみられる。６世紀代には径10 ～ 30cmの亜角礫敷きになるのに対し、手の込んだ床面の形成といえる。

石室内区分　石室内の区分（屍床区分）は、墳丘内複数埋葬とも関連し、相続や継承の原理の表れとして複雑な様相を呈す。石室内区分としては、まず４世紀末の鋤崎古墳の１～３号棺（730集）、丸隈山古墳の連接石棺（142集。辻田2011）がある。５世紀後半の月隈丘陵では、丸尾１号墳（114集）では敷石のサイズによって床を区分し、新立表２号墳（218集）ではT字形石室の側壁に平行して石列を設け、床を４つに区分する。６世紀前半の吉武S群では、奥壁に平行する石列と敷石のサイズによって床を区分する。６世紀中頃の浦江古墳群では、敷石サイズによる床区分と複数床面の形成、６世紀後半の元岡古墳群では、奥壁に平行した石列と複数床面の形成がみられる。このような流れの中で、５世紀前半の徳永Ⅰ-３号墳の板石による区分は、南側板石は南壁の入口構造と連動して差し込み固定するのに対し、70cmほど間を空けて、北側板石は床に固定せずに置き据える。石室を東西に区分しているとはいえ、北側は自由度の高い構造になっている点が特徴である。

玄武岩礫配置　徳永Ⅰ-３号墳で確認した石室床への玄武岩礫の配置は、類例の調査不足であり、詳細は不明である。仮に副葬品や遺体の下石であるとすると、床に直置きすることへの忌避とみることもできる。副葬品を布などの有機質で被覆する例や、鋤崎古墳の「突起石」への副葬品配置、クエゾノ５号墳の玉類の下にだけ小礫を敷く行為などにもそのような意味が窺える。このことは浦江古墳群や元岡古墳群でみられる追葬ごとの床面形成へとつながっていくのかもしれない。

鉄鉗　鉄製鍛冶工具、特に鉄鉗の福岡市内出土事例を以下に整理する。

①クエゾノ５号墳例（５世紀中頃。420集）　全長42.2cm。他に鉄槌の副葬がある。
②東入部0504号墳例（５世紀代。685集）　全長45.5cm。墳丘下の三日月状の溝0476から出土。
③桑原A-２号墳例（６世紀中頃。861集）　全長44.6cm。他に鉄槌の副葬がある。
④桑原A-４号墳例（６世紀中頃。861集）　片身の支点からはさみ部。他に鑿？の副葬がある。
⑤広石南４号墳例（６世紀後半。617集）　全長33.5cm。他に鉄槌・鉄製炭掻き棒の副葬がある。
⑥元岡石ヶ元12号墳例（６世紀後半。744集）　全長37.2cm。他に鉄製の大・小の槌、金床、鑿、鏨の副葬がある。

５世紀中頃～６世紀中頃の全長42 ～ 45cm台の大型品①～③と、６世紀後半の全長33 ～ 37cm台の中大型品⑤･⑥に分類される。徳永Ⅰ-３号墳例は、５世紀前半で全長53cmとこれらより古く、大きい（第38図）。全長50cm台の鉄鉗は韓国での出土例がある（李2012）。

徳永Ⅰ-３号墳では、鉄鉗とともに鉄製鏨・鑿、折り曲げた鉈、花崗岩扁平礫、玄武岩礫が鍛冶関係遺物の可能性がある。鉈は折り曲げ部をばねとして機能させ、「鑷子」のように使用した可能性がある（吉川1991）。花崗岩扁平礫は、軟質ながらも「金床石」として使用できる。玄武岩礫は、破損しているものもあり、「石鎚」として使用した可能性もある。このように、鍛冶工具としては６世紀後半のセットに比較すれば、洗練されたものではないが、徳永Ⅰ-３号墳の被葬者の１人が、鍛冶技術に関わる立場の者であったとは言えるであろう。そのような人物が、５世紀前半の社会で一定の階層に位置づけられ、前方後円墳に次ぐ様相の古墳に埋葬された点が重要である。

蕨手刀子　市内では老司古墳、鋤崎古墳に続く出土例である。未確認や失われた類例もあると考えれば、過大評価はできないが、３者に有機的な関係があるのかどうか、今後の検討が期待される。

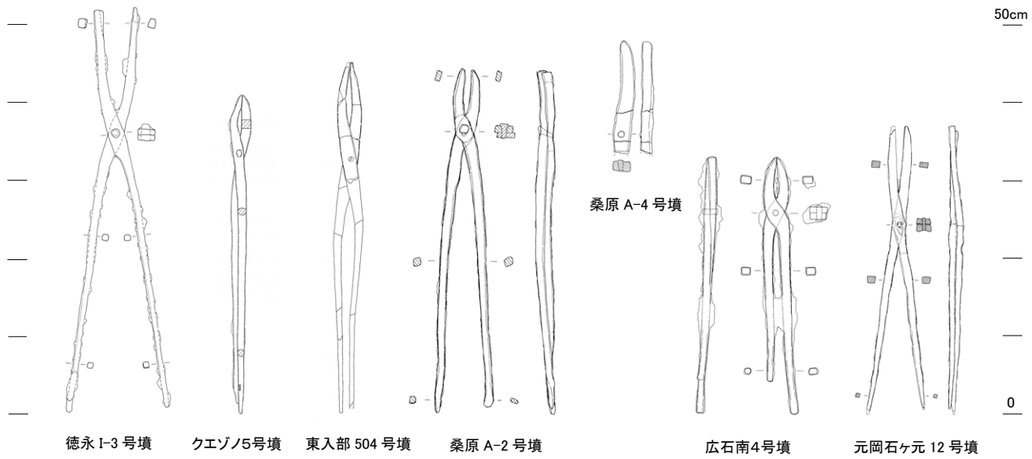
鉄線製品　老司古墳３号石室出土の「捩り金具」（209集）、元岡遺跡群第31次調査１区SX02出土の「捩りのある棒状鉄製品」（1103集）が類例と思われる。老司古墳３号石室出土の「針形鉄器」、鋤崎古墳出土の「鉄針」、徳永B遺跡第３次調査木棺墓SX003出土の「針状鉄器」（1190集）も関連資料かもしれない。径1mmほどの鉄線を最小単位として、2本を捩り合わせ（径2 ～ 3mm）、さらにそれらを捩り合わせ鉄索状（径6 ～ 7mm）としている。徳永Ⅰ-３号墳では、この鉄索を環にしたもの（環状捩り鉄線）に小型鉄環を付け、蕨手刀子13本を束ねていたようである。詳細な関連は不明だが、このような主環と小環という組み合わせは、城田１号墳出土鉄釧や博多遺跡群地下鉄工事調査祇園町工区SK14出土鉄釧にもみられる（193集、福岡市埋蔵文化財センター年報27）。直線の捩り鉄線は滑石製臼玉と一緒に出土しており、装飾品としても使用された可能性がある。なお、北部九州では蕨手刀子と針が共伴するという指摘もあり（鈴木2005）、関連資料の検討が必要である。

徳永古墳群I群の位置づけ　特にⅠ-３号墳は、墳丘・石室に前期前方後円墳の特徴を引き継ぎつつ、石室内には該期の社会構造の変化が反映され、また副葬品には後期へとつながる職能分化の一端が見出せる。古今津湾に面した丘陵上に、山ノ鼻１号墳、若八幡宮古墳、鋤崎古墳、丸隈山古墳という前方後円墳とともに、規模は小さいながらも墳墓としての荘厳さをもって形成された徳永古墳群I群は、今宿古墳群とその社会の多層性を理解する上で重要な資料となると期待される。

謝辞：下にご芳名を掲げる方々には発掘調査から整理・報告にいたる過程で有益なご教示をいただいた。記して感謝したい。
朝岡俊也　諫早直人　上角智希　藏冨士寛　重藤輝行　辻田淳一郎　中村　勝　比嘉えりか　比佐陽一郎　桃崎祐輔（五十音順・敬称略）

引用文献

李東冠（2012）「九州出土の鉄製農工具と鍛冶関係遺物からみた対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉（ 第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集）』
河村裕一郎編（1997）『引ヶ浦古墳（志摩町文化財調査報告書第19集）』志摩町教育委員会
九州古墳時代研究会編（2001）『糸島の古墳（第27回九州古墳時代研究会資料集）』
鈴木一有（2005）「蕨手刀子の盛衰」『待兼山考古学論集（都出比呂志先生退任記念）』大阪大学考古学研究室
辻田淳一郎（2011）「初期横穴式石室における連接石棺とその意義」『史淵』148
吉川金次（1991）「第５章　鉗と鋏」『鍛冶道具考』平凡社



第38図　福岡市内出土鉄鉗実測図（1/8）

２．徳永Ｂ遺跡の中世遺構について

今回報告を行った第４次調査では、中世後半期の区画溝および掘立柱建物跡が確認された。これまでの第１次調査および第３次調査においても同時期の遺構が検出されている。以下では、同様の遺構が検出されており、今宿平野に位置する大塚遺跡と比較して、徳永B遺跡の中世後半期における様相について述べる。

【大塚遺跡】

大塚遺跡は中世前半期において、第５次調査で当該期の居館が見つかっているほか、小規模な集落や墓が点在している。その後、16世紀前半～後半になると、大塚古墳を取り囲む丘陵尾根上に方形区画溝に囲まれた屋敷跡が出現する。大塚遺跡の方形区画群は「一辺30m前後の規模が多く、有力農民層の集落と考えられている。大塚遺跡の方形区画溝を伴う屋敷群も名主などの有力農民層によって営まれたものであり、博多湾岸において、有力大名の大内･大友の対立が激化する不安定な社会情勢下、自衛手段としての集落形態であった考えられる。15世紀以前の集落から連続的に発展するものではなく、15世紀後葉から16世紀前半頃に突如として成立するものであるので、在地領主の管理下で組織され、計画的に配置された村落であると考えられ」(『大塚遺跡５』福岡市教育委員会2012)、これらの村落は16世紀後半には衰退していく。

【徳永B遺跡】

第１次調査（旧・徳永遺跡Ｉ区）：遺構は中世の土坑１基、方形区画溝、道路状遺構があり、他は近世以降の撹乱あるいは畑地耕作に伴う畦畔等で明瞭な遺構ない。出土遺物は、肥前系染付磁器、青花、白磁、青白磁がある。これらの遺構の時期は、16世紀中頃～近世であると考えられる。

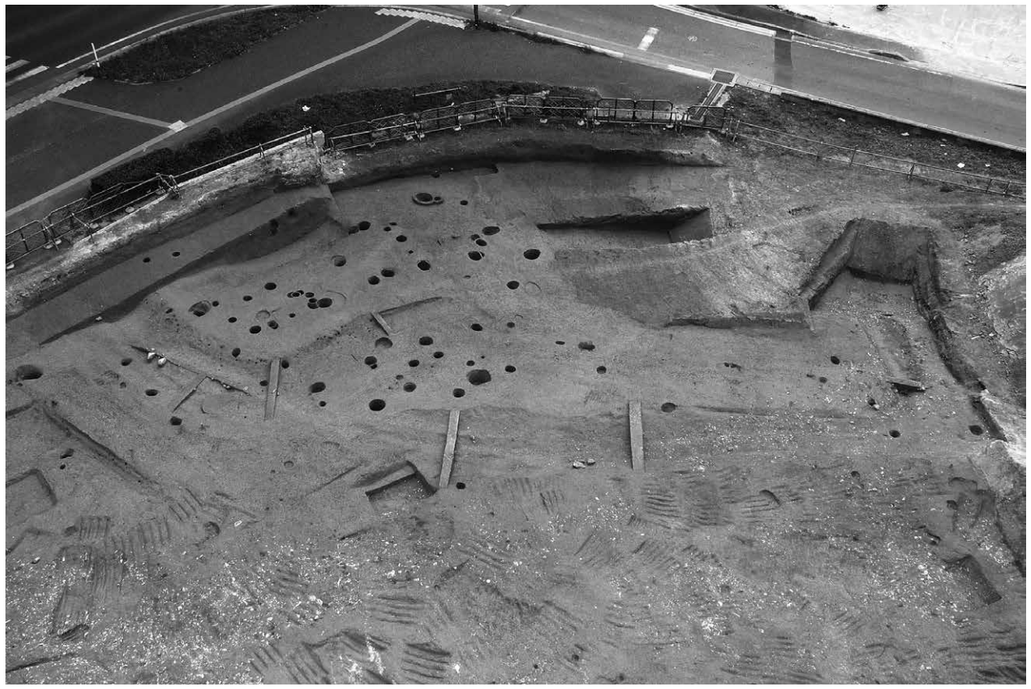
第３次調査：東側壇状地で検出された中世末の一辺が約15mの方形区画溝のほかに、南側平坦地においては柱穴、土坑等が分布している。16世紀後半～近世にかけての遺構である。

第４次調査：1区において、区画溝および掘立柱建物が確認されている。２・３区では明確に中世と言える遺構は見つかっていないが、中世に比定される遺物が出土していることから、中世の遺構が存在していた可能性は高い。

以上を踏まえて、徳永B遺跡の中世後半期における様相はどのようなものだったのであろうか。本遺跡においては、中世前半期における遺構・遺物はあまり見つかっておらず、人々の生活の痕跡は見いだせるものの、それほど大きな集落を形成していたわけではなさそうである。それが中世後半期になると、大塚遺跡よりは規模は小さいものの、方形区画溝に囲まれた建物が出現する。『筑前國続風土記附録』巻之（四十一）の徳永村の項目には、「高祖山の北の麓にあり。原田氏繁栄なりし時は、家士の居宅有しとそ。今も村中に屋形所といふ字残れり。徳永土佐入道といふ者の墓民家の傍にあり。徳永氏か宅地に末裔今も居れり」と記載されている。「原田氏繁栄なりし時」を、原田氏が拠点としていた高祖城が、「城」として機能していた16世紀中頃以降のことであると仮定すると、この記述と今回検出された遺構の時期は同時期の可能性も考えられる。しかし、本調査１区において16世紀中頃以前の遺物が検出されていることから、原田氏以前にも集落が存在していた可能性は高い。現在、徳永に屋形所という地名を見出すことはできず、『続風土記附録』に記されている場所がどこなのか特定することはできないが、本調査区で検出された区画溝および掘立柱建物は、「在地領主の管理下で組織され」た原田氏の家臣の屋敷地、または有力農民層の屋敷地であった可能性を考えてもよいと思われる。今後の調査において、当該期における徳永地域の様相の解明がすすむことを期待したい。

１区

(1)調査区全景（西から）

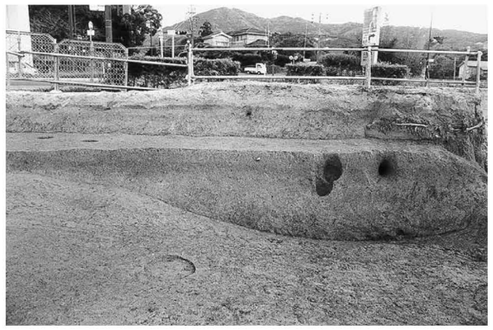


(2)調査区南側（北東から）

１区

(1)調査区南側（東から）

(2)調査区南壁東側土層（北から）

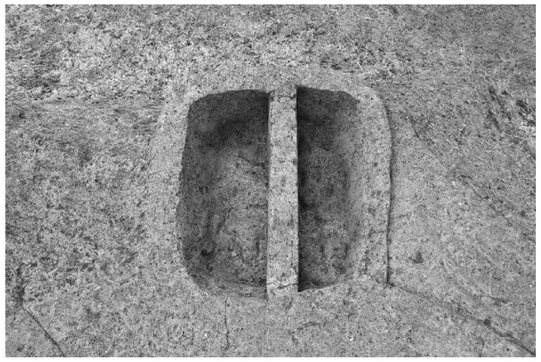


(3)調査区南壁西側土層（北から）

１区

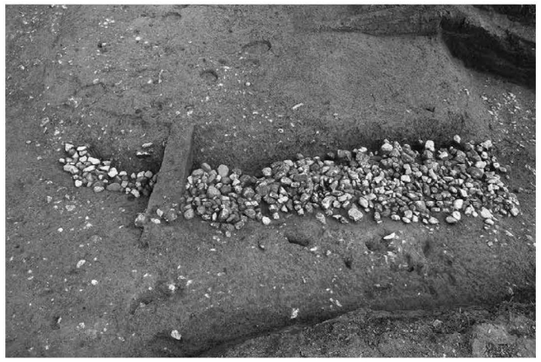
(1)SK003（北から）

(2)SK004（北から）

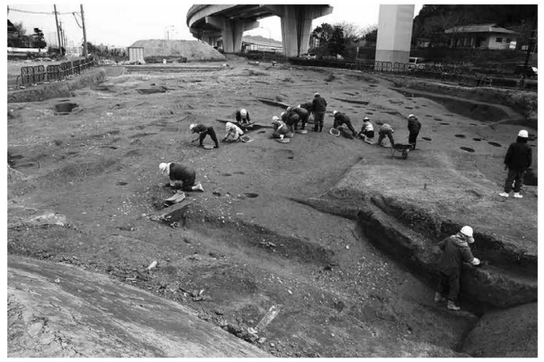


(3)SK005（北から）

(4)SD002中央部（南東から）

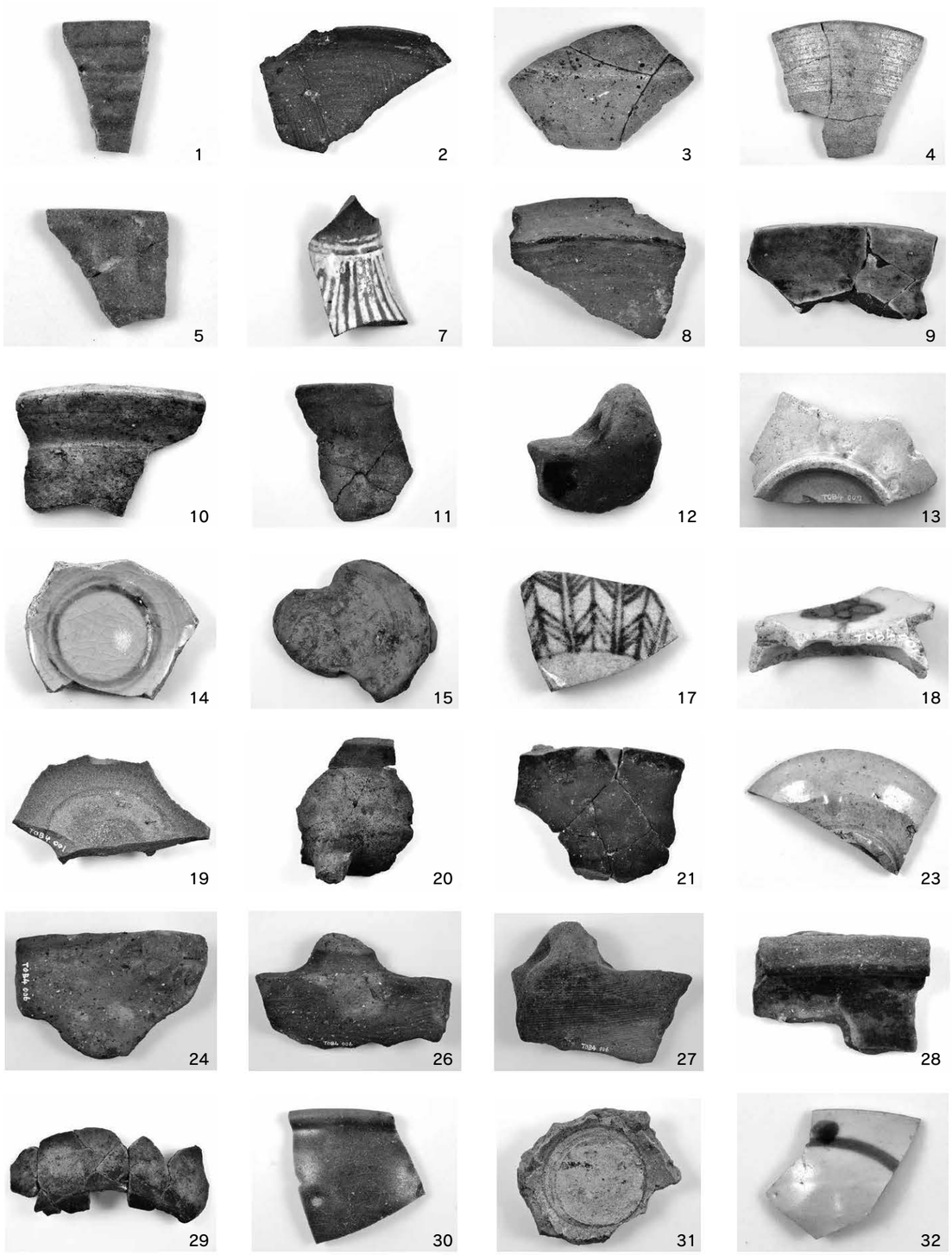


(5)SD002西側（西から）



(6)作業風景（西から）

１区



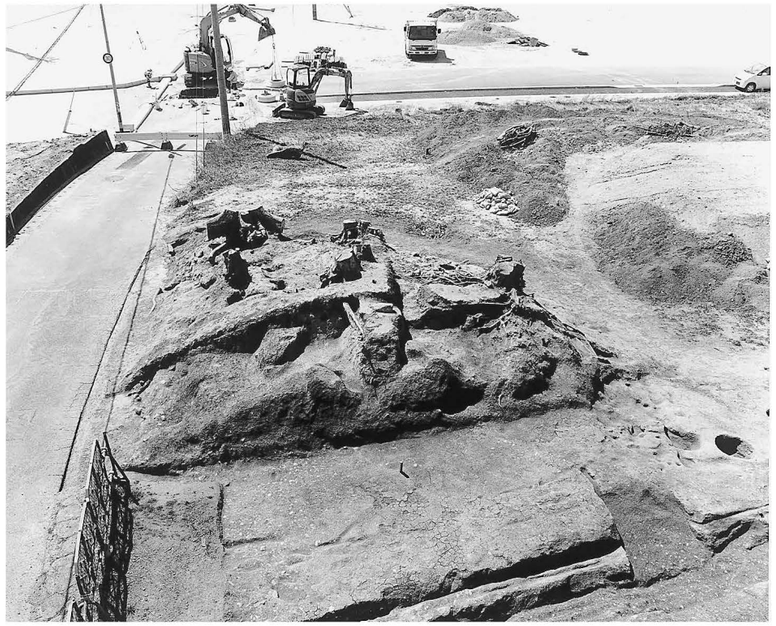
出土遺物

２区

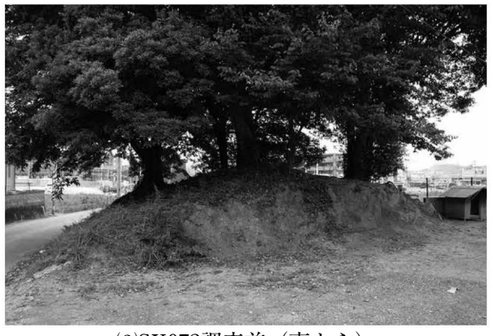
⑴上面全景（東から。丸隈山古墳と可也山を望む。）

⑵上面全景（南から）

２区



⑴SX072（東から）



⑵SX072調査前（東から）

⑶SX072土層（東から）

⑷SX072土層（南から）

⑸SX073（南東から）

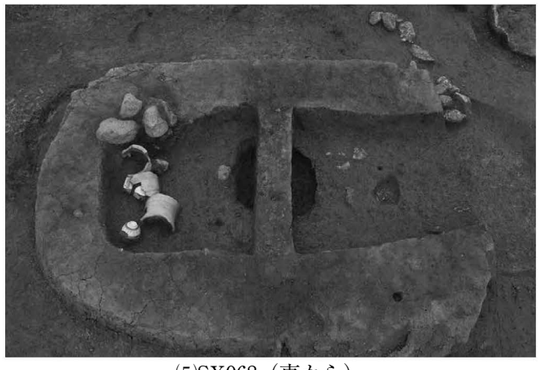
２区

⑴調査区東壁南側土層（西から）

⑵SX050・051土層（南東から）

⑶調査区中央ベルト南側土層（東から）

⑷調査区中央ベルト北側土層（東から）

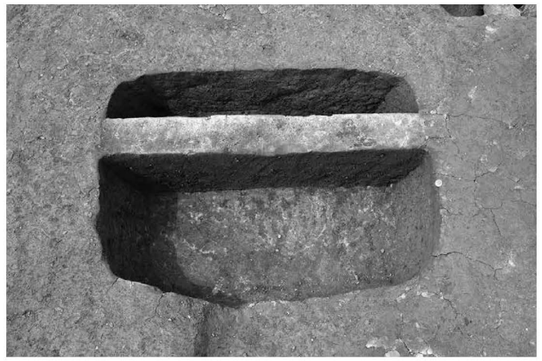


⑸SX068（東から）

⑹SK071（東から）

２区

⑴SK074（北から）



⑵SK080（東から）

⑶SK081（東から）

⑷SD054・052（東から）

⑸SD097（東から）

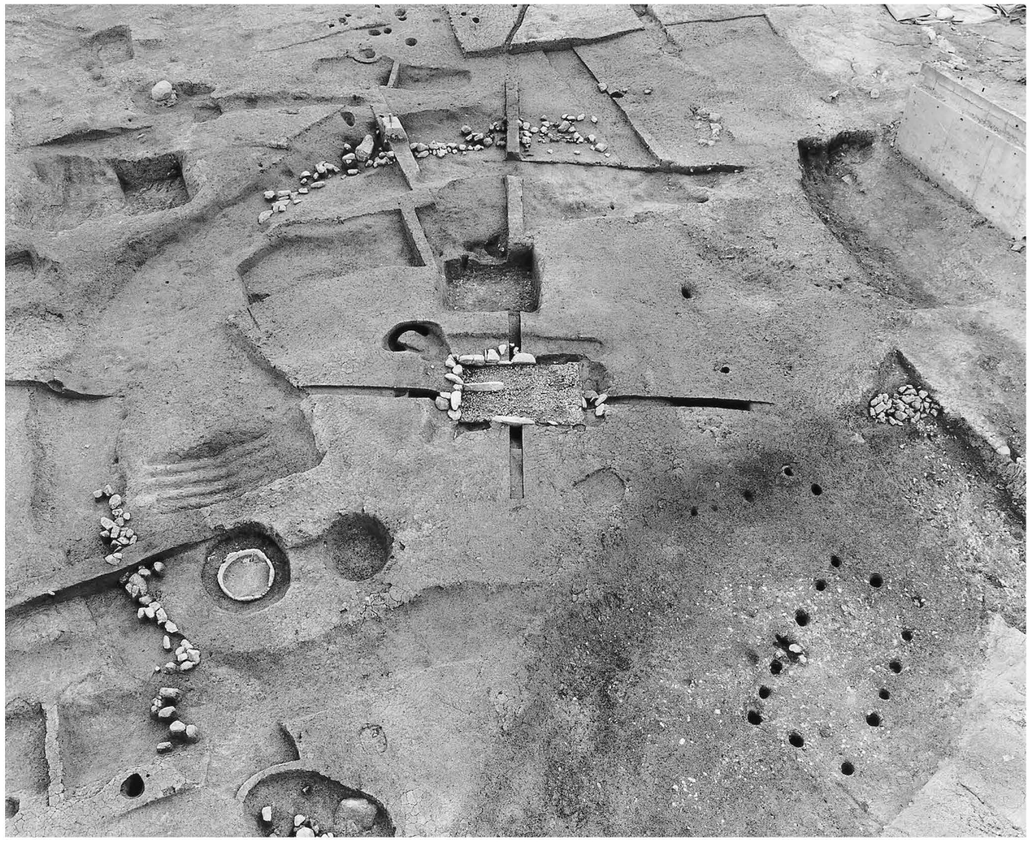
⑹SK069（南東から）

２区

⑴３号墳（南東から。可也山と糸島半島を望む。）

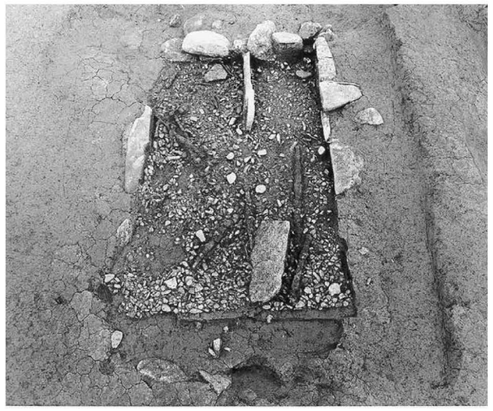
⑵３・４号墳（北から）

2区



(1)3号墳（東から）

(2)3号墳石室検出（北から）



(3)3号墳石室遺物出土（北から）

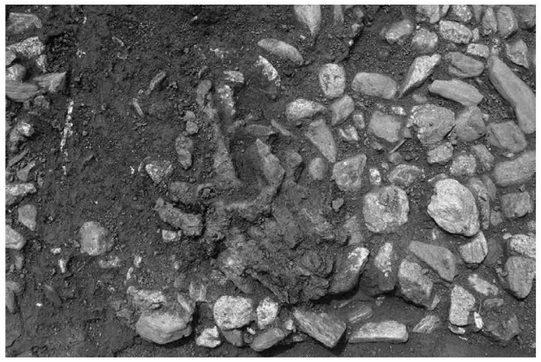
2区

(1)3号墳石室東区南側遺物出土（東から）

(2)3号墳石室東区北側遺物出土（東から）

(3)3号墳石室西区北側遺物出土（西から）

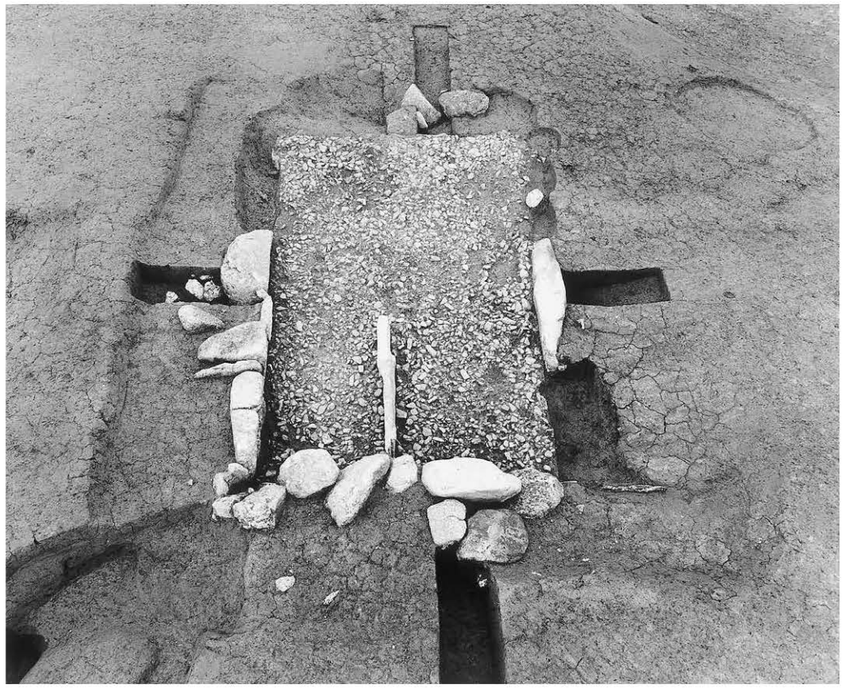
(4)3号墳石室西区南側遺物出土（西から）



(5)3号墳石室西区蕨手刀子出土（北から）

(6)3号墳石室西区北側臼玉・鉄線出土（北から）

2区



⑴3号墳石室（南から）

⑵3号墳石室（北東から）

2区

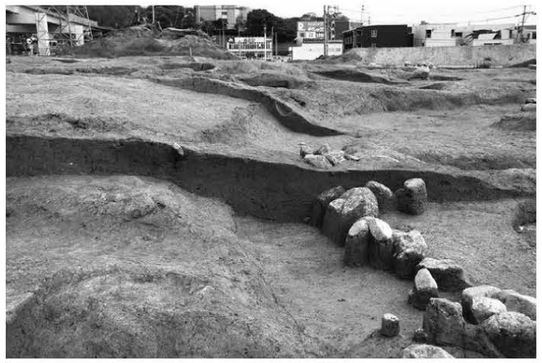
⑴3号墳石室掘方（南から）

⑵3号墳石室掘方（東から）

2区

⑴3号墳石室西側土層（南から）

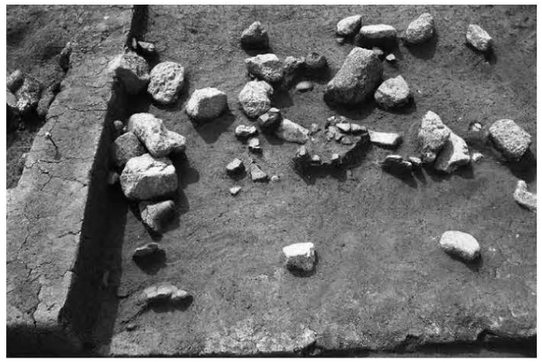
⑵3号墳石室北側土層（東から）



⑶3号墳周溝土層D（東から）

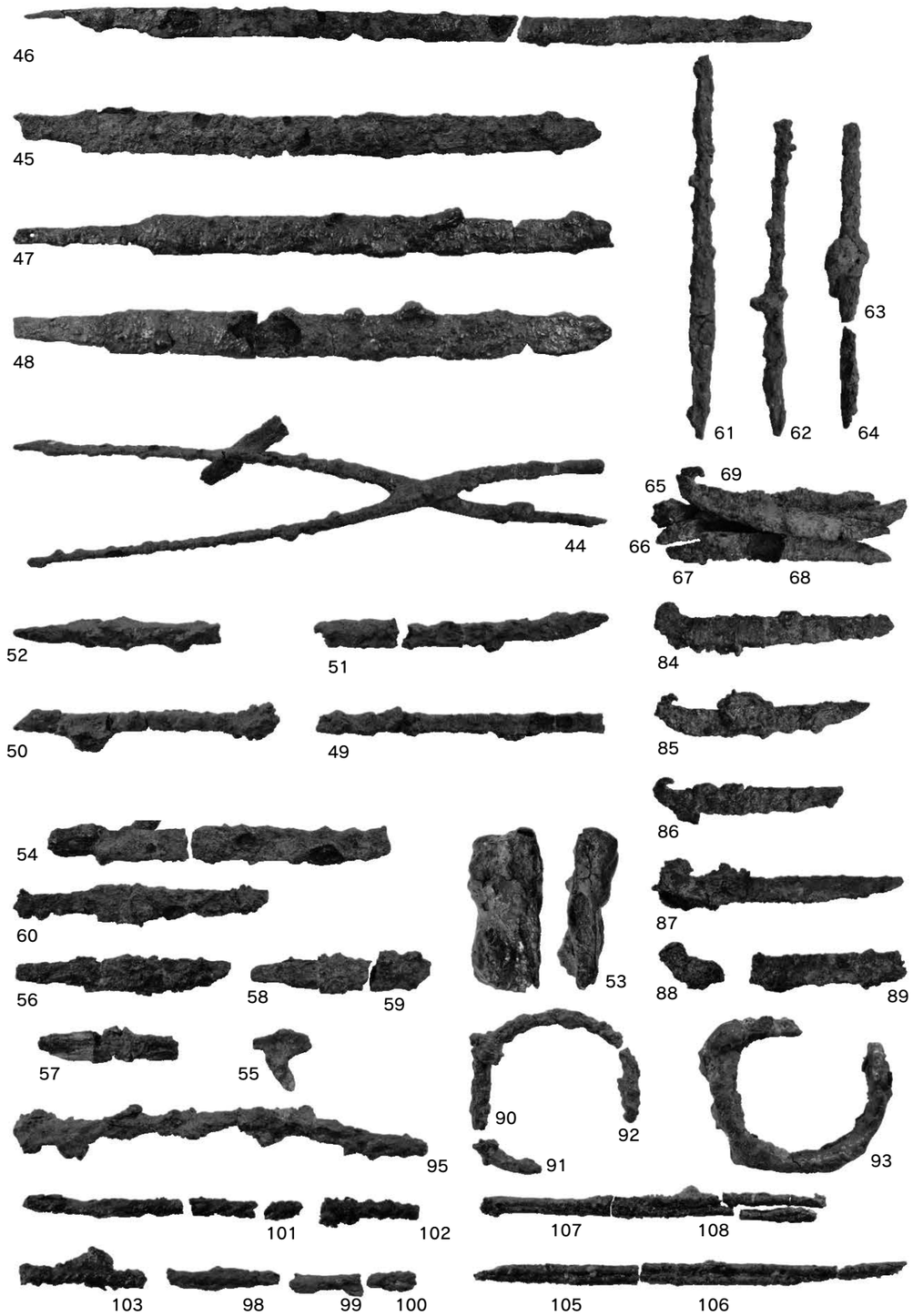
⑷3号墳周溝土層C（東から）

⑸3号墳周溝土師器壺出土（東から）



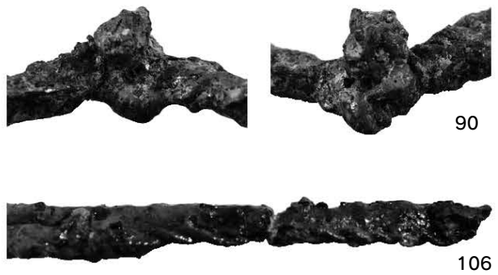
⑹3号墳周溝土師器高坏出土（東から）

2区

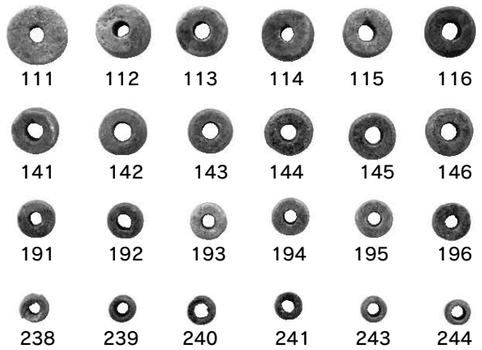


3号墳石室出土鉄器

2区

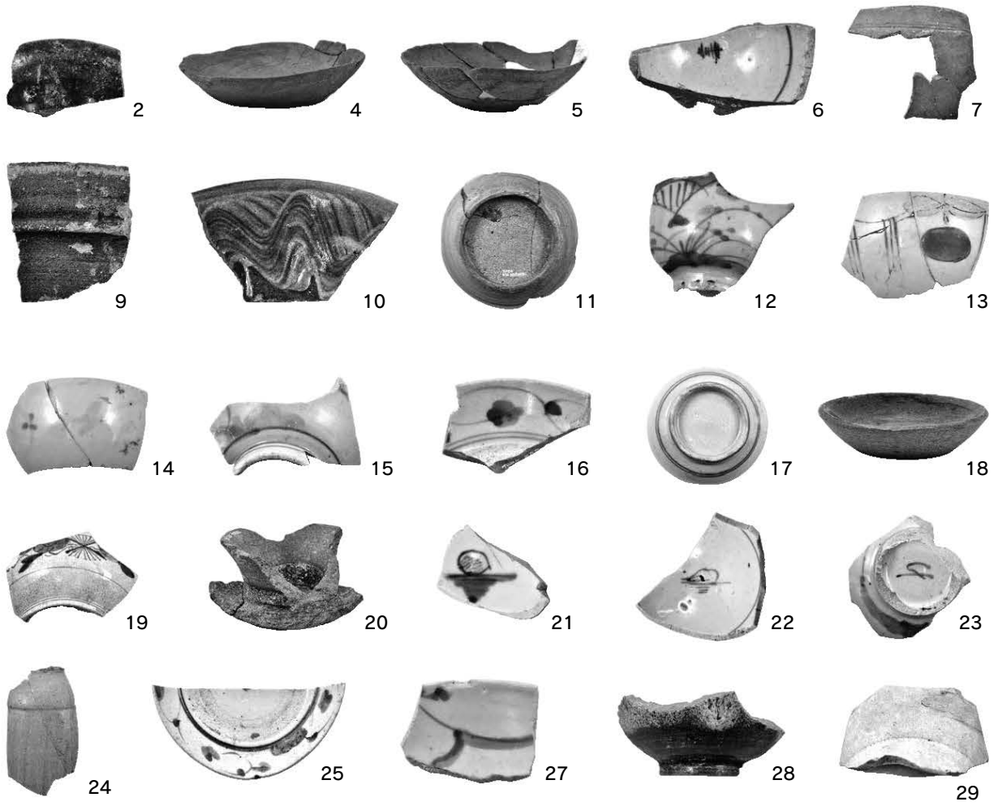


(1)3号墳出土鉄線（拡大）



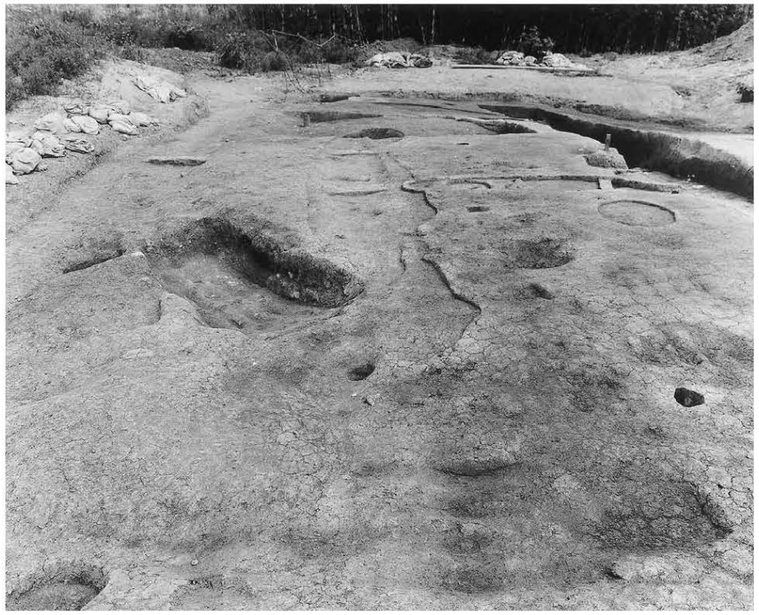
(2)3号墳出土滑石製臼玉

(3)3号墳周溝出土土師器

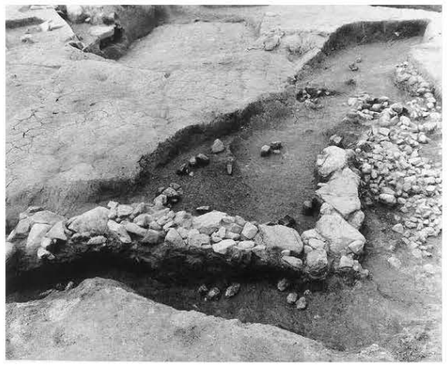


(4)出土遺物

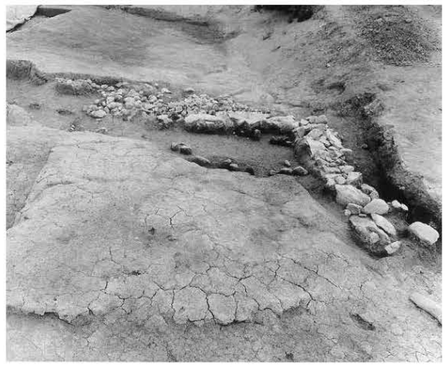
2区



(1)調査区北側上面（南から）



(2)SX306（東から）



(3)SX306（南から）

(4)4号墳周溝（西から）

(5)4号墳周溝（南西から）

2区

(1)4号墳石室検出状況（北から）

(2)4号墳石室完掘状況（北西から）

(3)4号墳石室奥壁（北から）

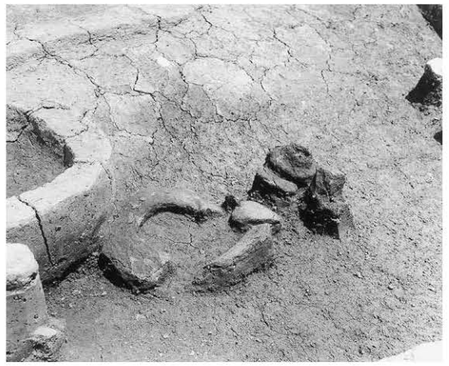
(4)4号墳石室（北東から）

(5)4号墳石室（北から）

(6)4号墳石室掘方

2区

(1)4号墳周溝内土師器出土状況（南西から）



(2)4号墳周溝内遺物出土状況（南から）

(3)4号墳周溝断面（南西側）

(4)4号墳周溝（南東側）

(5)4号墳全景（北東から）

２区

(1)調査区上空から南側を望む

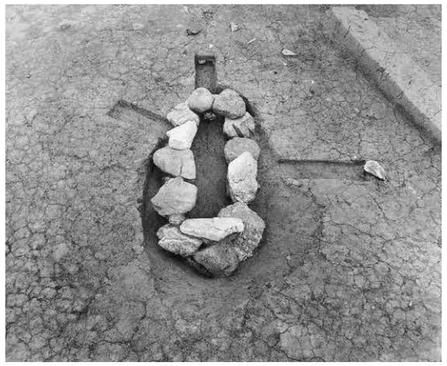
(2)調査区上空から西側を望む

(3)３・４号墳・小石室全景（北東上空から）

(4)調査区上空から東側を望む

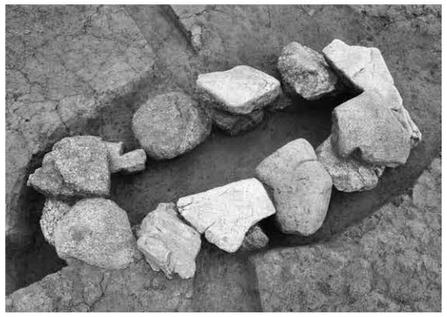
(5)３・４号墳・小石室全景（南上空から）

２区



(1)小石室（西から）

(2)小石室掘方（北から）



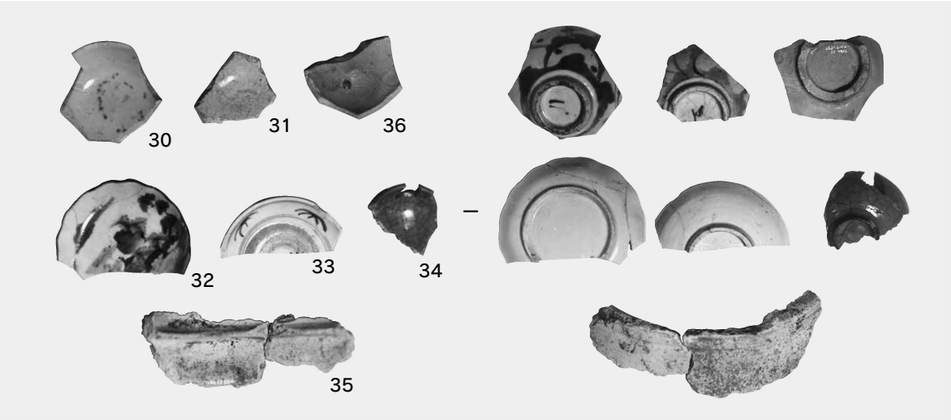
(3)小石室（南東から）

(4)土壙墓（南西から）

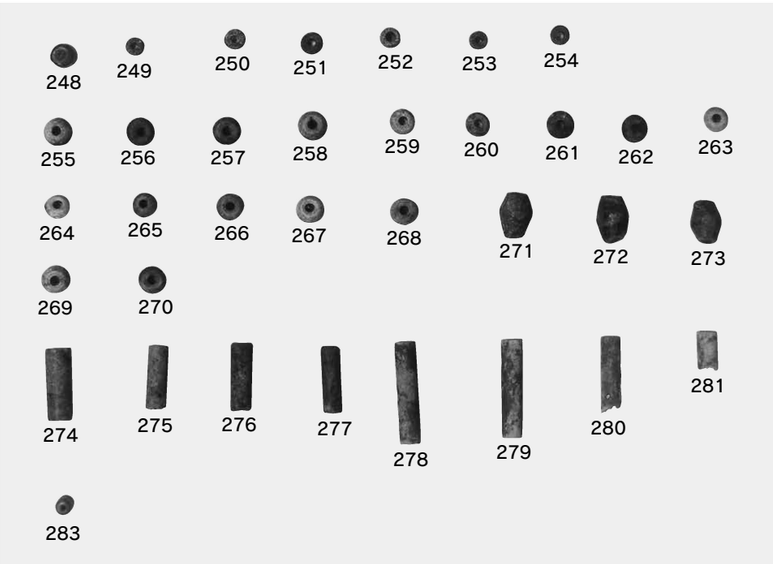
(5)土壙墓（北東から）

(6)土壙墓掘方（北東から）

2区



(1)SX306出土遺物

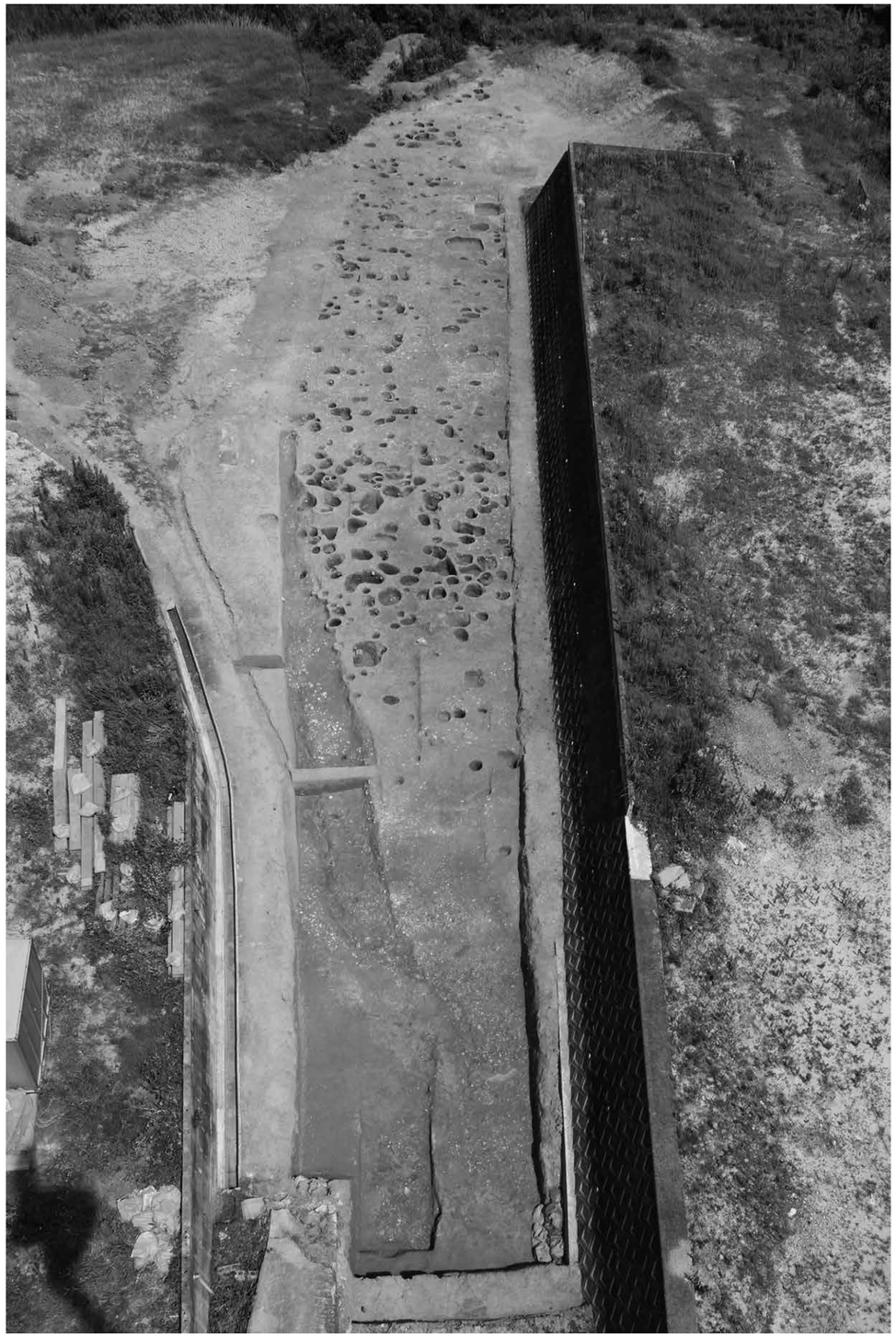


(2)4号墳出土玉類

(3)4号墳周溝出土土師器

(4)4号墳埋土出土石鏃

3区



調査区全景（南から）

３区

⑴SK110（南から）

⑵SK001（南から）

⑶SD007（南から）

⑷出土遺物

⑸SK110出土遺物

⑹SK001出土遺物

⑺SK004出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	とくながBいせき　３
書　名	徳永B遺跡　３
副書名	―第４次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1229集
編著者名	福薗美由紀（編）　井上繭子　　板倉有大
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2014年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
徳永B遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくとくなが 西区徳永	40130	2585	33°34′30″	130°15′33″	2011. 11. 15 ～ 2012. 08. 31	2514㎡	土地区画整理 記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳永B遺跡 １区	集落	中世～近世	掘立柱建物跡・土坑・溝・包含層	土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器・石器	
２区	集落 古墳	縄文時代、古墳時代、中世～近世	包含層、円墳２基・小石室・土壙墓・柱穴・土坑・溝・包含層	石器・土師器・鉄器・玉類、土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器・須恵器	３号墳石室から豊富な副葬鉄器が出土した。
３区	集落	中世～近世	掘立柱建物跡・溝	土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器	

要　約

１・２区は本来丘陵上に形成されていた中世集落が、近世以降の開発によって削平され、東西の谷へ向かう緩斜面に遺構が残った状態であった。一字一石経塚があったと伝えられる高まりは、近世の開発時に残丘として残されて祀られたと考えられる。

１区では、南西緩斜面上で中世の溝・柱穴を確認した。２区では、近世～近代の溝・土坑・柱穴・石組・塚跡（伝一字一石経塚）のほか、円墳２基（石室・周溝）を検出した。うち一基は直径15mほどで、石室は小円礫敷きの床の中央に仕切りの板石を設ける。もう一基は直径９ｍほどの幅の狭い竪穴式石室である。石室内からは鉄鉗・大刀・刀子などの鉄器、碧玉・滑石の玉類が出土した。これらは、５世紀前半の築造と考えられ、鉄器生産に関わる被葬者の性格や、４～６世紀の首長墳(国指定史跡今宿古墳群)との関連などが重要である。

３区南側も１・２区同様、近世以降に削平されているが、北側では15・16世紀～19世紀頃にかけて営まれた集落跡が検出された。

現地説明会の様子

徳永B遺跡　3

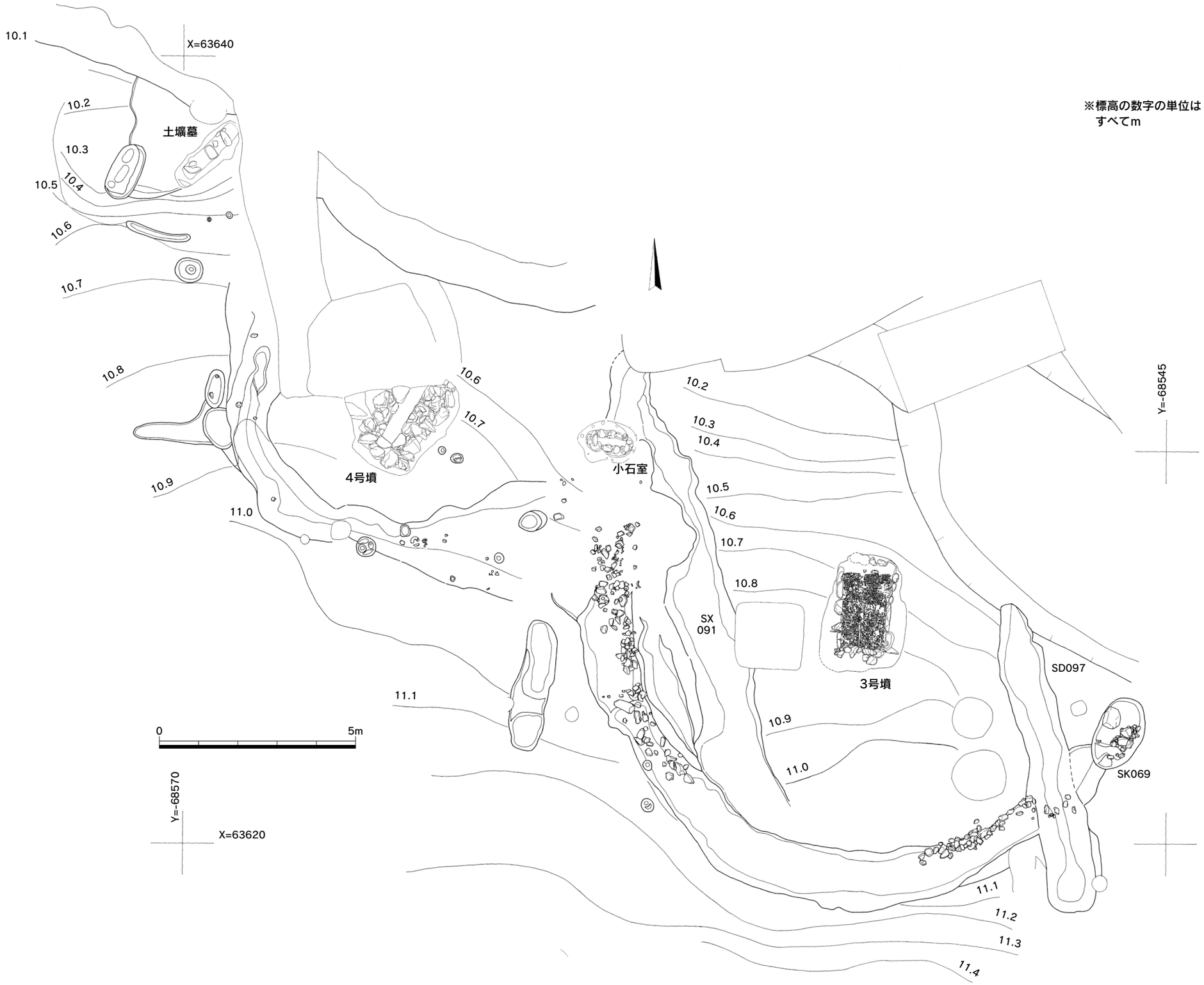
―第４次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1229集

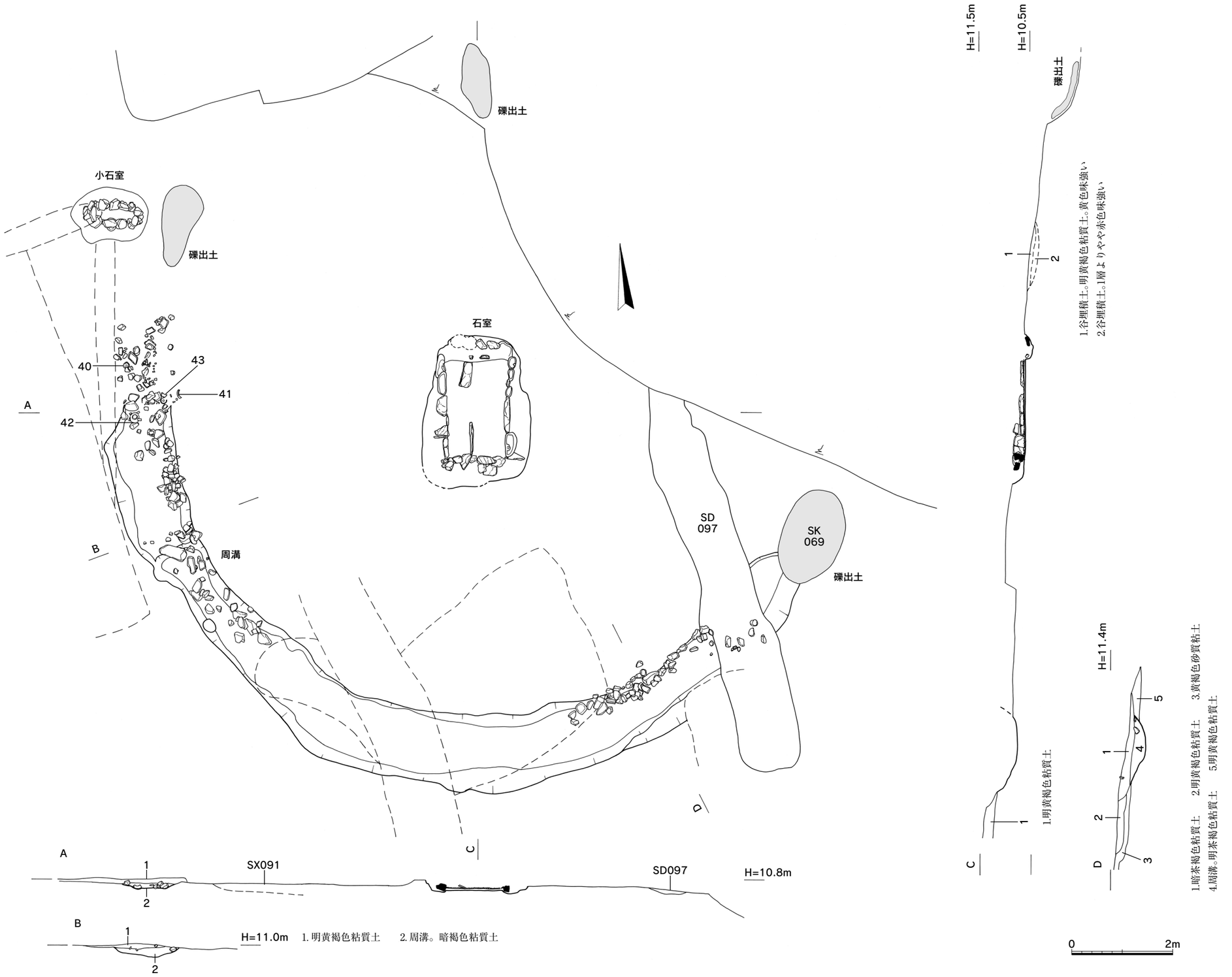
2014（平成26）年３月24日発行

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
☎（092）711－4667

印　刷　大野印刷株式会社
福岡市博多区榎田２－２－65
☎（092）414－1515



第19図　3・4号墳・小石室・土壙墓平面配置図（1/100）



第20図　３号墳実測図（1/80）